

八尾市文化財調査報告57  
平成19年度国庫補助事業

# 八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書

2008年3月

八尾市教育委員会



## 八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書 正誤表

ページ	行	誤	正
7ページ	1～2行目	横位ミガミガキ。	横位ミガキ。
26ページ	11行目	底部分可能性	底部分の可能性
31ページ	2行目	きたものと考えられる。	きたものと考えられる。

## はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地西麓から大阪平野東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは、河内潟、河内湖に面し、旧大和川の支流となる多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数の遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書は、当教育委員会が平成19年度に(財)八尾市文化財調査研究会に委託して実施した市内の周知の埋蔵文化財包蔵地における個人住宅等の建設に伴う発掘調査や民間の各種事業の開発工事等に伴う遺構確認調査の成果を収めております。

中田遺跡では、古墳時代初頭の吉備（現在の岡山県）などから搬入された土器を多数含む遺構を確認し、久宝寺寺内町では、寺内町の町割りに関連する遺構を検出し、成法寺遺跡では、江戸時代の地鎮遺構を確認するなど、事前の遺構確認調査等において、弥生時代から近世まで、様々な遺跡・遺構の広がりを確認できる貴重な成果が得られました。

今後、市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめとして、多くの人々に親しまれるように、保存・活用されていくことが文化財行政の重要な課題となります。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際して、ご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

八尾市教育委員会  
教育長 中原敏博

## 例 言

1. 本書は、平成19年度の国庫補助事業（市内遺跡発掘調査）として、大阪府八尾市内で実施した発掘調査の報告書である。
2. これらの調査は、八尾市教育委員会が平成19年度に(財)八尾市文化財調査研究会へ委託して実施したものである。
3. 本書には、平成19年度に実施した埋蔵文化財包蔵地の発掘調査及び遺構確認調査と埋蔵文化財包蔵地外の試掘調査のうち、平成19年4月から12月までに実施した調査と、平成18年度に実施した平成19年1月から3月までの調査について掲載している（掲載順序は遺跡名の五十音順となっている）。特に成果のあった調査については、その概要を掲載している。  
また、平成18年度の国庫補助事業の市内遺跡発掘調査で実施した出土遺物保存処理事業の成果についても掲載している。
4. 調査した場所及び位置については、巻頭に一括して位置図を掲載している。
5. 本書の作成にあたっては、八尾市教育委員会の藤井淳弘、(財)八尾市文化財調査研究会の高萩千秋・坪田真一・成海佳子・西村公助・樋口薫・荒川和哉・菊井佳弥・河村恵理、(財)元興寺文化財研究所の藤田浩明・木沢直子・井上美知子が執筆を行い、執筆分担は目次末に記した。
6. 本書に掲載している出土品及び図面は、埋蔵文化財の活用資するため八尾市立埋蔵文化財調査センター（八尾市幸町4丁目58-2）において保管している。
7. 本書の編集は、八尾市教育委員会 生涯学習部文化財課が行った。

# 本文目次

はじめに

例言

1. 平成18年度1～3月の発掘調査	1
平成18年度1～3月の発掘調査地位位置図I～IV 第1～4図	1～4
表1 平成18年度1～3月の発掘調査一覧	5
1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査	(樋口) 5
1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査	(荒川) 7
1-3 東郷遺跡(2006-289)の調査	(成海) 9
1-4 東郷遺跡(2006-462)の調査	(樋口) 10
1-5 中田遺跡(2006-372)の調査	(坪田) 11
1-6 西郡廃寺(2006-190)の調査	(西村) 14
1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査	(荒川) 15
2. 平成19年度4～12月の発掘調査	17
平成19年度4～12月の発掘調査地位位置図I～VI 第18～23図	17～22
表2 平成19年度4～12月の発掘調査一覧 1	23
表3 平成19年度4～12月の発掘調査一覧 2	24
2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査	(樋口) 25
2-2 恩智遺跡(2007-1)の調査	(成海) 27
2-3 萱振遺跡(2007-60)の調査	(西村) 28
2-4 木の本遺跡(2006-261・2007-102・2007-133)の調査	(樋口) 29
2-5 久宝寺遺跡(2007-181)の調査	(荒川) 30
2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査	(荒川) 31
2-7 小阪合遺跡(2007-125)の調査	(成海) 33
2-8 成法寺遺跡(2007-137)の調査	(西村) 34
2-9 成法寺遺跡(2007-202)の調査	(成海) 35
2-10 成法寺遺跡(2007-268)の調査	(樋口) 37
2-11 成法寺遺跡(2007-343)の調査	(坪田) 37
2-12 東郷遺跡(2007-49)の調査	(荒川) 39
2-13 東郷遺跡(2007-209)の調査	(西村) 40
2-14 西郡廃寺(2007-44)の調査	(成海) 41
2-15 西郡廃寺(2007-184)の調査	(高萩) 42
2-16 西郡廃寺(2007-334)の調査	(樋口) 42
2-17 美園遺跡(2007-38)の調査	(西村) 44
2-18 八尾寺内町遺跡隣接地(2006-522)の調査	(西村) 45
2-19 矢作遺跡(2007-119)の調査	(成海) 46
2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査	(荒川) 47
3. 平成18年度保存処理事業報告	49
1 保存処理事業の概要	(藤井) 49
2 東郷遺跡第64次調査の出土木製品について	(坪田・菊井・河村) 49
3 東郷遺跡第64次調査の出土木製品の保存処理	(藤田・木沢・井上) 56

## 図 版 目 次

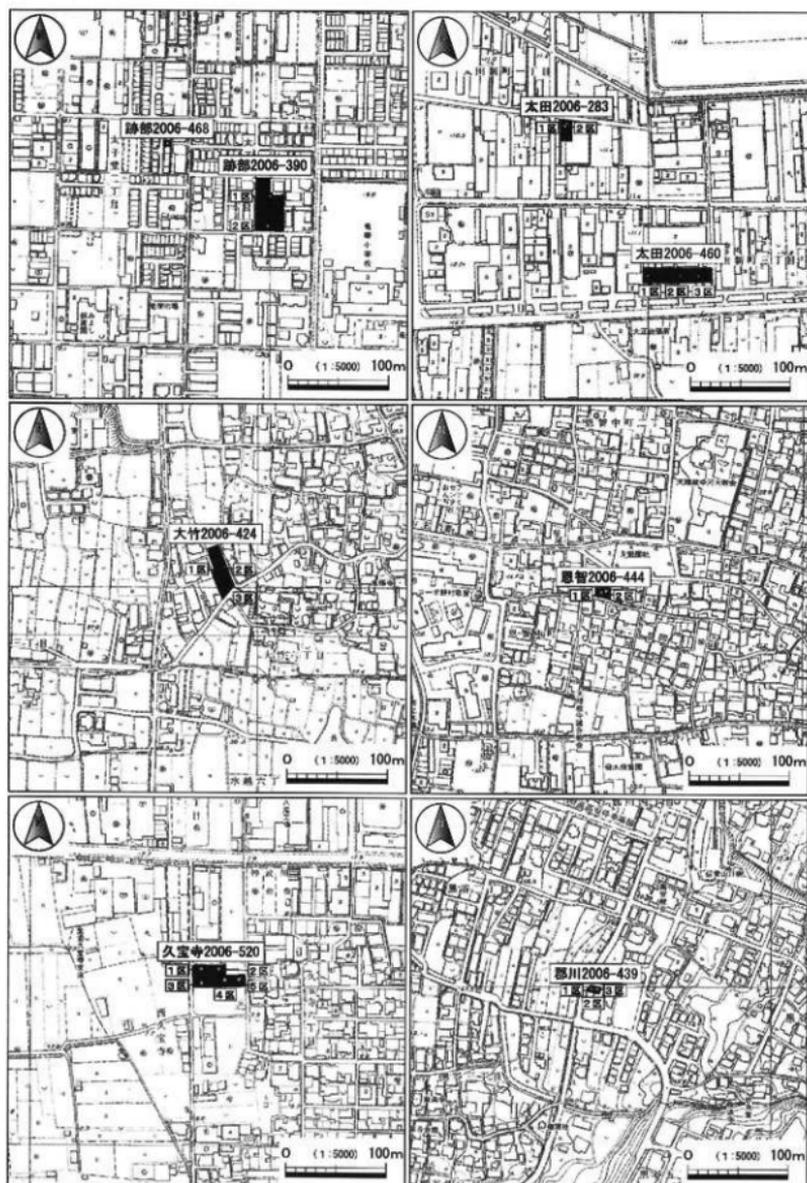
図版 1	1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査 (周辺状況：南西から) 1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査 出土遺物	1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査 (周辺状況：南西から)
図版 2	1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査 (周辺状況：南東から) 1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査 (4区：北西から) 1-3 東郷遺跡(2006-289)の調査 (周辺状況：南東から) 1-4 東郷遺跡(2006-462)の調査 (周辺状況：東から)	1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査 (2区：南から) 1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査 (5区東壁：西から) 1-3 東郷遺跡(2006-289)の調査 (2区：東から) 1-4 東郷遺跡(2006-462)の調査 (1区西壁：北東から)
図版 3	1-5 中田遺跡(2006-372)の調査 (3区：東から) 1-5 中田遺跡(2006-372)の調査 出土遺物	1-5 中田遺跡(2006-372)の調査 (3区：西から)
図版 4	1-6 西部庵寺(2006-190)の調査 (1区調査風景：北から) 1-6 西部庵寺(2006-190)の調査 (3区：東から) 1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査 (1区西壁：東から) 1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査 (3区北壁：南から)	1-6 西部庵寺(2006-190)の調査 (2区：東から) 1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査 (周辺状況：北東から) 1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査 (2区西壁：東から) 1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査 (4区北壁：南から)
図版 5	2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査 (周辺状況：北西から) 2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査 (2区北壁：南から) 2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査 (1区S P 201：南から) 2-2 恩智遺跡(2007-1)の調査 (周辺状況：北から)	2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査 (1区北壁：南から) 2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査 (3区北壁：南西から) 2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査 (1区S P 204：西から) 2-2 恩智遺跡(2007-1)の調査 (2区南壁：北東から)
図版 6	2-3 萱振遺跡(2006-60)の調査 (1区：東から) 2-4 木の本遺跡 (2006-261・2007-102・2007-133)の調査 (周辺状況：南西から) 2-4 木の本遺跡 (2006-261・2007-102・2007-133)の調査 (6区南壁：北から)	2-3 萱振遺跡(2006-60)の調査 (2区：東から) 2-4 木の本遺跡 (2006-261・2007-102・2007-133)の調査 (2区北壁：南から) 2-4 木の本遺跡 (2006-261・2007-102・2007-133)の調査 (7区南壁：北東から)

	2-4	木の本遺跡 (2006-261・2007-102・2007-133)の調査 (12区南壁：北から)	2-4	木の本遺跡 (2006-261・2007-102・2007-133)の調査 (15区東壁：西から)
図版7	2-5	久宝寺遺跡(2007-181)の調査 (周辺状況：南西から)	2-5	久宝寺遺跡(2007-181)の調査 (1区西壁：東から)
	2-5	久宝寺遺跡(2007-181)の調査 (2区北壁：南から)	2-5	久宝寺遺跡(2007-181)の調査 (3区北壁：南から)
	2-6	久宝寺寺内町 (2007-134)の調査 (周辺状況：南西から)	2-6	久宝寺寺内町 (2007-134)の調査 (1区西壁：東から)
	2-6	久宝寺寺内町 (2007-134)の調査 (1区：南西から)	2-6	久宝寺寺内町 (2007-134)の調査 (2区：南から)
図版8	2-6	久宝寺寺内町 (2007-134)の調査 出土遺物Ⅰ		
図版9	2-6	久宝寺寺内町 (2007-134)の調査 出土遺物Ⅱ		
図版10	2-7	小阪合遺跡(2007-125)の調査 (周辺状況：南西から)	2-7	小阪合遺跡(2007-125)の調査 (2区調査風景：南から)
	2-8	成法寺遺跡(2007-137)の調査 (1区西壁：東から)	2-8	成法寺遺跡(2007-137)の調査 (2区西壁：東から)
	2-9	成法寺遺跡(2007-202)の調査 (周辺状況：西から)	2-9	成法寺遺跡(2007-202)の調査 (1区：南から)
	2-9	成法寺遺跡(2007-202)の調査 (2区：南東から)	2-9	成法寺遺跡(2007-202)の調査 (3区：南から)
図版11	2-10	成法寺遺跡(2007-268)の調査 (周辺状況：南西から)	2-10	成法寺遺跡(2007-268)の調査 (1区北壁：南東から)
	2-10	成法寺遺跡(2007-268)の調査 (2区SD1：南から)	2-10	成法寺遺跡(2007-268)の調査 (2区北壁：南東から)
	2-11	成法寺遺跡(2007-343)の調査 (2区掘削状況：南西から)	2-11	成法寺遺跡(2007-343)の調査 (2区北壁：南から)
	2-11	成法寺遺跡(2007-343)の調査 (2区南壁：北から)	2-11	成法寺遺跡(2007-343)の調査 出土木製品
図版12	2-12	東郷遺跡(2007-49)の調査 (周辺状況：北西から)	2-12	東郷遺跡(2007-49)の調査 (1区北壁：南から)
	2-12	東郷遺跡(2007-49)の調査 (2区第1面：東から)	2-12	東郷遺跡(2007-49)の調査 (2区第2面：東から)
	2-12	東郷遺跡(2007-49)の調査 (2区北壁：南から)	2-13	東郷遺跡(2007-209)の調査 (周辺状況：南東から)
	2-13	東郷遺跡(2007-209)の調査 (1区：南から)	2-13	東郷遺跡(2007-209)の調査 (3区SK301：南から)

- 図版13 2-14 西郡廃寺(2007-44)の調査  
(周辺状況：東から)
- 2-15 西郡廃寺(2007-184)の調査  
(1区北壁：南西から)
- 2-16 西郡廃寺(2007-334)の調査  
(周辺状況：北西から)
- 2-16 西郡廃寺(2007-334)の調査  
出土遺物
- 図版14 2-18 八尾寺内町遺跡隣接地  
(2006-522)の調査  
(1区：南から)
- 2-19 矢作遺跡(2007-119)の調査  
(周辺状況：南西から)
- 2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査  
(周辺状況：南西から)
- 2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査  
(3区遺物出土状況：西から)

- 2-14 西郡廃寺(2007-44)の調査  
(2区北壁：南から)
- 2-15 西郡廃寺(2007-184)の調査  
(2区北壁：南から)
- 2-16 西郡廃寺(2007-334)の調査  
(2区SD1：南東から)
- 2-17 美園遺跡(2007-38)の調査  
(3区：南から)
- 2-18 八尾寺内町遺跡隣接地  
(2006-522)の調査  
(2区：南から)
- 2-19 矢作遺跡(2007-119)の調査  
(北壁：南から)
- 2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査  
(1区北壁：南から)
- 2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査  
(3区東壁：西から)

## 1. 平成18年度 1～3月の発掘調査



第1図 平成18年度1～3月の調査地位圖 I



第2図 平成18年度1～3月の調査地位置図Ⅱ



第3図 平成18年度1～3月の調査地位置Ⅲ



第4図 平成18年度1～3月の調査地位置図IV

# 1. 平成18年度1～3月の発掘調査

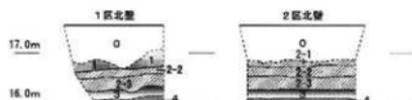
## 平成18年度1～3月の発掘調査一覧

遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	調査目的	調査対象	面積 (㎡)	備考	調査 担当者
新野遺跡 (2006-300)	八尾市太子堂1丁目8番1	2007/2/20	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔：2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ1.6m)	8.0	道路と続く水田耕作上を確認	樋口
新野遺跡 (2006-468)	八尾市太子堂2丁目15番12	2007/3/6	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎：2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	時期不明の湿性堆積物と、低湿な雑草を基盤とした水田耕作上を確認	樋口
太田遺跡 (2006-283)	八尾市人田新町1丁目252	2007/2/2	工場 (遺構確認調査)	建物基礎：2.0m×2.0m×1ヶ所 2.5m×1.0m×1ヶ所(深さ1.0～2.0m)	6.0	古墳時代前期前半に相当する地層を確認	樋口
太田遺跡 (2006-460)	八尾市太田新町3丁目114番	2007/2/26	分譲住宅 (遺構確認調査)	浄化槽：2.0m×2.0m×3ヶ所 2.0m×1.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	12.0	時期不明の水田耕作上を確認	樋口
大竹遺跡 (2006-424)	八尾市大竹6丁目199番1	2007/1/26	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔：2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ1.6m)	12.0	敷地際を確認	樋口
恩智遺跡 (2006-444)	八尾市恩智中町3丁目113番	2007/2/5・6	個人住宅 (免掘調査)	建物基礎：2.0m×2.0m×1ヶ所 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ1.5m)	10.25	本書に掲載【1-1】	樋口
久宝寺遺跡 (2006-520)	八尾市久宝寺6丁目37-5	2007/3/27・28	保育園 (遺構確認調査)	建物基礎：2.5m×2.5m×5ヶ所(深さ2.5m)	31.25	本書に掲載【1-2】	荒川
藤川遺跡 (2006-439)	八尾市岡谷6丁目208番	2007/1/25	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎、浄化槽：1.5m×1.5m×3ヶ所(深さ2.0m)	6.75	本調査地が谷状地形に位置することを確認	樋口
小阪合遺跡 (2006-465)	八尾市南小阪合町1丁目166	2007/3/12	宅地造成 (遺構確認調査)	人孔：2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	中～近世の水田耕作上と現代の河川堆積物を確認	樋口
太子堂遺跡 (2006-429)	八尾市太子堂4丁目79-1	2007/1/30	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔：2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ2.0m)	12.0	狹平野川の前身河川に相当する砂礫層を確認	樋口
太子堂遺跡 (2006-444)	八尾市太子堂5丁目47・48-1	2007/3/22	共同住宅 (遺構確認調査)	浄化槽：2.0m×2.5m×1ヶ所(深さ2.5m)	5.0	時期不明の湿性堆積物と、低湿な雑草を基盤とした水田耕作上を確認	樋口
東原遺跡 (2006-289)	八尾市東4町2丁目20-3、21	2007/1/11	店舗・共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎：3.0m×3.0m×2ヶ所(深さ1.6m)	18.0	本書に掲載【1-3】	成海
東原遺跡 (2006-462)	八尾市長・丘2丁目128-1、129-10	2007/2/27	事務所 (遺構確認調査)	建物基礎：2.0m×2.0m×1ヶ所 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	16.5	本書に掲載【1-4】	樋口
中田遺跡 (2006-372)	八尾市八尾北本町1丁目28	2006/12/15 2007/3/19・20・28 (市長教委人孔・管筋立会)	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔：2.5m×2.5m×2ヶ所 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.5m)	16.5	本書に掲載【1-5】	坪田
中田遺跡 (2006-503)	八尾市別所4丁目318-1の仮、319-1の仮、361の仮、道邊、水路	2007/3/19	分譲住宅 (遺構確認調査)	下水管：2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ2.0m)	12.0	時期不明の湿性堆積物と、低湿な雑草を基盤とした水田耕作上を確認	樋口
西原南寺 (2006-190)	八尾市南原町1丁目64-5、6、7	2007/1/10	工場 (遺構確認調査)	建物基礎：2.5m×2.5m×3ヶ所(深さ2.0m)	18.75	本書に掲載【1-6】	西村
水基遺跡 (2006-321)	八尾市大字新町1丁目1、7番2、7番3	2007/3/2	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔：2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.5	現状地堆積物を確認	樋口
八尾寺内町 (2006-215)	八尾市本町4丁目19-1、19-3、20-1等	2007/1/18	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎：2.5m×2.5m×3ヶ所(深さ2.5m)	18.75	市内町形成期の地層と、それ以前の河川堆積物を確認	西村
八尾寺内町 (2006-437)	八尾市本町2丁目148番1・148番4	2007/2/22-23	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎・構形式駐車場：2.5m×2.5m×1ヶ所 3.0m×3.0m×3ヶ所(深さ3.0～3.5m)	33.25	本書に掲載【1-7】	荒川
矢作遺跡 (2006-467)	八尾市松山町2丁目11番1の一部分	2007/3/1	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎：2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	旧水田耕作上以下において時期不明の水田耕作上を確認	樋口

### 1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡1ヶ所(1区)、平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡1ヶ所(2区)の計2ヶ所について、現地表(T.P.+17.5m前後)下1.5m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(天王の杜北東に位置する市道のT字路中央：T.P.+20.3m)である。

【地層】現地表下0.7m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下1.5m前後までの0.8m間において4層の地層を確認した。1層は黄色シルト～細粒砂。ラミナ構造の発達した水成層である。2層は黄灰色～灰色極粗粒砂～中礫混粘土質シルト～細粒砂。ブロック土で形成された地層



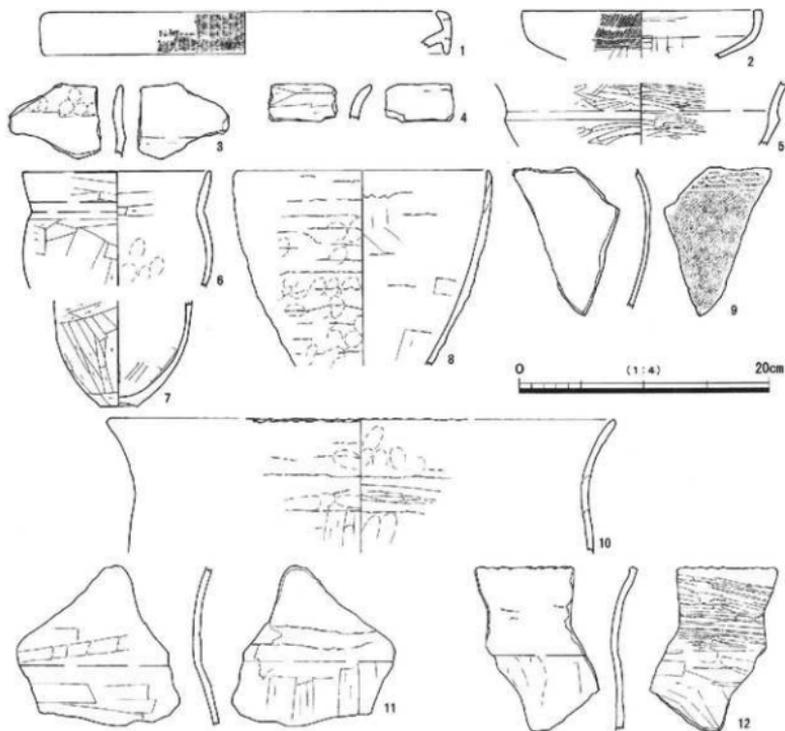
第5図 断面図(S=1/100)

である。下方ほど粒度組成は粗くなる。本層は3層(2-1~2-3層)に細分できた。遺構内埋土の可能性も考えられる。本層には縄文時代晩期の遺物が混在していた。3層は黄褐色~暗灰黄色シルト~極細粒砂(粘土質シルト~シルトブロック(1~3cm大)混在)。下位に存在する4層の土壌化部分に相当する。4層は黄褐色シルト~極細粒砂。自然堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】 検出遺構はなし。

出土遺物は、0層より弥生土器(1・2)、2層より縄文土器(3~12)が出土した。1・2は弥生土器。1は壺の口縁端部で、垂下口縁端部の上位に粘土帯を貼り付け、上方内にも拡張を行う個体である。ほぼ直立する幅広の平坦面には、2帯の糜状文を施した後、刺突文を加えている。内面はナデ調整。2は口縁部と杯部の境界に変化点を有する高杯の口縁端部~杯部。口縁部は直立し、端部には水平な平坦面が見える。口縁部外面には烈点文を2条施す。杯部は縦位ナデ後横位ミガキを行う。内面は主に横ナデ調整である。両者ともに中期(河内IV-2)の特徴を有する。

3~12は縄文土器。この内3・5は浅鉢、4・6~12は深鉢に区分される。3は波状口縁を形成した可能性の高い口唇部~肩部。口縁部は外反気味に直立し、端部は丸い。調整は、肩部外面に横位ケズリを施す以外は横位ナデ。なお頸部には、調整の差異による明瞭な変化点が認められる。4は口唇部~口縁部。口縁部は外反し、端部は丸い。調整は外面が横位ナデ、内面が横位ケズリを施す。5は口縁部が



第6図 出土遺物実測図

大きく外反する個体で、肩部との境界には明瞭な変化点が認められる。調整は、内・外面ともに横位ミガミガキ。6は口唇部～体部中位。口縁部は上外方に直線的に開き、端部は丸く終息する。頸部には変化点が存在し、口縁部と体部を明瞭に区分する。調整は、外面がケズリ後、頸部のみ横位ナデを行い、頸部の屈曲を作り出す。内面はナデを主体に頸部付近のみ横位ケズリを施す。7は体部中位～底部。底部は上げ底である。調整は体部下位が縦位ケズリ、中位が横位ケズリである。内面は板状工具によるナデである。8は口唇部～体部下位。各部位を区分する変化点が存在しない砲弾形を呈する個体である。粘土接合痕は12本確認でき、概ね1cm厚の粘土紐を積み上げながら成形したことが明らかになった。調整は、外面が指頭成形のみ、内面はナデが行われるほか、体部下位において縦位ケズリが施される。外面には二次焼成を受けたことによる煤の付着を確認した。9は龜ヶ岡式に区分される個体の肩部～体部。肩部外面には4条の沈線と刺突文が見えるほか、体部には縄文も施される。内面は左斜位ナデ。10は口唇部～口頸部。口頸部が大きく外反する個体で、口唇部にはD字キザミを加える。調整を見ると、外面は口頸部が縦位ケズリを施す以外は横位ナデが中心である。内面は指頭成形後、口頸部の一部で横位ケズリが行われる。復元口径は40、4cmを測る。外面には粘土接合痕が観察できた。11は口頸部～肩部。外反する口頸部と、若干張る肩部から成る個体で、両部位が反転することで、頸部の変化点を作り出している。調整は肩部外面に縦位ケズリ施されるほか、内面は横位ナデが行われる。口頸部外面には粘土接合痕も見える。12は口唇部～肩部。口縁部は外反しながら上外方に若干開き、肩部の張りが小さい個体で、口唇部にはD字キザミを加える。外面調整は、口縁部に二枚目条痕が見えるほか、肩部は左斜位～横位ケズリを行う。内面は横位ナデである。以上の縄文土器は、概ね縄文時代晩期中葉(滋賀里Ⅲb～Ⅳ式)に帰属するものである。なかには9のように、晩期龜ヶ岡式土器が認められることから、当該期における地域間交流を知る上で注目される。

(2)まとめ：今回の調査地周辺を見渡すと、八尾市教育委員会による恩智遺跡の調査(嶋村1987)をはじめ、研究会による第11次調査(森本2002)が行われ、縄文時代晩期と、弥生時代中期の遺構・遺物を検出してきた。本調査では、既往成果と同様、縄文時代晩期の遺物包含層である2層を確認したほか、弥生時代中期の遺物包含層や遺構基盤層などは、現代の攪乱により破壊・削平を受けた可能性の高いことを確認した。この内2層については、ブロック土により形成された淘汰不良の地層で、遺構内埋土の可能性が高い。遺物は、2層の最下位に相当する2-3層から。縄文時代晩期中葉(滋賀里Ⅲb～Ⅳ式・龜ヶ岡式)に比定される浅鉢、深鉢のほか、サヌカイト細片や獣骨が出土した。これらの成果は、本調査地の北隣の市教委恩智遺跡の調査(嶋村1987)で検出した『土器集積(SW)1』の様相に類似する。したがって、今回の調査における2層と土器集積(SW)1が一連の遺構であった可能性が高くなった。

#### 参考文献

- ・嶋村友子 1987.3 『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書1』-恩智遺跡の調査- 八尾市文化財調査報告14 昭和61年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・森本めぐみ 2002 『4.恩智遺跡第11次調査(OJ2001-11)』『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

## 1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡5ヶ所(北西から南東へ1～5区)について、現地表(T.P.+7.2m前後)下2.5m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西側角の道路上：T.P.+7.9m)である。

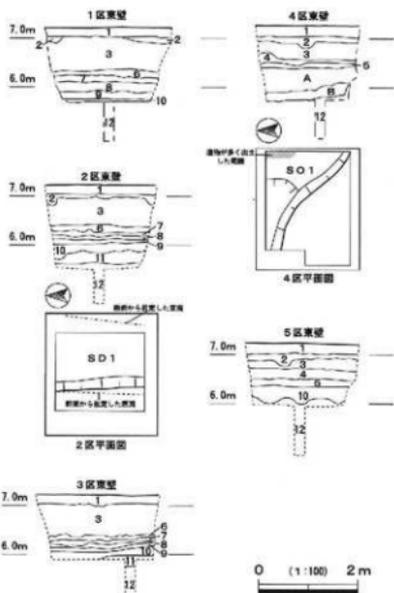
【地層】現地表下2.5m前後までにおいて、13層の地層を確認した。1層は灰オリブ色礫混シルト(現水田耕作土)。2層は灰色中礫混シルト(旧水田耕作土)。3層は2層に分けられ、上部の3-1層は暗灰黄色細粒～極細粒砂質シルト、下部の3-2層は灰黄色極粗粒砂～極細粒砂(洪水堆積層)。4層は灰色シルト(耕作土)で、4区・5区に見られる。5層は灰色極細粒砂粘土質シルト(水田耕作土)で、4区・

5区に見られる。6層は暗オリーブ灰色シルト質粘土で、1～3区で見られる。7層は暗オリーブ灰色中礫混粘土質シルト(2区)～シルト質粘土(1区・3区)。8層は暗オリーブ灰色シルト質粘土で、1区～3区で見られる。9層は暗オリーブ灰色大礫混シルト質粘土。2区では、SD1に堆積する本層から、棒状・板状の木製品が出土。10層は灰色～暗オリーブ灰色を呈する砂礫混泥。古墳時代初頭前半(庄内式古相)の遺物を含む。11層は暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト(2区)～暗オリーブ灰色中礫混シルト。12層は灰色～暗オリーブ灰色を呈する砂礫。西部に行くにつれ粗粒の砂礫が目立つ(河川堆積層)。4区では5層の下位に黒褐色中礫混ブロック状の砂質シルト～粘土質シルト(A層)が見られ、下部から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器が多く出土。A層の下位には、SO1埋土である暗オリーブ灰色径中礫混粘土質シルト(B層)が見られる。

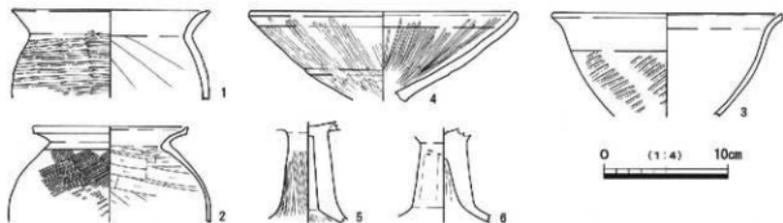
【検出遺構】2区の11層上面で南北に伸びる溝1条(SD1)、4区の12層上面で落込み1ヶ所(SO1)を検出した。SO1の遺構埋土と考えられるA、B層のうち、A層の下部から土器が多く出土した。また、5区東壁で12層を切る10層の窪み、3区東壁で11層を切る10層の落込みを確認し、この付近にも遺構の存在が想定される。各遺構の帰属時期は、SD1が古墳時代初頭、SO1が古墳時代初頭前半以前に比定できる。

【出土遺物】2区9層からは棒状・板状の木製品、4区A層下部からは古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器がまとめて出土した(1～6)。また、各区の10層からは弥生時代後期～古墳時代初頭と推定される土器の破片が出土した。

1・2は甕である。1はV様式系の甕、2は内面にヘラケズリを施した庄内式甕である。3は鉢。外面にタタキ目が残る。4は高杯の杯部。内外面ともに縦方向のヘラミガキを施す。5・6は高杯の脚部。5は外面に縦方向のヘラミガキを施す。



第7図 平・断面図



第8図 出土遺物実測図

(2)まとめ：今回の調査では、調査地中央部付近に遺構・遺物が相対的に多いことが明らかになったほか、11層上面(11層が残らないところでは12層上面)が遺構検出面になることを確認した。遺構・遺物は古墳時代初頭前半とそれ以前のものを中心とする。上層部分では、自然堆積層を除き、水田耕作土と推定され、遺物出土量も僅かであった。

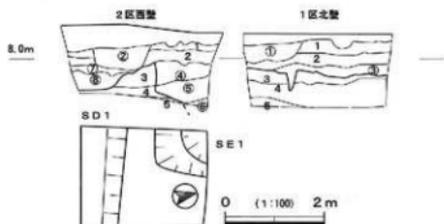
### 1-3 東郷遺跡(2006-289)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0㎡2ヶ所(北から1・2区)について、現地表(T.P.+8.6m前後)下1.6m前後までを調査した。使用した標高は、東側道路の高さ：T.P.+8.3mである。

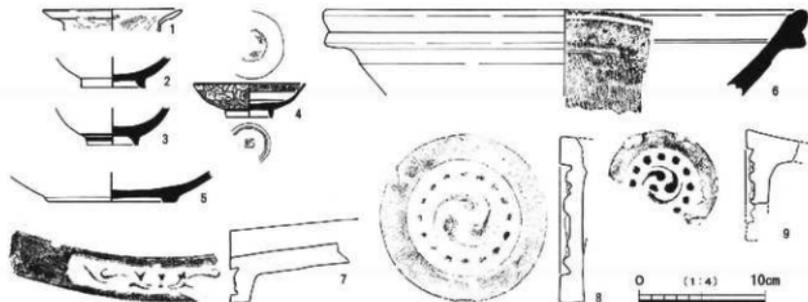
【地層】現地表下0.5m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下1.6m前後までの0.8~1.2m間において5層の地層を確認した。1層は褐色粘土質シルトと灰色粘土質シルトのブロックで、硬く締まる整地層。2層は茶褐色砂質シルトで土器細片が少量含まれる。3層は灰褐色粘土で、近世の遺構構築面である。4層は灰褐色~青灰色の極細粒砂~細粒砂の互層、5層は白灰色粗粒砂~礫の互層で、ともに河川堆積土である。

【検出遺構・出土遺物】1区では3層上面で、遺構内埋土の可能性のある互層(③灰褐色粘土質シルト・炭の互層)が見られた。北壁際で検出したため詳細は不明であるが、東西方向に伸び、深さは0.3m前後を測る。2区では井戸SE1、溝SD1を検出した。SE1は全体の4分の1程度が検出され、復元径は2m程度になる。深さは1m程度まで確認した。埋土は④白灰色粗粒・灰褐色粘土のブロック、⑤白灰色粗粒砂・青灰色粘土の互層、⑥白灰色粗粒砂で、⑥には夥しい量の国産陶磁器1~6や瓦7~9などが出土した。いずれも18世紀頃のものである。Ⅲ4の高台裏面には「龍」の銘と「井」の隔刻が見られる。SD1は、東西に伸びるもので、幅1m以上、深さ0.3mを測る。埋土は⑧灰褐色粘土・褐色粘土のブロックで、内部から土師器小皿1が出土している。土師器小皿1は、15~16世紀頃のいわゆる「へそ皿」である。

(2)まとめ：今回の調査では、T.P.+7.8~7.9m付近の3層上面で近世の井戸や溝を検出した。井戸内部からは18世紀以降の遺物が出土しているが、溝からは15~16世紀頃の土師器小皿の出土もあり、さらに古い時期の生活面の存在も示唆している。



第9図 平・断面図



第10図 出土遺物実測図

## 1-4 東郷遺跡(2007-462)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所と、2.0×2.0m、面積約4.0㎡1ヶ所(西から1～3区)について、現地表(T.P.+8.2m前後)下2.0m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地の南西に位置する府道八尾道明寺線と市道八尾第469号線の十字路中央：T.P.+7.8m)である。

【地層】現地表下0.6～1.1m(一部1.8m)前後までは、現代の擾乱・整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの0.9～1.4m間において12層の地層を確認した。1層は1区で確認した灰色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト～シルト。水田耕作土である。2・3層は2区で確認した暗オリーブ灰色～オリーブ灰色粘土質シルト～シルト。グライ化の顕著な攪拌層である。炭化物のほか、土師器や須恵器、瓦器の細片が混在する。中世以降の水田耕作土である。4・5層は1区で確認した灰黄色粘土質シルト～細粒砂。淘汰不良の硬く締まった地層で、整地層と推測される。6層は1区で確認した黒褐色粘土質シルト。下位に堆積する7層がブロック状に混在する淘汰不良の地層である。土師器・須恵器の細片が混在する。上面において遺構1を確認した。なお、3区では6層に対応する可能性が高い6B層を見たが、淘汰は良好で、土壌化の進行は少ない。7層は1・2区で認められる浅黄色粘土質シルト～シルト。シルト優勢の湿地性堆積層である。上面において遺構2・3を確認した。8～10層はふい黄橙色～灰白色粘土質シルト～シルト。湿地性堆積層である。一部ラミナ構造を有する。11・12層は明黄褐色～灰色粘土質シルト～細礫。下方に向かうほど粗粒化の傾向を強める河川堆積層である。両層ともに、1区に比して2区の方が、上面レベルが高いことから、本調査地の東に河道の流志を求めることが可能である。

【検出遺構】地層断面において遺構を確認した。

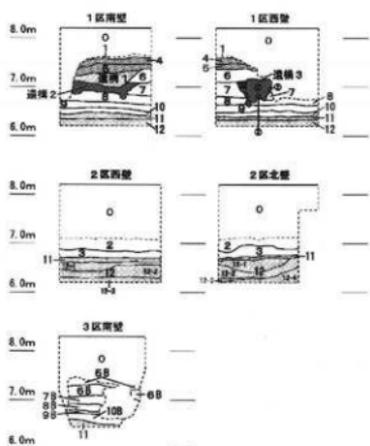
遺構1：1区南壁で確認した6層上面検出である。埋土はラミナ構造の発達した灰黄色粘土質シルト～極粗粒砂である。溝または一時期の流路の可能性が高い。瓦器細片が出土した。

遺構2：1区南壁で確認した7層上面検出である。埋土は黄灰色粘土質シルトのブロック土(3～5cm大：7・8層がブロック状に混在)である。遺物の出土はなし。

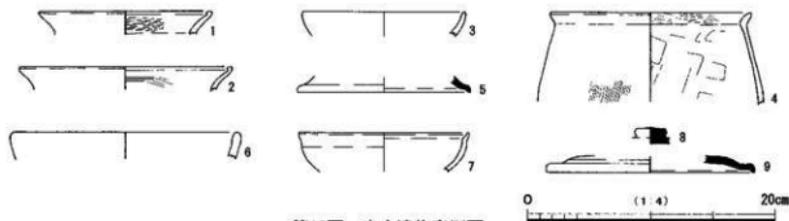
遺構3：1区西壁で確認した7層上面検出である。埋土は2層のブロック土(①・②層)から成る。この内①層からは土師器や須恵器の細片が出土した。

【出土遺物】1～5は遺構3出土遺物である。1～3は土師器杯細片と推測される。この内1・2は、口縁部が外反し、端部は内側に丸く肥厚する個体で、内面には横位ハケナデを施す。3は口縁端部が丸く終息する個体で、器壁も前2者に比して厚い。4は土師器甕。小さく屈曲後、外反気味に短く伸びる口縁部を有する個体で、肩部はほとんど張らない。調整は、口縁部内面が横位ハケナデ、肩部は外面が縦位ハケナデ、内面が横位板ナデを施す。5は須恵器蓋の細片である。口縁端部は若干下方に拡張を行い、その結果、若干下方に傾斜した平坦面が形成される。これらの遺物は、概ね奈良～平安時代に帰属する。

6は3層内出土遺物である。土師器の口縁部細片で、端部は丸く、器壁は厚い。



第11図 断面図(S=1/100)



第12図 出土遺物実測図

7～9は6層内出土遺物である。7は土師器碗。口縁部は短く外反し、端部は小さく内厚する個体である。調整は、口縁部は横ナデ、体部内面はナデを施す。体部外面は未調整。8・9は須恵器蓋。8は扁平な擬空珠つまみを持つ個体である。9は口縁端部を下方に拡張させる個体で、調整は回転ナデ。これらの遺物は概ね奈良時代に所属する可能性が高い。

(2)まとめ：今回の調査では、最も西に設定した1区において、中世以降(遺構1)、および奈良～平安時代(遺構2・3)に比定される遺構の存在を確認した。これらの遺構の基盤層である6・7層は、2区では認められない。2区では、2・3層に代表されるように、中世以降の水田耕作土が存在しており、生産域として利用されていたことが明らかである。したがって、本来展開していた可能性の高い6・7層は削平を受けたことが予測される。

本調査地の周辺では、(財)大阪府文化財調査研究センターによる小阪合遺跡の調査(駒井他2000)や、当研究会による東郷遺跡第52次調査(高萩1998)が行われ、奈良時代～中世の遺構・遺物を多く検出しているが、同様の遺構面が、本調査地にも及ぶことが明らかになった。特に中世以降の水田耕作土の及んでいない調査地の西方(1区以西)において、当該期の遺構面が展開している可能性が高い。

#### 参考文献

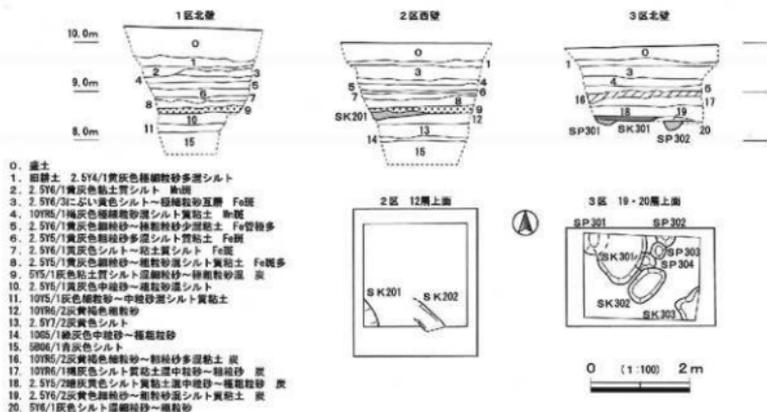
- ・駒井正明ほか 2000『八尾市若草町所在 小阪合遺跡 都市基盤整備公団八尾団地建設に伴う発掘調査報告書(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・高萩千秋 1998『XIV 東郷遺跡(第52次調査)』『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会

### 1-5 中田遺跡(2006-372)の調査

(1)調査概要：2.5×2.5m-2箇所、2.0×2.0m-1ヶ所(西から1～3区)、面積16.5㎡について、現地表(T.P.+9.9～10.3m)下2.5m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南西部に位置する市道中央：T.P.+10.4m)である。

【地層】0～5層については1～3区で概ね共通している。0層は盛土。1層は旧耕土。2層は1区でのみ見られた均質な粘土質シルト層で、整地層と考えられる。3層は水成層である。4・5層は攪拌された作土層で、1区4層から瓦器碗小片が出土しており時期は中世頃と考えられる。以下の層相は1・2区がほぼ共通し(6～15層)、3区はやや異なる(16～20層)。6・8層は攪拌された作土層で、中間層に7層の水成層が見られる。1区6層から円筒埴輪片(埴田筒?)が1点、8層から古式土師器片が1点出土している。9層は土壌化層で、古墳時代初頭～前期の包含層である。10～15層は水成層。16層は3区で見られたブロック状を呈する土壌化層で、古墳時代前期前半(布留式期古相)までの土器を多量に含んでおり、調査区全体を包括する大規模な遺構の可能性もある。1・2区9層とは層相が異なり対応関係は不明である。17・18層はシルト質粘土混中粒砂～極粗粒砂の層相で、水成層と考えられる。19層はやや攪拌が認められる土壌化層。20層上部もやや攪拌が認められる。

【検出遺構】2区12層上面で土坑2基(SK201・202)、3区19・20層上面で土坑3基(SK301～303)、ピット4個(SK301～304)を検出した。全体的に遺構埋土には炭が多い。SK201は深さ約20cm、埋土

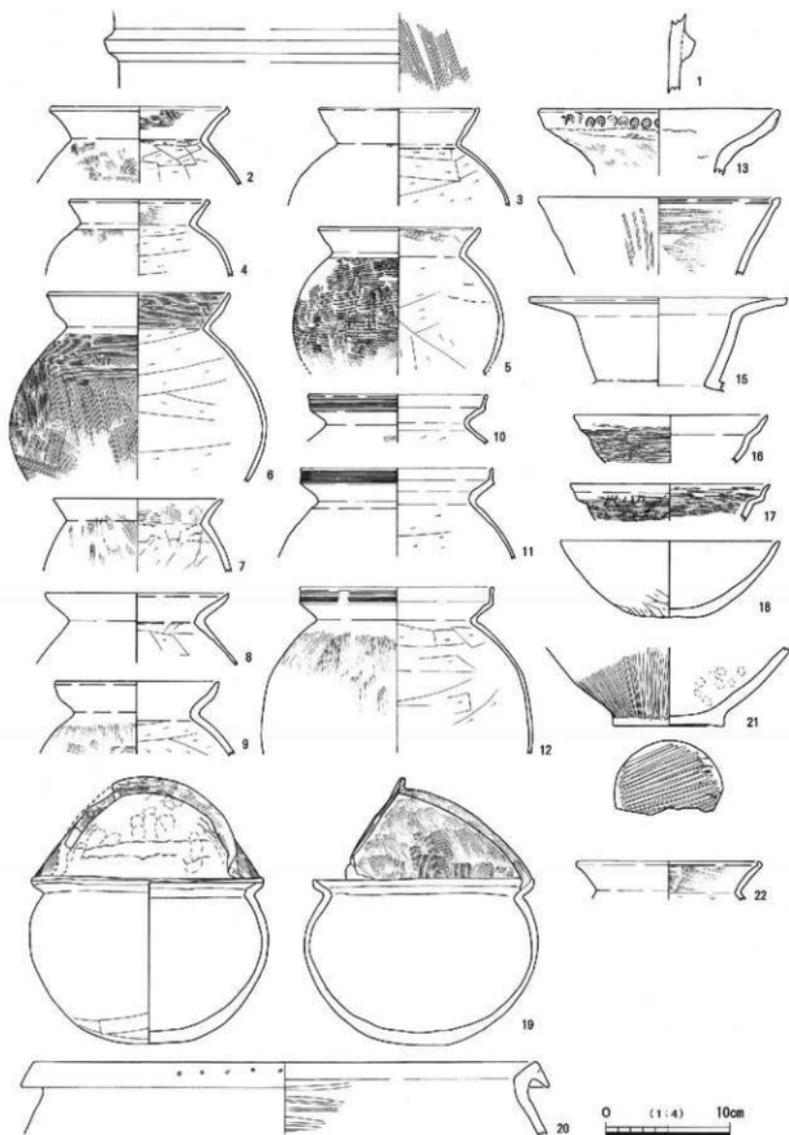


第13図 平・断面図

は黄灰色細粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土。SK202は深さ約60cm、埋土は上層が10YR4/1褐色灰色中粒砂～粗粒砂混シルト、下層がN4/0灰色粗粒砂混シルト質粘土で、全体にブロック状。庄内式土器出土。SK301・302は深さ10cm程度、埋土は2.5Y5/1黄灰色粗粒砂混シルト質粘土(ブロック状)で、底面に炭層が見られる。SK301から庄内式土器出土。SK303は深さ約15cm、埋土はN4/0灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土。庄内式土器出土。SP301・302・304は深さ10～20cm、埋土は5Y4/1灰色粗粒砂多混シルト(ブロック状)。SP302から庄内式土器出土。SP303は深さ約10cm、埋土はN3/0暗灰色シルト質粘土(炭層)である。

【出土遺物】1区6層～1は円筒埴輪で突帯部径約58cmに復元できるが、小片の為不確実なもので、楕円筒埴輪の可能性もある。内面タテハケ調整。3区16層～布留式期古相を主体とする土器が多量に出土しており2～21を図化した。2～9は甕である。口縁端部の形状は、2～内上方に伸びる、3～巻き込み気味に肥厚、4～6～わずかに肥厚、7～9～丸く収まる。体部調整は外面ハケ、内面ヘラケズリを基調とし、9は外面にタタキが見られる。10～12は吉備系の甕で搬入品である。櫛描直線文を施す口縁部は、10がやや開き気味で、11・12は直立する。色調は10が橙色、11・12が明褐色である。13は広口壺で、口縁部外面に竹管文を施す。外面ハケ調整。14は直口壺で、口縁部が内側に肥厚する。外面ヘラミガキ、内面ハケ調整。15は口縁部が外折して開く広口壺で、口径20.8cmを測る。四国東部地域からの搬入品と考えられる。16・17はヘラミガキを施す精製の有段口縁鉢である。18は粗製の鉢で、底部外面にヘラケズリを施す他はナデ調整である。19は手焙り形土器でほぼ完全形に復元できる。覆部の端部はほぼ直角に外折させ前端面を形成している。覆部の接合方法は、外反する鉢口縁端部に載せるタイプである。調整は覆部外面～前端面にハケ、底部にヘラケズリを施す以外はナデで粗製と言え、覆部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。鉢体部外面に円形の黒痕を有する他、内面全体が黒色を呈する。口径18.8cm・鉢部高13.6cm・器高21.8cm。20・21は弥生土器である。20は甕口縁部で、口縁部外面に約2cm間隔で刺突文を施す。河内IV様式に比定される。21も甕底部で、調整は外面ヘラミガキ、底面にも一定方向にヘラミガキを施す。20と同時期頃に比定されよう。3区SK303～22は土師器で、口縁端部は内上方に短く伸びる。庄内式期新相に比定される。

(2) まとめ:調査では、2・3区で古墳時代初頭～前期の遺構を検出した。東部の3区では19・20層上面が初頭(庄内式期)の遺構で、遺構には切り合いが認められる。そして遺構は検出されなかったが17層上面が前期(布留式期)遺構面と考えられる。調査地の西側には「中田古墳」が位置しているが、関連する遺物としては1区で円筒埴輪片が1点出土したのみである。



第14図 出土遺物実測図

## 1-6. 西郡麿寺(2006-190)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡3ヶ所(西から1～3区)について、現地表(T.P.+4.8m前後)下2.0m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地東部を南北に伸びる道路中央：T.P.+4.8m)である。

【地層】0層は盛土。1層は褐色細粒砂混粘土。2層は褐色細粒シルト質粘土で、土師器、須恵器、瓦器の破片を含む。3層は灰色粘細粒シルト質粘土。4層は灰褐色細粒～粗粒砂。河川堆積物である。

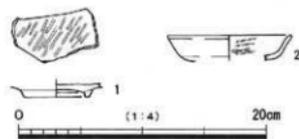
【検出遺構】1区：2層上面から切り込む遺構(SK101)および平安～鎌倉時代にかけての遺物を含む地層(2層)を検出した。SK101は南壁で検出したため、規模などの詳細は不明である。埋土は7.5YR 4/2灰褐色細粒砂混粘土で、遺物の出土はなかった。

2区：3層上面から切り込む遺構(SK201)および平安時代～鎌倉時代にかけての遺物を含む地層(2層)を検出した。SK201は、調査区南西隅で検出した。平面形状は円形で、深さ0.6mを測る。埋土はN 3/0暗灰色粘土で、褐色細粒砂混粘土のブロックが混じる。遺構内からは、平安時代末期の瓦器碗の破片が出土した。

3区：平安～鎌倉時代にかけての遺物を含む地層(2層)を検出した。

【出土遺物】1・3区の2層からは土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。また、2区のSK201からは瓦器の破片が出土した。このうち図化したものはSK201から出土した瓦器碗(1)と瓦器小皿(2)である。1の底部には高台が貼り付く。見込みにヘラミガキを平行線状に施す。2の内面にはヘラミガキを横方向に施す。

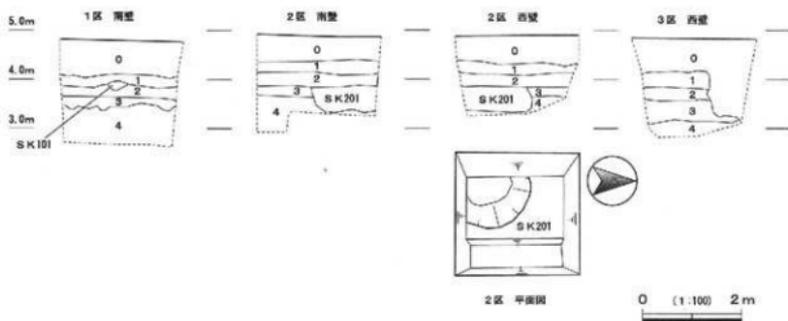
(2)まとめ：今回の調査地には、平安～鎌倉時代の居住域が存在していることが明らかになった。同時代の居住域は、南側約150mで行った萱振A遺跡の第1次調査(原田1987)でも検出していることから、南北幅150m以上の範囲が居住域であったことが判明した。



第15図 出土遺物実測図

### 参考文献

- ・原田昌則 1987 I 萱振A遺跡(第1次調査)『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告13』(財)八尾市文化財調査研究会



第16図 平・断面図

## 1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査

(1)調査概要： 平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡1ヶ所、約3.0×3.0m、面積約9.0㎡3ヶ所(北西から1～4区)について、現地表(T.P.+9.4m前後)下3.0～3.4mまでを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南東側の府道交差点：T.P.+9.0m)である。

【地層】 現地表下1.1m前後までは、客土・盛土(0層)。以下、現地表下3.4m前後までの2.3m間において18層の地層を確認した。

1層は、暗オリーブ灰色礫混砂質シルト。旧耕作土層。2層は、暗オリーブ灰色泥質砂～砂質シルト。2-1層(砂質)と2-2層(泥質)に分けられる。細地耕作土と推定される。3層は、粘土質シルトの灰白色砂礫(3-1層)～暗緑灰色中粒砂～細粒砂(3-2層)。ラミナ構造が見える。河川堆積層。4層は、オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト。上面で人の足跡を確認。水田耕作土と推定される。5層は、暗オリーブ灰色砂礫質シルト～砂礫混粘土質シルト。5-1層(砂質：締まりが強い)と5-2層(泥質)に分けられる。整地層か耕作土層と推定される。6層は、オリーブ灰色礫混砂(6-1層)～オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト～灰色砂礫の互層(6-2層)～灰色極細粒砂混粘土質シルト(6-3層)。河川堆積層である。7層は、暗オリーブ灰色細粒砂～極細粒砂混シルト質粘土。8層は、オリーブ黒色～暗オリーブ灰色を呈する極細粒砂混粘土質シルト～シルト質粘土。砂礫を含む8-2層と殆ど含まない8-1層に分けられる。9層は、オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト。3・4区では砂礫優勢である。本層は、調査地南側で実施された八尾寺内町遺跡第2次調査(岡田1999)において確認した古墳時代前期の遺物包含層に相当する可能性が高い。10層は、暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト。上面は、八尾寺内町遺跡第2次調査(岡田1999)で検出した古墳時代前期の遺構面に相当すると考えられる。11層は、オリーブ黒色～暗オリーブ灰色を呈する粘土質シルト～シルト質粘土。3区では砂礫を含む。12層は、暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルト。

【検出遺構・出土遺物】 検出遺構はなし。出土遺物は、2-2層から国産磁器片、5-1・5-2層から土師器片、6-2層から須恵器片、8-2層から土師器片、9層から土師器片が1～数点出土したが、いずれも時期不明の小破片である。

(2)まとめ： 今回の遺構確認調査では、遺構の検出はなく、出土遺物量も僅かであった。8-2層・9層・11層は、粘性に富む粘質土でありながら、調査地東部では砂礫が混在することから、古墳時代前期を前後する時期の水田耕作土である可能性が考えられる。

### 参考文献

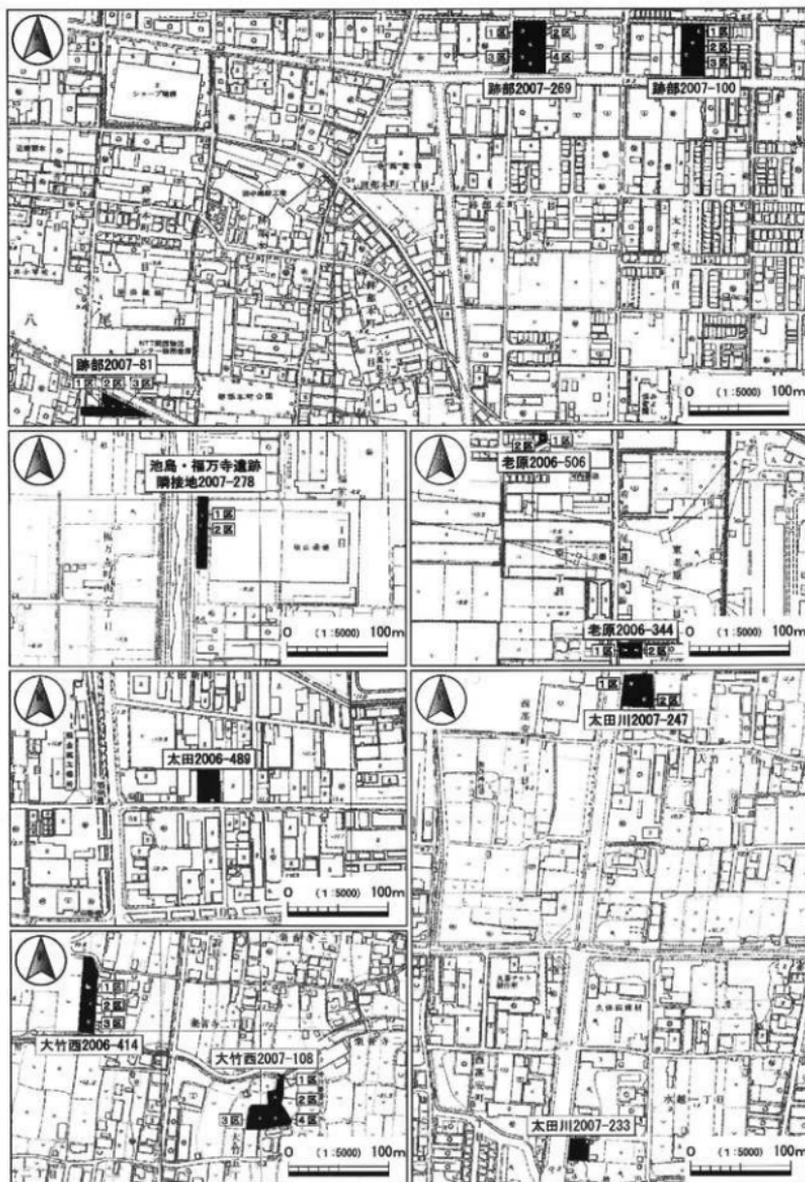
・岡田清一 1999「XIV 八尾寺内町遺跡第2次調査(YC97-2)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告62』(財)八尾市文化財調査研究会



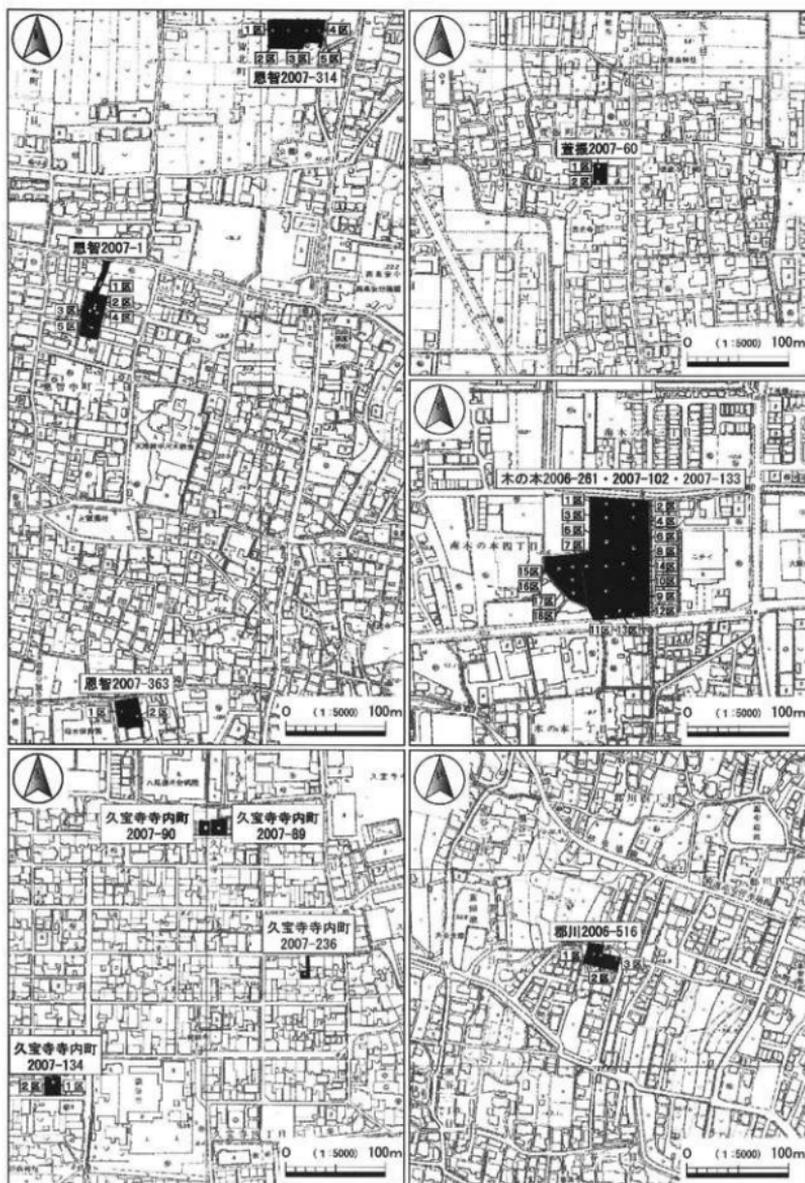
第17図 断面図(S=1/100)



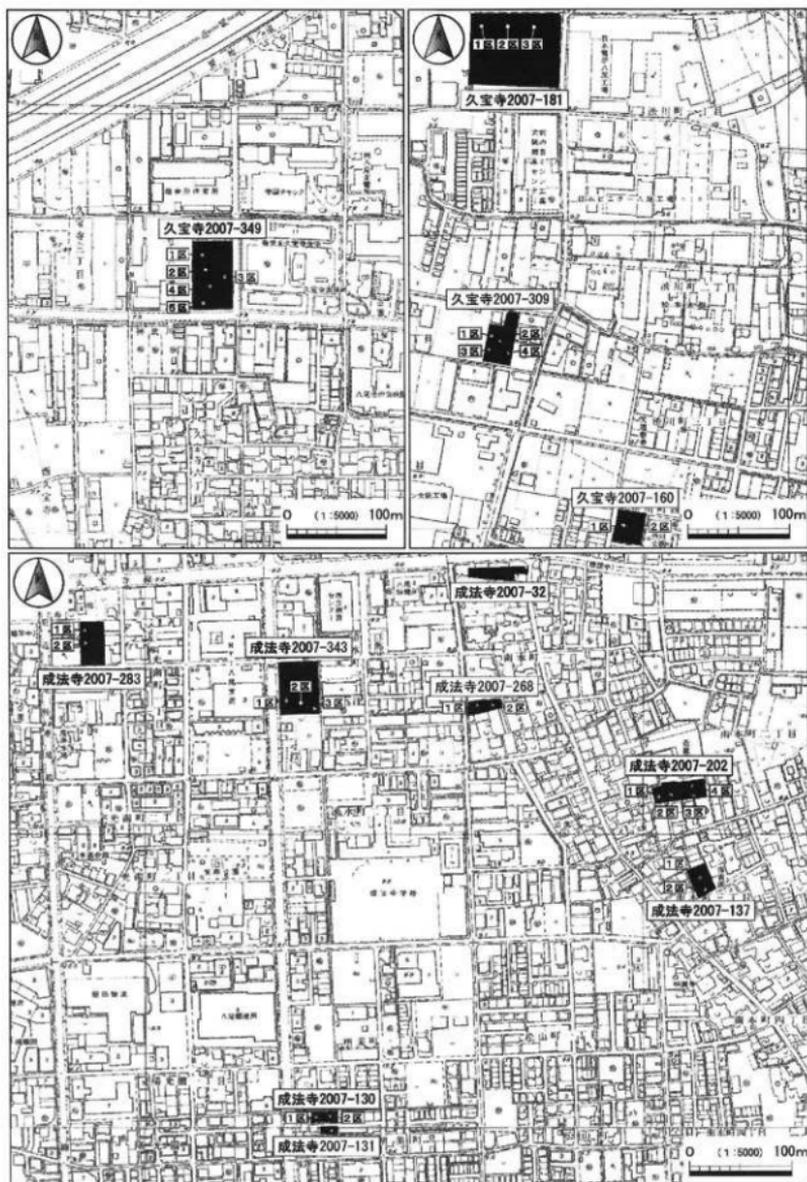
## 2. 平成19年度 4～12月の発掘調査



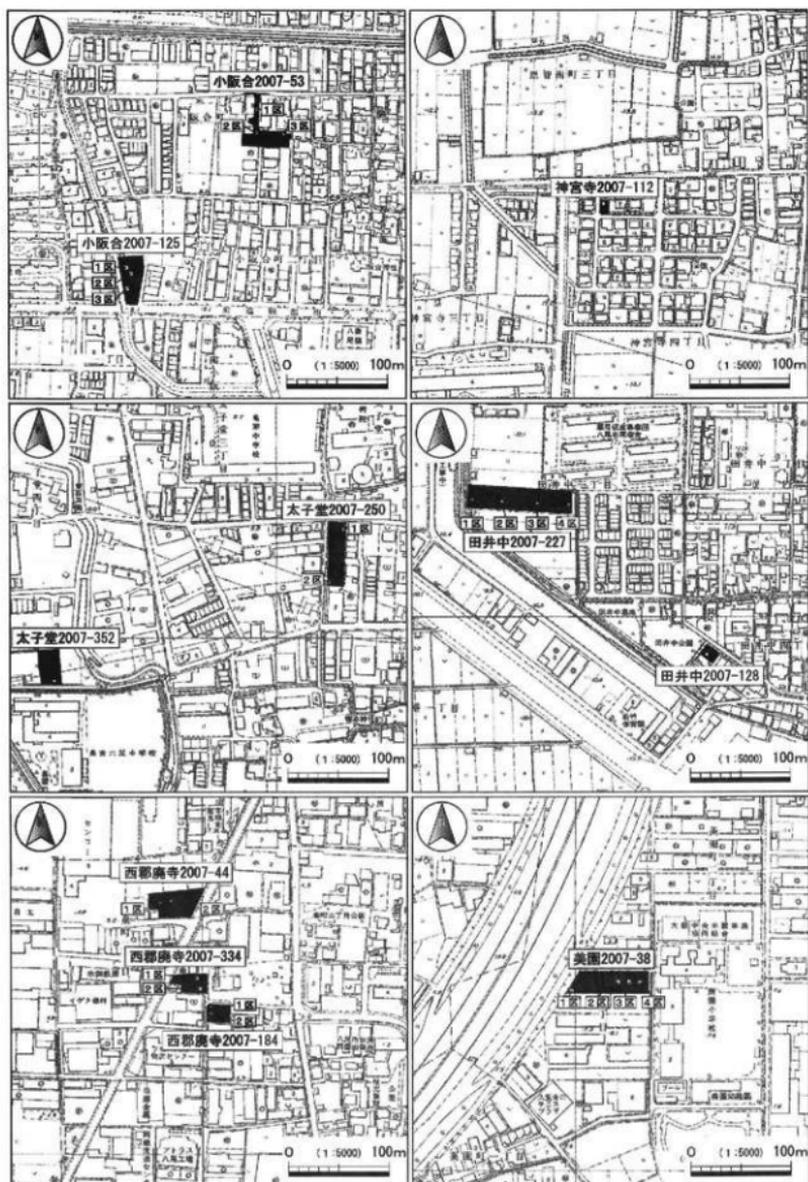
第18図 平成19年度4～12月の調査地位位置図 I



第19図 平成19年度4～12月の調査位置図Ⅳ



第20図 平成19年度4～12月の調査地位置図Ⅲ



第21図 平成19年度4～12月の調査地位置図Ⅳ



第22図 平成19年度4～12月の調査地位置図V



第23図 平成19年度4～12月の調査地位置図VI

# 1. 平成19年度4～12月の発掘調査

表2 平成19年度4～12月の発掘調査一覧 1

遺跡名 (申請番号)	調査地	調査日	調査目的	調査対象	面積 (㎡)	備考	調査 担当
勝部遺跡 (2007-81)	八尾市勝部北の町1丁目146、49-2、49	2007/6/4	土溝 (遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ2.0m)	12.0	中世以降の溝を3条検出	西村
勝部遺跡 (2007-100)	八尾市勝部北の町1丁目31-1～31-3及び31-8～31-113まで	2007/6/15	事務所倉庫 (遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×3ヶ所(深さ3.0m)	27.0	古墳時代初期に相当する地層を6代	西村
勝部遺跡 (2007-269)	八尾市勝部北の町2丁目50-1	2007/12/20-21	倉庫及び工場 (遺構確認調査)	管轄・他: 3.0m×3.0m×4ヶ所(深さ2.5m)	36.0	6代～近世の水田耕作土のほか、中世の水成層を確認	高川
志島・積方寺 遺跡群連続 (2007-278)	八尾市塚本町1丁目28番1	2007/12/4	分譲住宅 (基礎調査・埋蔵文化財包含地外)	建物基礎・浄化槽: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.5	遺構・遺物の検出はなし	米井
老原遺跡 (2006-508)	八尾市老原1丁目96-1	2007/4/4	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所 他: 2.5m×1.5m×1ヶ所(深さ1.5～2.5m)	6.25	遺構・遺物の検出はなし	成海
老原遺跡 (2006-544)	八尾市塚本老原1-89	2007/7/23	個人住宅 (発掘調査)	人孔: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.5	鎌倉時代の水田耕作土と、それ以下において河川堆積物を確認	高川
太田遺跡 (2006-489)	八尾市太田新町1丁目298	2007/6/14	事務所・倉庫 (遺構確認調査)	人孔: 2.0m×3.0m×1ヶ所(深さ2.5m)	6.0	弥生前期末～古墳初期、平安・鎌倉時代の対応層を確認	西村
太田川遺跡 (2007-247)	八尾市大竹1丁目19番、20番	2007/11/5	店舗 (遺構確認調査)	浄化槽・防火水槽: 3.0m×3.0m×2ヶ所(深さ3.0m)	18.0	本調査地が谷状地形に位置することを確認	成海
太田川遺跡 (2007-233)	八尾市水越1丁目97番	2007/12/26	店舗 (遺構確認調査)	浄化槽: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.8m)	12.5	遺構・遺物の検出はなし	樋口
大竹西遺跡 (2006-414)	八尾市東吉寺1丁目152番地の一部	2007/3/13、4/20、23	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎・浄化槽・管轄・他: 2.5m×3.0m・2.0m×2.0m 4.2m×4.0m×1ヶ所・2.0m×2.0m×1ヶ所 3.0m×3.0m×2ヶ所(深さ1.7～2.5m)	33.7	本書に掲載 [2-1]	樋口 西村
大竹西遺跡 (2007-168)	八尾市大竹5丁目33、34、35、36、37、38-1 番等計1丁目124、125の 一部、128、129の一部	2007/8/9	葬儀場老人ホーム 連続調査	雨水貯留槽・ポリタス槽: 2.5m×2.5m×4ヶ所(深さ1.8～1.8m)	25.0	本調査地が谷状地形に位置することを確認	西村
恵聖遺跡 (2007-1)	八尾市恵聖町2丁目139番地、144番地、150番地	2007/4/9	分譲住宅 (遺構確認調査)	管轄・他: 2.0m×2.0m×2ヶ所 2.0m×3.0m×3ヶ所(深さ2.0m)	36.0	本書に掲載 [2-2]	成海
原田遺跡 (2007-514)	八尾市原田新町3丁目8番、35番、35番、36番	2007/11/14	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔・浄化槽: 2.0m×2.0m×4ヶ所 1.5m×1.5m×1ヶ所 深さ1.5～2.0m	18.25	時期不明の埋蔵文化層を確認	高川
原田遺跡 (2007-383)	八尾市原田新町2丁目50番、51番の一部	2007/12/27	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ1.5m)	8.0	中世に相当する遺物包含層を確認	米井
原田遺跡 (2007-60)	八尾市原田新町6丁目40、51、52	2007/6/25	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.5	本書に掲載 [2-3]	西村
本の本遺跡 (2006-281、 2007-102、133)	八尾市南木4丁目44丁目18	2007/1/16、16 -6/7、7/12	分譲住宅 (遺構確認調査)	防火槽・管轄・他: 3.0m×3.0m×14ヶ所 2.0m×2.0m×4ヶ所(深さ2.0～3.2m)	142.0	本書に掲載 [2-4]	樋口 西村
本の本遺跡 (2007-84)	八尾市沖津1丁目178、180	2007/9/11	工場 (遺構確認調査)	浄化槽: 3.0m×3.0m×2ヶ所(深さ1.2～1.7m)	12.0	平安時代後期～次に相当する水田耕作土を確認	成海
本の本遺跡 (2007-218)	八尾市平津1丁目146～2	2007/10/26	児童遊園施設等 (遺構確認調査)	浄化槽: 3.0m×3.0m×1ヶ所(深さ3.0m)	9.0	高橋下、河川堆積物を基盤とした中世の水田耕作土を確認	成海
久安寺遺跡 (2007-181)	八尾市南久安寺1丁目1番1、1番1	2007/8/7-8	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×3ヶ所(深さ2.5～3.0m)	27.0	本書に掲載 [2-5]	高川
久安寺遺跡 (2007-160)	八尾市西川町4丁目76番地(1)～(2)	2007/8/23	共同住宅 (遺構確認調査)	ポリタス槽・雨水貯留キャップ: 4.0m×3.6m×1ヶ所 1.5m×1.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	16.65	中世に相当する水田または畑に伴う耕作土を確認	西村
久安寺遺跡 (2007-309)	八尾市西川町5丁目3、4、29の一部	2007/11/12	倉庫 (遺構確認調査)	建物基礎・浄化槽: 2.5m×2.5m×1ヶ所 2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ1.5m)	18.25	中世の溝1条、落ち込みヶ所を検出	高川
久安寺遺跡 (2007-549)	八尾市北久安寺2丁目33番、34番	2007/12/18～20	工場 (遺構確認調査)	管轄・他: 3.0m×3.0m×5ヶ所(深さ3.0m)	45.0	倉室～古墳時代に相当する水田耕作土を確認	樋口
久安寺寺内町 (2007-96)	八尾市久安寺4丁目57番の一部	2007/7/5	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ3.0m)	4.0	久安寺内町北高橋寄り位置する遺構の埋蔵層を確認	成海
久安寺寺内町 (2007-90)	八尾市久安寺3丁目57番の一部	2007/7/5	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ3.0m)	4.0	久安寺内町北高橋寄り位置する遺構の埋蔵層を確認	成海
久安寺寺内町 (2007-134)	八尾市久安寺5丁目83番の一部	2007/7/17-18	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×3.0m×1ヶ所 2.0m×1.0m×1ヶ所(深さ1.3～2.0m)	11.0	本書に掲載 [2-6]	高川
久安寺寺内町 (2007-236)	八尾市久安寺5丁目227番	2007/10/2	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	近世の溝を1条検出	高川
郡川遺跡 (2006-518)	八尾市南2丁目161番1の1～208番4の1の一部	2007/4/24	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ2.0m)	12.0	本調査地が谷状地形に位置することを確認	高川
小阪倉遺跡 (2007-52)	八尾市小阪倉町1丁目65、66、67、267-11の各一部	2007/6/21	分譲住宅 (遺構確認調査)	管轄・他: 2.5m×2.5m×3ヶ所(深さ2.0m)	18.75	遺構・遺物の検出はなし	成海
小阪倉遺跡 (2007-125)	八尾市小阪倉町2丁目48-2	2007/7/19～20	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×3ヶ所(深さ2.0～2.8m)	18.75	本書に掲載 [2-7]	成海
成法寺遺跡 (2007-32)	八尾市南本町1丁目84-1、2、4、86-1、2、3、6	2007/6/29	仏壇倉庫上屋 (遺構確認調査)	管轄・他: 3.0m×2.0m×1ヶ所(深さ1.8m)	6.0	鎌倉時代の溝を1条検出	西村

表3 平成19年度4～12月の発掘調査一覧 2

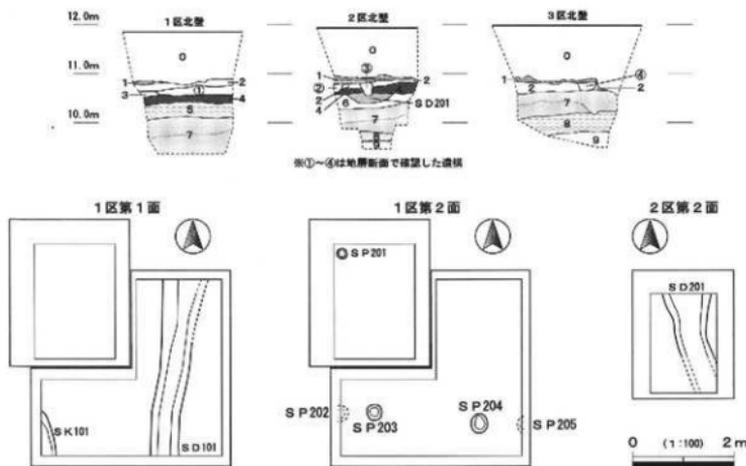
遺跡名 (申出番号)	調査地	調査日	調査目的	調査対象	面積 (㎡)	備考	調査担当
成法寺遺跡 (2007-130)	八尾市明栄町1丁目 28-1,2番の各一部	2007/7/6	共同住宅 (遺構確認調査)	菅路・他: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.5m)	12.5	奈良時代～中世に相当する土壇遺構を確認	西村
成法寺遺跡 (2007-131)	八尾市明栄町1丁目 28-1,2番の各一部	2007/7/6	長屋住宅 (遺構確認調査)	菅路・他: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.5m)	6.25	奈良時代～中世に相当する土壇遺構を確認	西村
成法寺遺跡 (2007-137)	八尾市南町3丁目 44-1	2007/7/25	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔・管溝: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	8.0	本書に掲載 [2-8]	西村
成法寺遺跡 (2007-283)	八尾市光栄町1丁目 18, 19	2007/11/17	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0～2.8m)	12.5	時期不明の築地跡・河川堆積物を包含した中～近世の水田耕作土を確認	成海
成法寺遺跡 (2007-292)	八尾市南本町2丁目 66番1-66番9の各一部	2007/11/8-9	倉庫1棟事務所 (遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×2ヶ所・2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.3)	30.5	本書に掲載 [2-9]	成海
成法寺遺跡 (2007-288)	八尾市南本町1丁目 109番2	2007/11/15	分譲住宅 (遺構確認調査)	菅路・他: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.5	本書に掲載 [2-10]	樋口
成法寺遺跡 (2007-343)	八尾市清水町1丁目33 番2, 34番1, 34番2, 34番4	2007/12/10-11	平家邸 (遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0×3ヶ所(深さ2.5m)	27.0	本書に掲載 [2-11]	戸川
神宮寺遺跡 (2007-112)	八尾市神宮町4丁目 132の-1	2007/6/14	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	6.25	遺構・遺物の検出はなし	成海
太子堂遺跡 (2007-352)	八尾市南太子堂4丁目 96-1, -3	2007/12/14	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0×1ヶ所(深さ2.5m)	9.0	奈良～平安時代前期の河川堆積物を包含・平安時代末～中世の河川耕作土を確認	成海
太子堂遺跡 (2007-250)	八尾市南太子堂2丁目 57-1	2007/12/25	共同住宅 (遺構確認調査)	オリフィス・水回り基礎: 2.0m×2.0×2ヶ所(深さ2.0m)	8.0	古代～近世の河川耕作土のほか、平安～鎌倉時代の河川堆積物の下位において水田耕作土を確認	戸川
田井中遺跡 (2007-128)	八尾市田井中4丁目1 132番	2007/7/10	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	6.25	時期不明の河川堆積物を基とした中世の出水耕作土を確認	樋口
田井中遺跡 (2007-227)	八尾市田井中1丁目232	2007/11/19	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔: 3.0m×2.0m×4ヶ所(深さ2.0m)	16.0		樋口
東照宮遺跡 (2007-49)	八尾市北町・丘4丁目 61-1, 61-2, 61-3, 61-4	2007/5/31・ 6/1	仏舎利堂 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所・3.0m×4.0m×1ヶ所(深さ1.7～2.4m)	16.0	本書に掲載 [2-12]	荒川
東照宮遺跡 (2007-209)	八尾市北町2丁目 223番の-部	2007/9/4	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×3ヶ所(深さ1.8m)	18.75	本書に掲載 [2-13]	西村
東照宮遺跡 (2007-200)	八尾市東本町5丁目51 番19	2007/9/10	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	遺構・遺物の検出はなし	西村
中田遺跡 (2007-107)	八尾市八尾北本3丁目 118番2	2007/8/17	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ1.0m)	6.25	中世に相当する河川堆積物を確認	成海
中田遺跡 (2007-201)	八尾市中田町2丁目1313の 一部	2007/9/10	個人住宅 (発掘調査)	菅路・他: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.2m)	4.0	奈良時代後期～古代に相当する地層を確認	成海
中田遺跡 (2007-168)	八尾市八尾北本6丁目 12	2007/9/28	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	古墳時代後期～古代に相当する地層とこれ以下において河川堆積物を確認	成海
中田遺跡 (2007-336)	八尾市八尾北本6丁目 72番の一部	2007/12/13	個人住宅 (発掘調査)	菅路・他: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	6.25	遺構・遺物の検出はなし	水沢
西院寺寺 (2007-44)	八尾市東町2丁目66-1 の-部, 66-1, 66-2, 66-3, 66-4, 66-5, 66-6	2007/5/18	店舗 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ1.0m)	8.0	本書に掲載 [2-14]	成海
西院寺寺 (2007-184)	八尾市東町2丁目55番1 の-部	2007/10/4	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.5m)	12.0	本書に掲載 [2-15]	浜尻
西院寺寺 (2007-334)	八尾市東町2丁目4番 3-1	2007/12/5	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0×2ヶ所(深さ2.5m)	18.0	本書に掲載 [2-16]	樋口
東町跡遺跡 (2007-78)	八尾市八尾本3丁目39 番2・50番	2007/7/30	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×2ヶ所(深さ2.0m)	8.0	平安～鎌倉時代, 奈良時代, 古墳時代に相当する地層を確認	西村
東町跡遺跡 (2007-291)	八尾市東町1丁目127, 128	2007/11/30	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 1.5m×1.5m×1ヶ所(深さ1.9m)	2.25	遺構・遺物の検出はなし	荒川
東町跡遺跡 (2007-342)	八尾市八尾本東1丁目1 399-4	2007/12/6	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	古墳時代後期～古墳時代前期に相当する土壇化層を確認	樋口
美濃遺跡 (2007-38)	八尾市美濃町3丁目54 番1	2007/5/21-22	多目的ホール (遺構確認調査)	建物基礎: 3.0m×3.0m×3ヶ所・2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ3.0m)	33.25	本書に掲載 [2-17]	西村
八尾市内河遺跡 (2007-71)	八尾市本町5丁目172-1	2007/12/12	共同住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ2.0m)	12.5	八尾市内河町成海時期に相当する土坑を2箇所確認	西村
八尾市内河遺跡 跡部埋地地 (2006-522)	八尾市本町3丁目219, 224, 225	2007/4/26	共同住宅 (発掘調査・埋蔵文化財調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所・3.0m×3.0m×1ヶ所(深さ2.0～3.0m)	21.5	本書に掲載 [2-18]	西村
八尾南遺跡 (2007-142)	八尾市西本町の本2丁目 38	2007/7/24	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.0m×2.0m×1ヶ所(深さ2.0m)	4.0	中央に相当する水田耕作土を確認	成海
八尾南遺跡 (2007-277)	八尾市西本町の本2丁目 45番	2007/10/30	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	6.25	中～近世に相当する水田耕作土を確認	成海
矢作遺跡 (2007-119)	八尾市高木町4丁目 142番3	2007/6/26	個人住宅 (発掘調査)	建物基礎: 1.5m×3.0m×1ヶ所(深さ1.9m)	4.5	本書に掲載 [2-19]	成海
矢作遺跡 (2007-69)	八尾市安中町8丁目75 番11, 66番の-部・87 番2	2007/7/3	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×3ヶ所(深さ1.8m)	12.0	河川堆積物とその上位において水田耕作土を確認	荒川
矢作遺跡 (2007-139)	八尾市松山町2丁目 14-4番地	2007/8/21	分譲住宅 (遺構確認調査)	建物基礎: 1.5m×1.5m×1ヶ所(深さ2.0m)	2.25	河川堆積物とその上位において、水田耕作土を確認	荒川
河津遺跡 (2007-54)	八尾市志紀町4丁目 68	2007/5/16-17	分譲住宅 (遺構確認調査)	人孔: 2.0m×2.0m×1ヶ所・2.0m×2.5m×1ヶ所・3.0m×3.0m×4ヶ所(深さ1.8m)	35.0	本書に掲載 [2-20]	荒川
電燈寺跡 (2007-123)	八尾市瑞光町2-36-2	2007/6/27	店舗 (遺構確認調査)	建物基礎: 2.5m×2.5m×2ヶ所(深さ3.0m)	12.5	中世以降の水田耕作土を確認	荒川

## 2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×3.0m 1ヶ所(1区)、約2.0×2.6m 1ヶ所(2区)、約3.0×3.0m 1ヶ所(3区)、総面積約21.7㎡(北から1～3区)について、現地表(T.P.+11.85～11.98m前後)下2.5m前後までを調査した。なお調査区の平面規模については、各調査区ともに平面規模約3.0×3.0mを設定していたが、客土・盛土層が非常に硬く締まっており、予想以上に掘削時間を必要としたことから、2区では、若干平面規模を縮小している。また1区では調査区の拡張(約2.0×2.0m・約2.0×4.0m 約12㎡)を実施した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西部に位置する市道の二股分岐中央：T.P.+10.6m)である。

【地層】現地表下1.0～1.1m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.4～1.5m間において9層の基本層序を確認した。1層は暗オリーブ灰色～灰色シルト質粘土～シルト。攪拌の顕著な作土層である。2層は黒褐色粗粒砂～中礫混粘土質シルト。調査地全域に堆積が予測される淘汰不良の地層である。1・2区では土師器細片が散在していた。3層は黄灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。1区で確認した遺物包含層である。上面より切り込む遺構の存在を断面において確認した。4層は黒褐色粗粒砂～細礫混粘土質シルト。1・2区に認められる古墳時代中期頃の遺物包含層である。5層はにぶい黄褐色粘土質シルト。1区で確認した湿地性堆積層である。6層は黒褐色粗粒砂～中礫混粘土質シルト～シルト。下位に存在する7層の土壌化部分に相当する。2区で確認した。7層は褐色～灰黄褐色粘土質シルト～中礫。西流する扇状地性堆積層である。8層はにぶい黄褐色粘土質シルト。湿地性堆積層である。9層は褐色粘土質シルト～シルト。3cm大のブロック土が混在する硬く締まった地層である。

【検出遺構】SK101：1区で検出した、3層上面を構築面とする土坑である。検出規模は、東西幅約0.3m、南北幅約1.0m、深さは約0.2mである。埋土は細粒砂混粘土質シルト。遺構内からは古式土師器の細片が出土した。SD101：1区検出の南北に伸びる溝である。断面観察の結果、2層上面より切り込むことが明らかになった。検出規模は、幅約0.7m、長さ4m以上、深さ約0.45mである。埋土は細粒砂混粘土質シルト。遺構内からは土師器の細片が出土した。帰属時期は概ね中世頃に比定される。SP201～205：1区では、古墳時代中期の遺物包含層である4層を除去し、5層上面を精査したところ、



第24図 平・断面図

柱穴と推測される径0.2～0.3mの平面円形を呈した小穴を5個検出した。埋土は、4層が充填されていた。なお、5層は湿地性堆積層であり、一時期の遺構基盤面であった可能性は低い。4層に帰属する遺構と推測される。SD201：2区では、やはり古墳時代中期の遺物包含層である4層を除去し、6層上面を精査した結果、概ね南南東～北北西に直線的に伸びる溝を検出した。検出規模は、幅約0.6m、長さ約2.0mである。深さは約0.2mで、浅い碗形を成す。埋土は黒褐色粗粒砂～細粒混粘土質シルト(2～3cm大ブロック混在)の単層で、土師器細片が散在していた。4層に帰属する遺構の可能性が考えられる。

#### 【出土遺物】

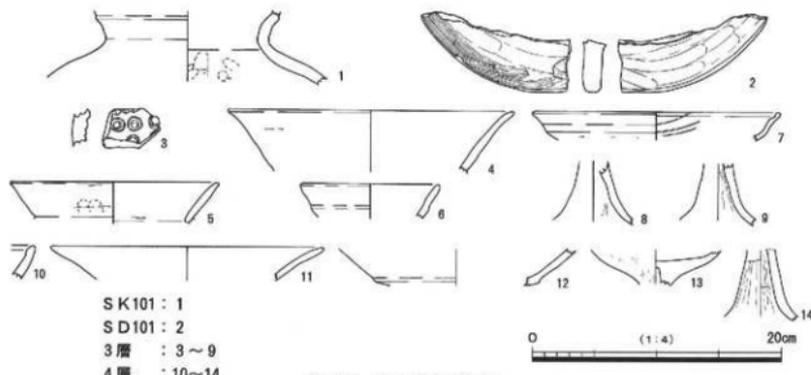
1は1区SK101出土の古式土師器壺の口縁部～肩部である。口頸部は大きく外反し、その上位には角度を上方に転じた口縁部が付く。調整は、肩部内面において指頭成形痕やケズリ、ナデが認められる以外は横ナデを施す。帰属時期は古墳時代前期後半と推測される。

2は1区SD101から出土した、甕の底部分可能性が考えられる細片である。外面はナデやハケナデが、内面はハケナデ調整を行う。底下面には二次焼成に伴う煤の付着を確認した。胎土には角閃石が含まれる。帰属時期は奈良～平安時代であろう。

3～9は3層出土遺物。3は器台の口縁端部細片と考えられる。端面上端にはキザミ目を、ほぼ直立する幅広の口縁端面には円形竹管文を2帯+α施す。帰属時期は弥生時代中期後半である。4～7は古式土師器。4は直口壺の口縁端部～口縁部。口縁部は直線的に上方外に開き、端部付近で若干反りを加える。5は甕の口縁端部～口縁部。直線的に開く口縁部と丸い端部を有し、頸部内面にはケズリ調整に起因する鋭利な変化点も見える。古墳時代初頭の所産であろう。6は小型丸底土器の口縁端部～口縁部。口縁部は横ナデ調整により若干有段を形成し、端部は丸く、器厚も厚い。色調は褐灰色を呈する。搬入品の可能性も考えられる。7～9は土師器。7は杯または皿の口縁端部～杯部。口縁部は強い横ナデの影響で大きく外反し、端部は内厚する個体である。底部外面には横位ケズリを施し、杯部内面には1段の放射状暗文を加える。平城宮Ⅲの所産である。8・9は高杯の柱状部～裾部。両者ともに外面調整は摩擦のため不明瞭。内面にはしぼり痕が見える。古墳時代前期後半～中期に帰属する可能性が高い。

10～14は4層出土遺物である。10は古式土師器壺の口縁端部～口縁部。口縁部は内湾し、端部は内厚する。器厚は7mmと厚い。胎土には、焼土のような細粒を多く含む。帰属時期は布留式期新相である。

11～14は土師器高杯。11は大きく開く口縁端部～口縁部で、端部は丸く終わる。12は杯部。断面が扁平な三角形を成すにふい稜が見える。13は杯部～頸部。外面には縦位ハケナデを施す。14は柱状部～裾部。柱状部から裾部へは、緩やかな弧を描きながら移行する個体で、外面には面取り調に縦位板ナデを行う。内面にはしぼり痕が見える。いずれも概ね古墳時代中期に帰属するものと推測される。



第25図 出土遺物実測図

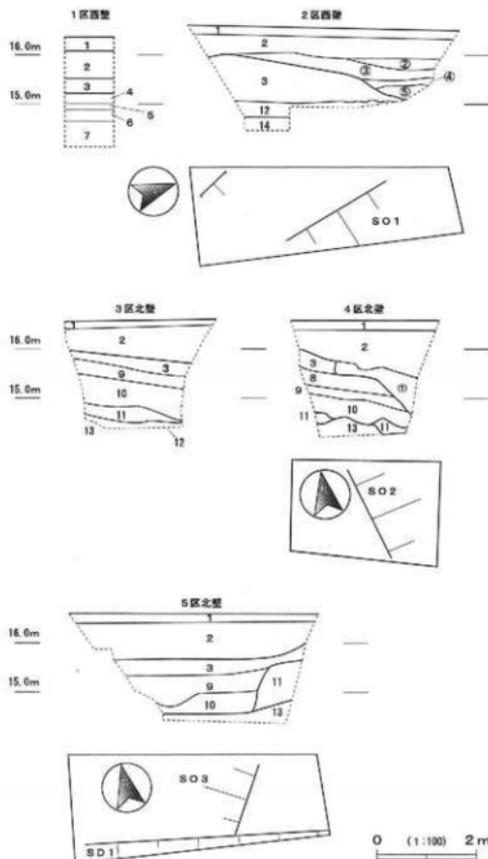
(2)まとめ：今回の調査における最大の成果は、4層を確認したことである。4層は、南北に長い調査地の北～中部に位置する1・2区において確認した遺物包含層である。層厚は約20cmを測り、古墳時代中期の土師器や須恵器が混在していた。混在遺物は、概して遺存状態は良好で、ある程度器形を復元することができるほか、調整なども明瞭に観察できる。したがって、これらの遺物は1・2区周辺で使用されていたものが、混在した可能性が高い。この場合、付近においてこれらの遺物を使用した当該期の集落の存在が想定される。今後、周辺を調査する際には注意されたい。

## 2-2 恩智遺跡(2007-1)の調査

(1) 調査概要：平面規模約2.0×2.0m(3・4区)、2.0×5.0m(1・2・5区)面積約38.0㎡の5ヶ所について、現地表(T.P.+16.3～16.7m)下2.0m前後までを調査した。使用した標高は、調査地から約200m東方の南高安農協前のベンチマーク：T.P.+20.268mである。

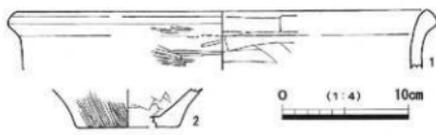
【地層】現地表下0.6～1.0m前後までは、表土・作土(1層褐色粗粒砂)、近現代の整地に伴う層(2層黄褐色礫混粗粒砂)。以下現地表下1.0～2.0m前後までの1.0m間において5～6層の地層を確認した。3層は暗褐色礫混シルトで、中世の遺物を少量含む。以下の地層は、1区と2～5区では、大きく異なる。1区では4層褐色礫混粗粒砂、5層褐色粗粒砂、6層黄褐色極細粒砂、7層青灰色粘土質シルトがあり、2～5区では、8層黒褐色礫混粘土、9層黒褐色礫混粘土と青灰色粗砂の互層またはブロック、10層褐色粗粒砂～礫混粘土質シルトがあり、以下に11層黄～赤褐色粗粒砂、12層黄～灰褐色粘土質シルト、最下は13層黄褐色粘土質シルト混礫・14層黄褐色細粒砂である。

【検出遺構・出土遺物】3層上面では2・4区で落込みを2ヶ所(SO1・2)、5区で溝を1条(SD1)検出した。11層上面では5区で落込みを1ヶ所(SO3)検出した。出土遺物は、主に9・10層から中世を下限とするものが小破片の状態で出土しており、10～12層からは弥生土器が数点出土している。



第26図 平・断面図

2区：SO1は北東へ落ちるもので、本来の肩は、調査区南西端に至るものと考えられる。断面の観察では、一旦緩やかに下がった後、急に落ち込む2段の肩を形成する。肩を構成する3層は、南で1mもの厚さになり、青灰色粘土質シルト・暗褐色粗粒砂のプロックが混在しており、盛土の可能性が高い。埋土は②黄褐色大礫混粗粒砂・③黄褐色礫混シルト・④黄褐色粗粒砂・⑤黄褐色極細粒砂が堆積する。内部から弥生土器(1・2)が出土した。1は大型の鉢、2は甕の底部で、ともに弥生時代中期のものである。



第27図 出土遺物実測図

4区：SO2は北東部へ落ちるもので、深さ0.9mまでを確認した。埋土は①粘土質シルトが混じる黄褐色粗粒砂である。ここからの湧水は多大であった。

5区：SD1は調査区南端を東西に伸びるもので、瓦質土管が埋設されていた。近世末期のものであろう。SO3は調査区東端で西へ急角度で落ちるもので、深さは0.8m・底は平坦である。内部に9・10層が堆積し、中世を下限とする土器小片が出土している。

(2)まとめ：SO1・2はその含水量や堆積状況などから溝状遺構と考えられ、SO3は崖などの自然地形の可能性はある。また、3層は盛土と考えられ、中～近世の整地の可能性が高い。

## 2-3 萱振遺跡(2007-60)の調査

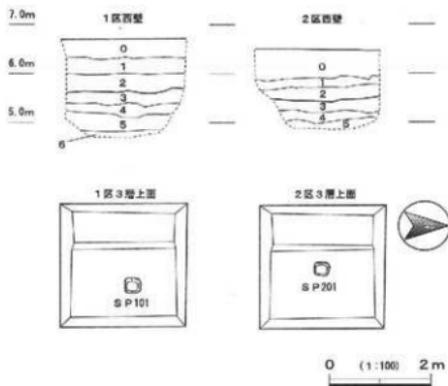
(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所(北から1・2区)について、現地表(T.P.+6.5~6.7m)下2.0m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北東部の道路上：T.P.+6.5m)である。

【地層】現地表下0.4~0.6mまでは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの約1.4mの間において6層の地層を確認した。1層は10YR4/6褐色細粒砂混粘土、2層は10YR4/1灰褐色細粒砂混粘土で、1層と2層は近世の地層である。3層は5Y5/1灰色細粒砂混粘土で、上面は土壌化し、両調査区で、中世の小穴を検出した。4層は10YR5/6黄褐色粗粒砂質粘土、5層は10YR4/1褐灰色細粒砂質粘土で、粘性に富んだ湿地性堆積層である。6層は10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂で、河川堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】1区：3層上面で、小穴1個(SP101)を検出した。SP101は平面形状隅丸

方形で、一辺0.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器の破片が極少量出土した。この内掲載したものは1である。1は室町時代頃の土師器小皿で、口縁部の内外面にはナデを施す。

2区：3層上面で、小穴1個(SP201)を検出した。SP201は平面形状隅丸方形で、一辺0.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/4褐色細粒砂混粘土で土師器および須恵器の破片が極少量出土した。この内掲載したものは2である。2は13世紀に比定できる東播系須恵器鉢である。口縁端部は上下にやや拡張し、平端面を形成する。口縁部の内外面には回転ナデを施す。



第28図 平・断面図



第29図 出土遺物実測図

(2)まとめ：今回の調査では、恵光寺を中心とした寺内町形成に関連する地層(1・2層)の確認および、鎌倉～室町時代頃の遺構を検出した。また、6層は、平安時代末期以前の河川堆積と思われる。

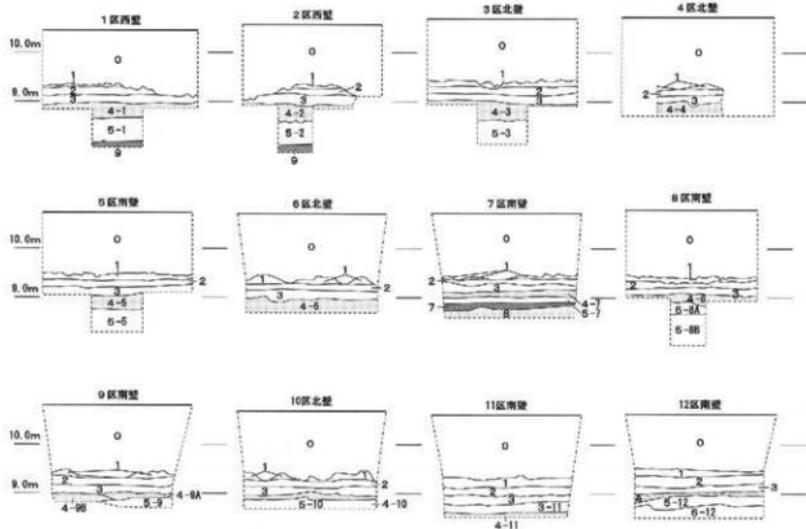
参考文献

- ・西村公助 1996「VI 萱振遺跡第19次調査(K F 95-19)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告53』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 西村公助 2003「X 萱振遺跡第23次調査(K F 2002-23)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会

2-4 木の本遺跡(2007-261・2007-102・2007-133)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0㎡13ヶ所(北西から1～13区)について、現地表(T.P.+10.5～10.8m前後)下2.0～3.0m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南部を東西に伸びる府道中央：T.P.+10.7m)である。

【地層】現地表(10.5～10.8m)下1.2m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの0.8m間において9層の地層を確認した。1層は暗灰色シルト質粘土。旧耕作土である。2・3層は青灰色シルト質粘土。両層ともにグライ化の顕著な攪拌の著しい水田耕作土である。この内3層は酸化鉄分の沈着が顕著である。4層は灰色～青灰色シルト～中粒砂。調査地の北～中部に認められるラミナ構造を有する河川堆積層である。12区では4層に対応するA層(灰色～黄灰色極粗粒砂



第30図 断面図(S = 1/100)

～細礫混シルト質粘土)を確認したが、層相が汚れていることから、遺構埋土の可能性が考えられる。5・6層は灰色～暗灰黄色シルト質粘土。湿地性堆積層である。7層は褐灰色粘土質シルト。黄灰色シルトのブロック(2～3cm大)が混在する地層である。下位に続く8層の土壌化部分に相当する。8層は灰色～青灰色シルト～細粒砂。河川堆積層である。7・8層は調査地西部の7・15～18区において確認できた。9層は黒褐色シルト質粘土。土壌化層の可能性が高い。調査地北端の1・2区で確認した。

【検出遺構・出土遺物】なし。

(2)まとめ：今回の調査地周辺では、これまでに数次にわたる調査が行われ、弥生時代中期～中世の遺構・遺物を検出してきた。したがって当調査地においても、当該期の遺構・遺物の検出が期待された。結果は、調査地の大部分が、ラミナ構造の顕著な河川堆積層(4・8層)や、粘性に富んだ湿地性堆積層(5・6層)が互層を成して堆積する環境下にあったことを明らかにした。僅かに、調査地北部に位置する1・2区や西部の7・15～18区において土壌化層(7・9層)を確認したが、いずれも調査地内には展開しない。したがって、本調査地の北方や西方において遺構の検出される可能性の高いことを指摘しておきたい。

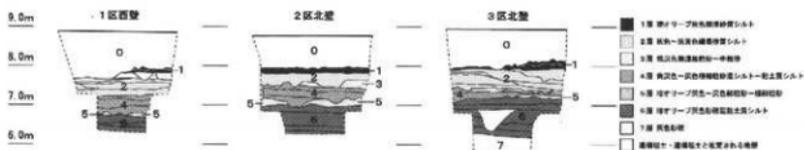
## 2-5 久宝寺遺跡(2007-181)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.0×3.0m 3ヶ所(西から1区～3区)について、現地表(T.P.+8.8～9.0m)下2.5～3.0mまでを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地区記載の標高値(調査地南東側の交差点中央：T.P.+9.0m)である。

【地層】盛土・攪乱埋土・小規模な遺構埋土と見られるものを除き、大きく7層に分けられる。1層は、礫混砂質シルト。旧耕作土である。2層は、礫混砂質シルトで、ブロック状かブロック土を含む部分が多い。近世の耕作土と考えられる。3層は、礫混粗粒砂～中粒砂で、2区で残っていた。下部に上部より細粒の砂が堆積していることから、洪水による堆積層と考えられる。4層は、極細粒砂混シルト～粘土質シルトで、水田耕作土と考えられる。5層は、細粒砂～極細粒砂で、洪水による堆積層と見られる。6層は、砂礫混粘土質シルト。全調査区で厚く堆積している。2区・3区ではブロック状かブロック土を含むことから、人為的な攪拌により形成されたものと考えられる。1区では砂礫が混在せず、植物遺体を含むことから、人為的な攪拌をほとんど被っていない可能性がある。7層は、砂礫層で、1区・3区で確認された。堆積構造は確認できなかったが、湧水の激しさから河川堆積層と考えられる。

【検出遺構】遺構の検出はなし。断面観察では、1区2層上面、3区6層中に、遺構埋土と推測される地層を確認した。この内前者は、近世以降の耕作に伴うもの、後者は、小穴や溝の埋土と推定される。

【出土遺物】1区の2層下部で土師器・国産磁器の破片3点、1区～3区の6層で弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器の破片、3区の7層で弥生土器(V様式)・古式土師器の破片5点が出土している。6層から出土した土器は、平安時代前期までのもので、出土量は3区が相対的に多い。6層から出土した土器のうち、弥生土器・古式土師器は磨耗しており、奈良・平安時代のものは残存度の高いものが含まれ、ほとんど磨耗していない。このことから、弥生土器・古式土師器は下位層から巻き上げられたもので、奈良・平安時代のものは埋まってからほとんど動いていないと推測できる。7層から出土した土



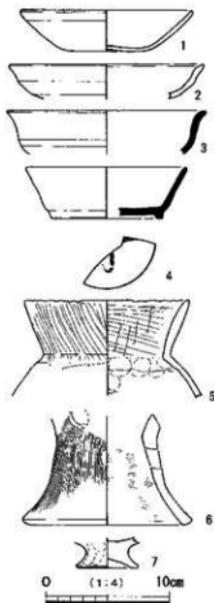
第31図 断面図(S=1/100)

器は、磨耗しているものが多いことから、砂礫とともに他所から流されてきたものと考えられる。出土遺物のうち、1区の6層出土の須恵器杯2点(3・4)と製塩土器の台脚1点(7)、2区の6層出土の土師器皿1点(2)、3区の6層出土の土師器椀1点(1)、3区の7層出土の弥生土器器台1点(6)・古式土師器壺1点(5)を図化した。4は高台内に墨書が確認できたが、墨書が欠損部分に掛かるため解読は不能である(「丁」か)。7は粗製のもので、ユビオサエ・ナデにより成形されている。6層出土遺物のうち時期を比定できるものは、1・2が平安時代前期、3が奈良時代後半、7が古墳時代前期後半に比定できる。出土遺物とその残存状態から、6層が最終的に形成された時期は、平安時代前期と考えた大過ない。

(2)まとめ：今回の遺構確認調査では、同じ調査地内で実施された久宝寺遺跡2006-174の調査で確認された地層の堆積と同様の堆積が確認された。ただ、2006-174の調査で確認された古代以降の水田耕作土に相当する地層は、2区・3区では、①砂礫の混じりが多くブロック状ないしブロック土を含む、②3区の当該層中に遺構埋土と推定されるものが確認された、③出土遺物量が多く残存度の高いものが含まれることから、水田耕作土ではない可能性がある。

#### 参考文献

・広瀬和雄 1994 「Ⅲ・6 大阪府」『日本土器製塩研究』



第32図 出土遺物実測図

## 2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0㎡1ヶ所、約2.0×1.0m、面積約2.0㎡1ヶ所の計2ヶ所(南から1区・2区)について、現地表(T.P.+9.3~9.4m)下0.7~2.0mまでを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地中央から北東側約45mの道路上：T.P.+8.5m)である。

【地層】1区の地層は、5つに大別される。上位からI層：既存建物建築時の盛土(2層)・既存建物機能時の攪乱埋土(1層)、II層：近代の整地層(3層)、III層：近世(17世紀後半以降)の整地層・遺構埋土(4層~12層)、IV層：中世後半~近世(17世紀前半以前)の遺構埋土(13層~14層)、V層：中世後半以前の自然堆積層(15層)である。I層~III層は礫混砂質シルト(ブロック状)を主体とし、IV層は細粒砂質シルト~砂質泥にV層のブロック土が混じり、V層は極細粒砂混粘土質シルトである。III層のうち4層からは、III層中の他の層に比べて遺物が多く出土している。4層は、地層断面において窪み状に確認できることから、遺構埋土の可能性が高い。

2区の地層は、1区のII層・III層に相当する整地層・遺構埋土(3層~7層・10層)と、割り排水溝の埋土(1層・2層・8層・9層)が切り合い重なる堆積を呈し、その下位には1区のV層に相当する極細粒砂混粘土質シルト(11層)が堆積する。

【検出遺構】1区：III層中で2面(第1面・第2面)、V層の上面で1面(第3面)の遺構検出面を調査した。第1面では上坑3基(S K 101~103)、第2面では上坑2基(S K 201・202)、第3面では土坑1基(S K 301)・溝1条(S D 301)を検出した。

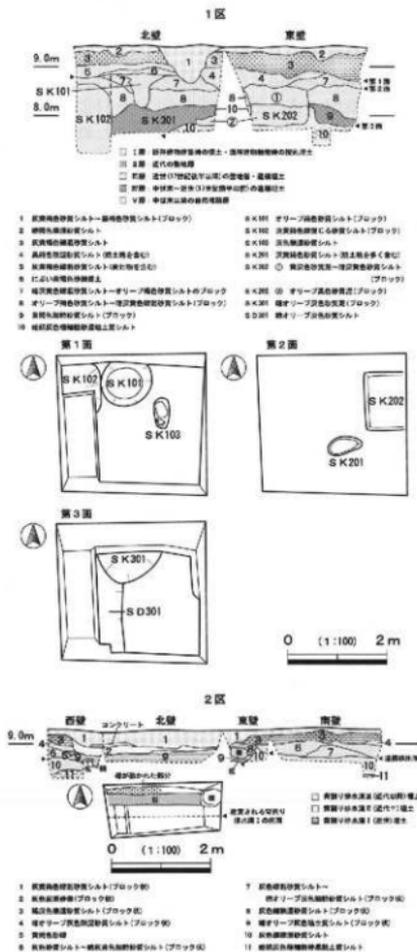
S K 101・102・103は、6層除去面で検出された土坑である。このうち、S K 102は筒型に深く、中は大量の瓦・陶磁器などで充填されており、上部は炭を主体とする。瓦・陶器には2次焼成を受けたものがあり、焼成を受けた土塊(礫土)が含まれていた。S K 103は人頭大と華大の礫で充填されており、上

面は平たい。礎石を据えた穴と推定される。S K 201・202は、12層上面で検出されたものである。S K 202は方形の掘方で底部に木枠が残っていた。地下式坑と推定される。Ⅲ層中で検出した遺構の帰属時期は、第1面検出遺構が18世紀後半、第2面検出遺構が17世紀後半～18世紀前半に比定される。S K 301は14層下面で、S D 301は15層上面で検出した遺構である。帰属時期は、S K 301が16世紀末～17世紀前半、S D 301が中世後半(15～16世紀代)に比定できる。

2区：地層断面において、3時期の背割り排水溝(下位から背割り排水溝Ⅰ～背割り排水溝Ⅲ)を確認したほか、背割り排水溝Ⅰの底に敷かれていた板を検出した。また調査区西側の溝の底に当たる部分では、板に沿って拳大の礫が敷かれているのを確認した。上層の機械掘削時には、調査区東側で人頭大以上の礫を数個検出した。これらの礫は、密に並んでいないこと、礫の向きが不定であることから、護岸の石列ではないと判断し、これを除去した。これらの礫は、調査区西端では検出されなかったことや、東壁地層断面の観察から、背割り排水溝Ⅰを埋め立てる時に投げ入れたものと考えられる。背割り排水溝Ⅰの帰属時期は、18世紀前半に比定できる。

【出土遺物(図版8・9)】1区のⅢ層中の整地層・遺構埋土からは、土師器・須恵器・国産陶磁器・瓦(瓦片を含む)が出土した。このうち、S K 101出土の3点(1～3)、S K 102出土の11点(4～14)、S K 202出土の3点(15～17)、4層出土の6点(21～26)を図版に掲載した。1区Ⅳ層中の遺構埋土からは、S K 301から丹波糸鉢1点(18)、S D 301埋土から土師器1点(19)、13層から瀬戸美濃1点(27)が出土した。

2区の背割り排水溝Ⅰの埋土から、土師器・国産陶磁器・瓦の破片が少量出土した。19は土師器皿。15～16世紀のヘソ皿である。12・20は土師器地埴。12は口縁部が直線的に内傾する。20は口縁部外面に断面三角形の貼付け突帯を持つ。奈良盆地中・南部を中心に分布する。8・9・10・11は塚産の播鉢。播目・胎土などから、8と9、10と11が同一個体と見られる。いずれも、内底面に5～9条1帯の円弧状の播目が2～3帯見られる。27は瀬戸美濃丸皿。16世紀後半のものと思われる。18は丹波大平鉢。体部と口縁部の境が屈曲するもので、16世紀末～17世紀前半の所産である。26は丹波播鉢。播目は6条1



帯で、内底面には外周に1帯、その中に1帯が確認される。1・25は肥前系陶器碗。1は掛け以外が全面施釉されている。25は高台が露胎で、高台脇の胴部下半に回転ケズリを施す。2・3は肥前系陶器皿。2は、見込みは蛇の目刺し、高台内は露胎である。6は肥前系陶器鉢。刷毛目による波状文が描かれている。15・16・21～23は肥前系磁器碗。15は蛇の目刺しの見込みに退化した五弁花文と見られる文様が描かれている。16～23は草花文が外面に描かれている。5・7は肥前系磁器皿。5は内外面に草花文が描かれ、高台内銘款が見られる。焼継の痕が認められる。7は青磁である。口縁部がくの字に屈曲し、三足を伴うもので、一足が残存する。見込みには芭蕉文が見られる。4は中国産磁器碗。17は関西系(京焼系)陶器筒型碗。24は関西系(京焼系)陶器碗。13・14は軒丸瓦。瓦当文様はともに左巻きの巴文で、珠文の数が異なる(13が16個、14が15個)。

各遺構埋土・地層の出土遺物が示す下限時期は、S K 101が18世紀、S K 102が18世紀後半、S K 202が17世紀末～18世紀前半、S K 301が16世紀末～17世紀前半、S D 301が15～16世紀、背割り排水溝1が17世紀末～18世紀前半、4層が18世紀末～19世紀初頭、13層が16世紀後半である。

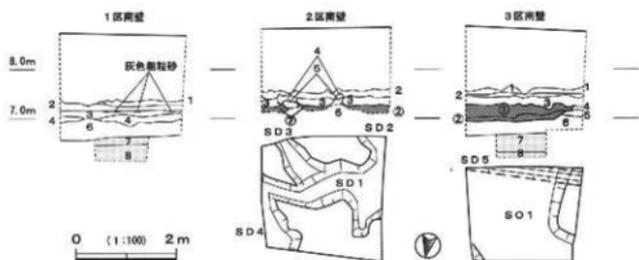
(2)まとめ：今回の発掘調査では、久宝寺寺内町成立以降のものを主体とする遺構・遺物を検出した。(財)八尾市文化財調査研究会により実施された第1次調査地(今回の調査地の北東約100m)で確認された天正5(1577)年の「石山合戦」時と考えられている焼土層は、今回の調査地では確認できなかった。第3面で検出したS D 301は、出土遺物から中世後半の遺構である可能性がある。近世遺構の中で、18世紀後半に比定できるS K 102は、2次焼成を受けたものを含む大量の瓦・陶磁器、焼成を受けた土塊(壁土)、炭で充填されており、火災時の廃棄物を投棄して埋めたものと考えられる。調査地周辺においては、江戸時代に「中町焼け」と呼ばれる大規模な火災があったことが知られており、S K 102の出土遺物が「中町焼け」に伴い廃棄されたものとは断定できないが、その可能性はある。

## 2-7 小阪合遺跡(2007-125)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡の3ヶ所(北から1～3区)について、現地表(T.P.+8.7～8.9m前後)下2.0～2.8mまでを調査した。使用した標高は、西200mの小阪合第41次調査地(K S 2007-41)内のポイントである。

【地層】現地地下1.3m前後までは盛土である。各調査区で1～3層は青灰色系の砂礫が混じる粘土質シルト、4～6層は褐色系の砂礫が混じる粘土質シルト、7層灰色極細砂混砂質シルト、8層灰色粗砂である。1～3層は、近世以降近年までの作土・床土等、4～6層は中世頃の地層、7・8層はそれ以前の河川埋土である。2・3区では4～6層上面を構築面とする遺構を検出した。

【検出遺構・出土遺物】2区では溝状遺構を検出した。溝は複雑に切りあっており、概ね東西方向のもの1条(S D 1)、南東-北西のもの2条(S D 2・3)が見られる。埋土は①淡青灰色粘砂土質である。



第34図 平・断面図

いずれも農事用のものであろう。6層上面には、部分的に4・5層がブロックで含まれており、溝掘削時の巻上げの可能性がある。

3区では、落込み1ヶ所(SO1)を検出した。西から東へ向かって下がる。調査区北東隅ではさらに急角度で落ちるようである。埋土は②青灰～緑灰色粘土質シルト・③緑灰色礫混粘土質シルトで、北東隅で鎌倉時代前期の瓦器碗片が出土した。

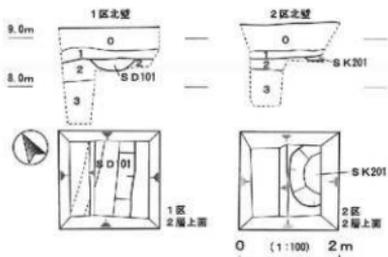
(2)まとめ：調査区北～北西の近距離に位置する小阪合21・22次・40次・41次調査では、鎌倉～室町時代の生活面が検出されており、当地でも中世の生活面が連続している事が明らかになった。

## 2-8 成法寺遺跡(2007-137)の調査

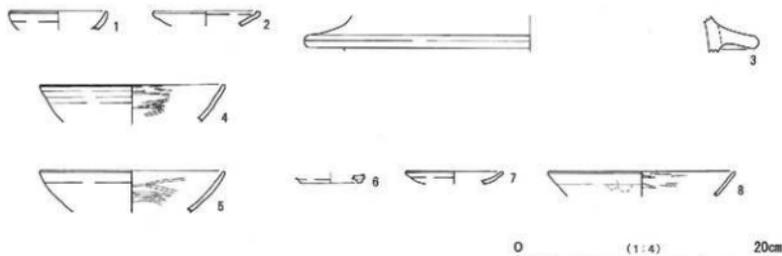
(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡2ヶ所(北から1・2区)について、現地表(T.P.+9.2～9.3m)下2.0m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北西部の道路上：T.P.+9.3m)である。

【地層】現地表下0.5mまでは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2.0m前後までの約1.5mの間において3層の地層を確認した。1層は2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂混粘土。2層は2.5Y5/4黄褐色細粒シルト混粘土で、上面は土壌化している。鎌倉時代の遺構を検出した。3層は5Y7/8黄色細粒砂混粗粒シルトの河川堆積である。

【検出遺構・出土遺物】1区のはほぼ中央で溝1条(SD101)検出した。SD101は南北方向に伸びる。幅約1.0m、深さ約0.3mを測る。埋土は5Y5/1灰色細粒砂混粘土で、鎌倉時代の土師器および瓦器の破片が出土した。この内掲載したものは1～7である。1・2は土師器小皿。1の口縁端部は尖りぎみに丸く終わる。内外面はナデを施す。2の口縁端部は内側に肥厚する。内外面はナデを施す。3は土師器の羽釜で、鈎が水平に伸びる。内外面はヨコナデを施す。鈎部下位には煤が付着している。4は瓦器碗である。口縁端部は丸く終わる。内面は横方向のヘラミガキ、外面はナデを施す。器壁が厚く、内面のヘラミガキは丁寧な施していることから、12世紀代に比定できる。5は瓦器碗である。口縁端部は丸く終わる。内面は横方向のヘラミガキ、外面はナデを施す。器高は浅く、器壁は薄い。また、内面のヘラミガキは雑に施していることから、13世紀後半頃に比定できる。6は瓦器碗で、断面逆台形の高台が貼り付く。体部内面はヘラミガキと思われるが表部磨耗のため不明瞭である。体部外面および高台部はナ



第35図 平・断面図



第36図 出土遺物実測図

デを施す。12世紀代に比定できる。7は瓦器小皿である。口縁端部は丸く終わる。内外面はナデを施す。

2区の東部では、土坑1基(SK201)を検出した。SK201は遺構の東側に調査区外にいたるため規模は不明である。埋土は7.5YR5/2灰褐色細粒砂粘粘土で、鎌倉時代の土師器および瓦器の破片が出土した。この内掲載したものは8である。8は瓦器碗である。内面は横方向のヘラミガキ、外面はナデを施す。13世紀後半頃に比定できる。

(2)まとめ：今回の調査では、鎌倉時代の遺構を検出した。南側の調査地(成法寺遺跡第13・15次調査)でも同時代の遺構を検出しており、居住域は北側へ広がっていることが明らかになった。

#### 参考文献

・西村公助 2006 「Ⅱ 成法寺遺跡(第15次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告90』(財)八尾市文化財調査研究会

## 2-9 成法寺遺跡(2007-202)の調査

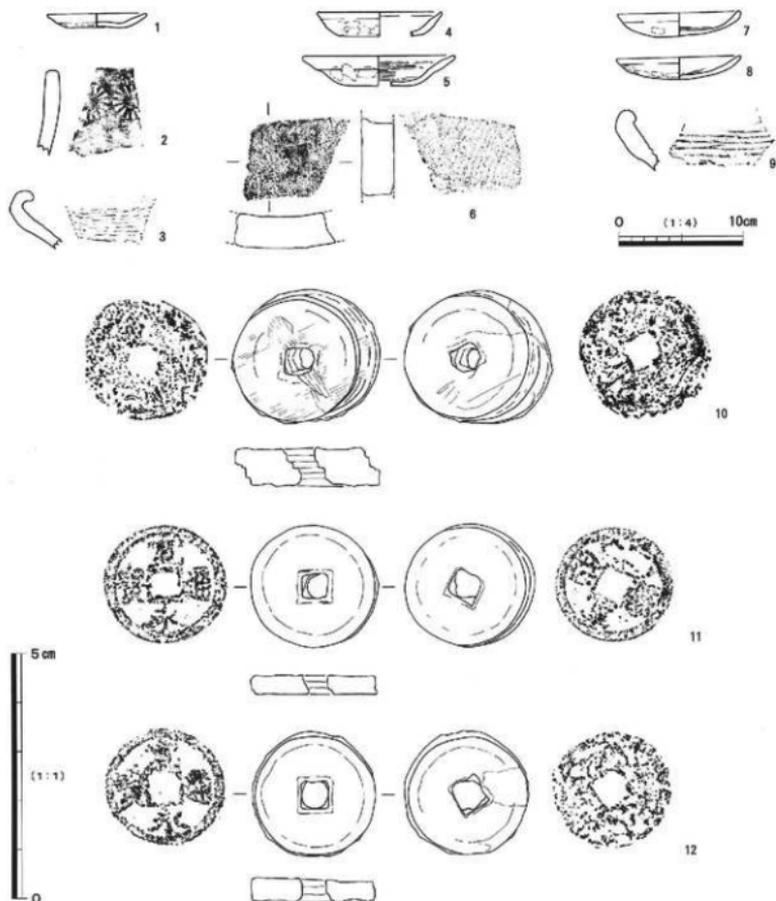
(1)調査概要：3.0×3.0m、面積約9.0㎡2ヶ所(西から1・2区)、2.5×2.5m面積約6.25㎡2ヶ所(南から3・4区)、合計4ヶ所30.5㎡について、現地表(T.P.+9.1m前後)下2.0m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南西100m：T.P.+9.3m)である。

【地層】現地表下0.2~0.5m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土(0層)。以下現地表下2m前後までの1.5m間において4つの調査区で11層の基本的な地層を確認した。2区では、盛土直下に版築状に突き固められた整地層(20層)が見られた。また、2・3区では遺構面である4層にまで及ぶ近現代の配管や近世のゴミ穴など(⑤~⑧)が見られ、1・4区での層序が比較的安定していた。盛土以下の1・2層は近世以降の地層で、層中に土師器・陶磁器・瓦等の極小片を極少量含んでいる。3層は中世以降の地層で、層中に瓦器碗片を含む。4層が遺構検出面で、上面の標高は8.2m前後であるが、2・3区では不明瞭な点が多い。5層は河川埋土で、各調査区で見られたが、2区では4・5層間に21~23層が互層状に見られた。4区では3・4層に対応する41・42層はブロック層で、埋め立てによる整地がなされているものと考えられる。

【検出遺構・出土遺物】1区：落込み1ヶ所(SO11)を検出した。検出幅1.7m、深さ0.7mを測り、南北に伸びる。東端でわずかに立ち上ることから、溝の可能性があり、幅は3m程度に復元できる。埋土は①~④で、堆積状況から、一時期空堀であったことがわかる。なお、ここでは砂脈が見られたが、



第37図 平・断面図



第38図 出土遺物実測図

永正7(1510)年あるいは安政元(1858)年の大地震によるものと推察される。内部からは、14世紀頃の土師器小皿(1)・瓦器椀・いわゆる奈良火鉢(2)・瓦質土器甕(3)などが出土している。

2区：小穴3個(SK22・23・26)、溝2条(SD21・25)、落込み1ヶ所(SO25)を検出した。埋土はSD21・SK22・23が灰褐色粘土質シルト、SD24が灰色シルト質粘土、SO25が⑥である。SK26は粗砂～礫で充填されており、内部から15世紀頃の土師器皿(4・5)が出土している。SO25からは、平瓦6が出土している。

3区：小穴4個(SK33～35)、溝2条(SD31・32)を検出した。埋土はSD31が灰褐色粘土質シルト、SD32が粗砂に灰褐色粘土質シルトのブロック、SK33～35が灰色粘土質シルトで底には礫が敷かれていた。小穴は東西に一線に並んでいる。SK33からは17世紀以降の土師器小皿(7・8)のほか、不明銅

銭6枚が壺着した状態で出土している(10)。S K35からは3枚ずつ壺着した状態の「寛永通宝」が2組出土している(11・12)。S K33とともに近世の地鎮遺構であろう。S K33出土の銅銭10には、中央部に?紐(葉か?)の痕跡、側面には布の痕跡があり、数枚束ねて布で包んで埋められていたことが推測できる。

4区：土坑1基(S K41)を検出した。一辺1.6mの正方形の土坑で、深さは0.6mを測る。直線的に掘り込まれ、底はおおむね平坦であるが、北西部ににぶい段を持つ。埋土が⑩・⑪・⑧からなり、深みに⑧が溜まる。内部からは近世の陶磁器・瓦等が出土しており、遺構ベースである41・42層からは15世紀末～16世紀初頭にまで下る瓦質土器窯(9)のほか、古墳時代後期にまで遡る須恵器杯身などが極少量出土している。

(2)まとめ：今回の調査では、中近世の遺構・遺物を検出した。1区のS O11は区画溝の可能性がある。そこより東の2区では室町時代の、3区では江戸時代の地鎮遺構を検出したことから、1区のS O11を境に、西に居住域、東に宗教的な施設が存在した可能性が高い。

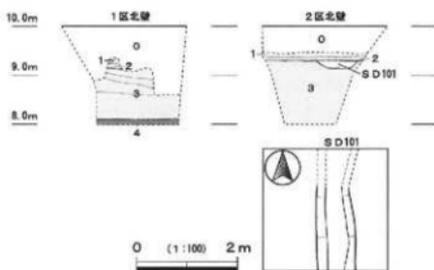
## 2-10 成法寺遺跡(2007-268)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所(西から1・2区)について、現地表(T.P.+10.0m前後)下2.0m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地西部を南北に伸びる市道(調査地北西部に位置するT字路)の中央：T.P.+8.9m)である。

【地層】現地表下0.6～1.4m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土、及び攪乱(0層)である。以下現地表下2.0m前後までの0.6～1.4m間において4層の基本層序を確認した。1層は暗灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。グライ化の顕著な旧水田耕作土である。2層は灰色～灰褐色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～極細粒砂。水田耕作土である。3層は灰色～黄褐色粘土質シルト～極粗粒砂。下方に向かうにつれて粗粒化の傾向を強める河川堆積層である。4層は暗青灰色シルト質粘土～粘土質シルト。グライ化の顕著な湿地性堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】2区において、南北に直線的に伸びる溝を1条(S D101)検出した。S D101は3層砂礫水成層を構築基盤層とするが、2層水田耕作土の影響で、本来の構築面は破壊されている可能性が高い。規模は、長さ2.5m以上、幅0.8m前後、深さ0.15mを測る。埋土は黄灰色～暗灰黄色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルトのブロック土(2～3cm大)である。埋土には土師器や瓦器、瓦の細片がそれぞれ少量混在していた。中世頃に廃絶した溝と推測される。

(2)まとめ：今回の調査では、2区において、中世頃の溝(S D101)を1条検出した。溝は南北方向に直線的に伸びており、何らかの規格性を有していた可能性が考えられる。周辺は、発掘調査の希薄な地域であるが、今後調査が行われる際には、当該期の遺構に注意されたい。

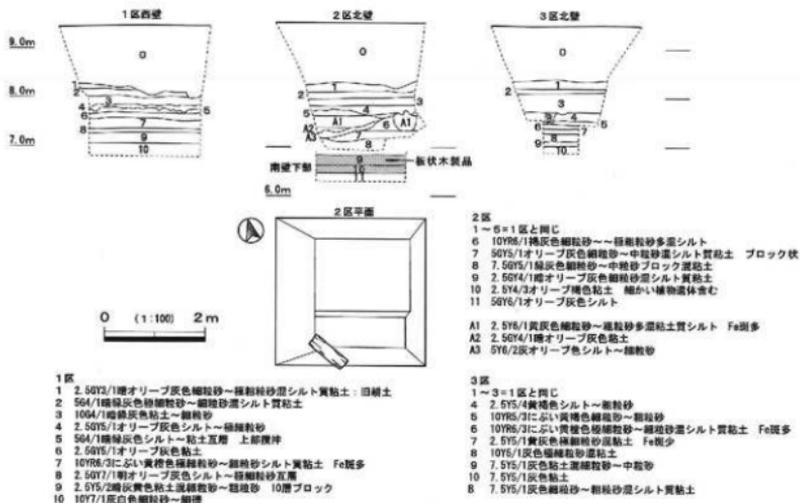


第39図 平・断面図

## 2-11 成法寺遺跡(2007-343)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0㎡3ヶ所(西から1～3区)について、現地表(T.P.+9.5m前後)下2.7m前後までを調査した。使用した標高は、工事図面記載の標高値(調査地南西角の歩道上：T.P.+9.05m)である。

【地層・検出遺構】1区：0層は盛土・攪乱。1層は旧耕土。2・3層は攪拌された作土層で、時期



第40図 平・断面図

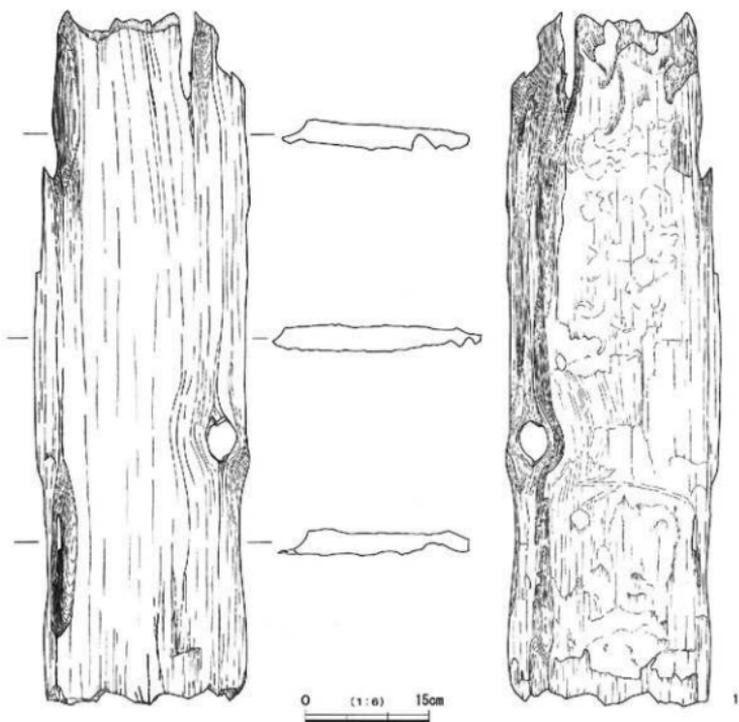
は近世頃と思われる。4層はシルト～極細粒砂の水成層で、一時的な冠水が窺える。5・6層も水成層で、5層下部にはラミナが認められるが、上部は攪拌され上面には踏み込みと考えられる窪みが見られることから作土化していると思われる。7層は攪拌が著しく斑鉄を多く含む層相で作土であろう。5・7層は古代～中世頃に比定されよう。8層は水成層。9層は10層の砂粒と褐色粘土のブロック層で、性格は不明。10層の砂礫層は河川堆積層である。

2区：0～5層は1区と同様。6層は砂粒を多く含むシルト層で、上面から切り込む遺構(A)を北壁断面で確認した。遺構Aは調査区西半を占めると思われる。埋土中からは土師器・瓦器の細片が少量出土しており、時期は古代末～中世に比定される。7・8層は共にブロック状を呈する層相で、人為的に盛られたものか。9～11層は南壁で確認した。9・10層は自然堆積層で、層相から見て溝埋土の可能性が高い。9層中では85×25cmを測る長方形の板状木製品を検出した。遺構構築面については、溝上部に7層相当層が見られることから、8層あるいは7層上面が考えられる。11層は水成層であろう。

3区：0～3層は1・2区と同様。1・2区4層は見られず、3層作土中に攪拌されているのであろう。3層中には土師器・瓦器・陶器の細片が含まれている。4層は攪拌され作土の可能性が高い。上面から切り込むピット状の遺構(B)が北壁に見られる。5層は水成層。6・7層は層相から見て作土と思われ、1区7層に相当する。8～10層は水成層。

【出土遺構】溝埋土である可能性が高い2区9層から板状木製品(1)が出土した。1は平面長方形を呈し、長さ85.1cm・最大幅25.2cm・厚さ3.2cmを測る。片面は平滑で、もう片面はかなり荒れており、平滑面の片側縁には長さ約20cmの楕円形の削り込みを2箇所施している。

(2)まとめ：調査地全域は、近世以降は生産域で、以下には古代～中世頃と考えられる作土層や遺構がみられる。2区では板状木製品を包含する溝埋土と考えられる地層(9・10層)を確認した。西側の成法寺遺跡第1次調査地では古墳時代初頭の方形周溝墓群が検出されているが、埋土やレベル的にもこれらの周溝と近似するもので、関連する遺構である可能性が高い。また7・8層や、1区9層のブロック状の地層についても注意が必要で、周溝墓の墳丘盛土の可能性が考えられる。



第41図 出土遺物実測図

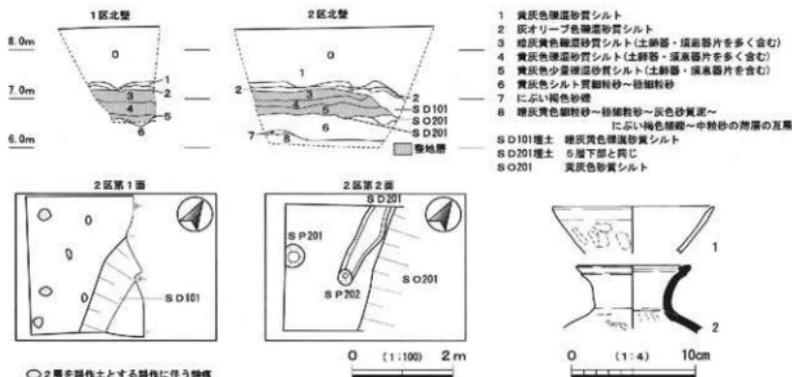
## 2-12 東郷遺跡(2007-49) の調査

(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡1ヶ所、約3.0×4.0m、面積約12.0㎡1ヶ所の計2ヶ所(北から1・2区)について、現地表(T.P.+8.4~8.5m)下1.7~2.4m前後までを調査した。使用した標高は、調査地の南東約0.4kmで実施した東郷遺跡第68次調査地内標高値(T.P.+8.4m)である。

【地層】現代の盛土を含め9層の地層を確認した。現代の盛土層(0層)の下位には、現代ガラス片を含む旧耕作土(1層)とそれ以前の耕作土(2層)が堆積する。その下位には層厚50~60cmの土師器・須恵器の破片を含む整地層と見られる地層(3~5層)が堆積する。この整地層は、周辺の調査地でも確認されている。整地層の下位には、河川堆積層と見られる地層(6層~8層)が堆積する。

【検出遺構】2区では2層を除去した整地層(3層)上面(第1面と呼称)で、溝1条(SD101)・2層を耕作土とする耕作に伴い形成された鋤の痕跡6個を検出した。また、整地層(5層)を除去した6層上面(第2面と呼称)で土坑2基(SK201・202)・溝1条(SD201)・落込み1ヶ所(SO201)を検出した。

SD101は、埋土からの出土遺物に乏しく、明確な帰属時期は不明であるが、層位から中世ないし近世の遺構と推測される。第2面で検出した遺構は、遺構の切り合い・埋土分類・層位から、SK201・202が最も新しく、SD201がその次に新しく、SO201が最も古いと考えられる。最も新しいSK202の帰属時期は、出土遺物から、平安時代に比定できる。



第42図 平・断面図

第43図 出土遺物実測図

一方1区では、3層上面で精査を行ったが遺構は検出できなかった。北壁断面において5層が窪む部分を確認したことから、6層上面で遺構が検出される可能性がある。

【出土遺物】第1面で検出した S D 101、第2面で検出した S K 201・202・S D 201・S O 201の埋土、及び2層～5層から、土師器・須恵器の破片が出土した。3層・4層には破片が多く含まれている。出土遺物のうち S K 202埋土出土の土師器1点(1)と S D 201埋土出土の須恵器1点(2)を図化した。1は、杯。表面の磨耗が著しいが、口縁部外面に横ナデ、体部外面に指オサエの痕跡がわずかに残る。平安時代に比定できる。2は、横瓶の口縁部と見られる。外反する口縁部に内傾する端面を持つ。口縁部外面に強い横ナデによる段が見られ、内面は肥厚している。わずかに残る肩部外面にタタキ目、内面にナデが見られる。内傾する口縁端部の特徴から、7世紀中葉(飛鳥II)のものか。

(2)まとめ：今回の遺構確認調査では、中世ないし近世の溝、古墳時代中期以降平安時代以前の土坑・溝・落込みを検出した。また、周辺の調査地で確認されている整地層を確認した。府道を挟む西側で(財)八尾市文化財調査研究会が実施した第60次調査の担当者によると、第60次調査で確認された整地層とは層相が異なり、調査地南東部で検出されて中世の大溝の埋土と類似するとのことで、この大溝を挟み、東西で異なる整地が行われた可能性がある。

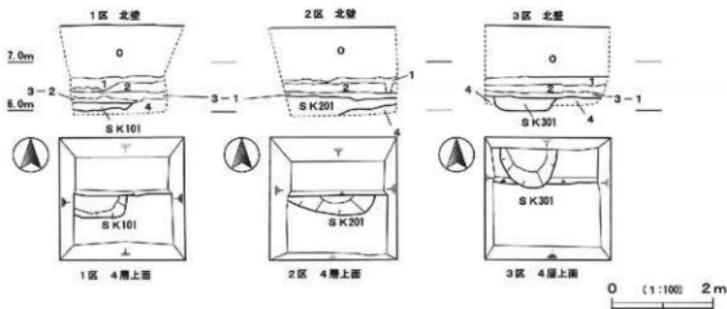
#### 参考文献

- ・樋口 薫 2004「23.東郷遺跡第60次調査(T.G.2003-60)」『平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

## 2-13. 東郷遺跡(2007-209)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡3ヶ所(西から1～3区)について、現地表(T.P.+7.7m)下1.8m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南西側の道路交差点中央：T.P.+7.5m)である。

【地層】現地表下1.8m前後までにおいて5層の地層を確認した。0層は盛土。1層はN3/O灰色細粒砂混粘土の旧耕作土。2層は7.5YR4/2褐灰色細粒砂混粘土。3-1は5Y5/1灰色細粒砂～細粒シルトで平安時代～鎌倉時代の遺物が出土した。3-2層はN5/O灰色粘土で、上面は攪拌を受け土壌化している。平安時代～鎌倉時代の耕作土と思われる。4層は10YR4/6褐色細粒～粗粒砂で、上面は土壌化してい



第44図 平・断面図

る。古墳時代初頭～後期の遺構を検出した。

【検出遺構】1区：SK101は北西部で検出した。遺構の北西側が調査区外に至るため平面形状及び断面形状は不明である。検出した東西幅は1.0m、南北幅は1.2mで、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土で、古墳時代後期の遺物が出土した。

2区：SK201は北西部で検出した。遺構の北西側が調査区外に至るため平面形状及び断面形状は不明である。検出した東西幅は1.8m、南北幅は1.1mで、深さ0.4mを測る。埋土は7.5YR3/4暗褐色細粒砂混粘土で古墳時代初頭～後期の遺物が出土した。

3区：SK301は北部で検出した。遺構の北側が調査区外に至るため平面形状及び断面形状は不明である。検出した東西幅は1.1m、南北幅は0.8mで、深さは0.3mを測る。埋土は10YR5/8黄褐色細粒砂混粘土で弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物が出土した。このうち掲載したものは、V様式系の甕(1)である。1は平底で、外面にはタキを、内面にはナデを施す。



第45図 出土遺物実測図

(2)まとめ：今回の調査では古墳時代初頭と後期の遺構を検出した。古墳時代初頭の遺構は北東約50m付近の研究会第36次調査で検出しており(荒川2007)、古墳時代後期の遺構は南西約50m付近の研究会第54次調査で検出している(樋口2000)ことから、同時期の集落が一帯に広がっていることが判明した。

#### 参考文献

- ・荒川和哉 2007「Ⅱ 東郡遺跡第36次調査(T G91-36)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告97』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫 2000「Ⅷ 東郡遺跡第54次調査(T G97-54)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告66』(財)八尾市文化財調査研究会

## 2-14 西郡廃寺(2007-44)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約8.0㎡の2ヶ所(1・2区と呼称)について、現地表(T.P.+5.5m)下1.0m前後までを調査した。使用した標高は、調査地から約150m南方の仮ベンチマーク(T.P.+5.194m)である。



第46図 断面図(S=1/100)

【地層】現地表下0.3～0.4m前後までは盛土、2区では盛土以下に1950年代までの作土(1層)がわずかに遺存しており、両地区で厚さ0.1～0.2m程度の床土(2層)に至る。2区では、近世の国産磁器・瓦器の小片がわずかに出土した。次いで、2区には粗粒砂～礫が見られる(3層)。4層は青灰色粗粒砂混砂

質シルトで層厚0.1～0.2m前後、作土である。5層は茶褐色砂質シルトで層厚0.1～0.2m、土師器等の小破片が出土した。6層は茶褐色粗粒砂混砂質シルトで層厚0.1～0.2m、土師器・瓦器・瓦等の小破片が少量出土した。7層は茶褐色粗粒砂～礫で層厚0.1～0.2m、土師器・瓦器・須恵器等の小破片が数点出土した。8層は褐色極細粒砂で層厚0.1m以上を確認した。

【検出遺構・出土遺物】なし。

(2)まとめ：当調査地の北隣の調査地(西郡廃寺4次調査)では、T.P.+4.8m前後で近世、T.P.+4.0m前後で平安時代から鎌倉時代、T.P.+3.8m前後で古墳時代の遺構を検出している。今回の調査結果をあてはめると、2～4層が近世、5層以下が中世に相当するものと考えられ、西郡廃寺に関連する遺構・遺物は確認できなかった。

## 2-15 西郡廃寺(2007-184)の調査

(1)調査概要：平面規模2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所(北から1・2区)について、現地表(T.P.+5.0m)下2.5m前後までを調査した。なお、地下水位が現地表下約2.0m前後でみられ、2.0m以下については上部調査終了後、重機で確認した。使用した標高は、下水道工事18-1工区のKBM(T.P.+5.167m)である。

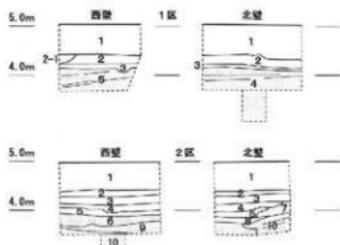
【地層】1区：1層は盛土。2層は旧耕作土で、硬くしまっていた。南側の2-1層はやわらかい土質である。3層は褐色砂礫混じりシルトで、土師器・瓦の細片が少量含まれている。4層は淡灰茶色細砂で、現地表下2.5m以上の堆積がある。砂層は南東方向にゆるやかに傾斜するラミナがみられた。

2区：1層は盛土。2層は旧耕作土で、北区の2-1層と同一層と考えられる。3層は暗青灰色粘質シルト。4層は青灰褐色シルト。5層は灰褐色微砂混シルト。6層は茶灰色～淡青灰色微砂。7層は褐色細砂。8層は茶褐色砂礫混細砂。9層は暗灰褐色粘質土。10層は乳灰色細砂である。6～10層は河川又は洪水層の堆積と考えられる。

【検出遺構・出土遺物】1区で西郡廃寺関連の遺構面を確認したが、遺構は確認できなかった。遺物は、1区の第3層内から土師器・瓦等の細片が少量出土した。

(2)まとめ：今回の調査地は、西郡廃寺の推定地とされている天神社の南側に位置する。北側の道路工事(研究会NK T2006-2調査)では西郡廃寺及び平安時代後期頃の遺構・遺物が検出されており、今回の調査地にも西郡廃寺の地層が広がっていると思われたが、2区では水田遺構と考えられる耕作土がみられた。1区では当該期の遺構面と生産域との境目が確認され、西郡廃寺は南側への広がりが見られなかった。後世で生産域と変貌したかは不透明である。

下層部では河川又は洪水層と思われる砂層が厚く堆積しており、調査地東部の住宅建設に伴う調査(KF88-6調査)で検出した弥生時代後期の地層は確認できなかった。

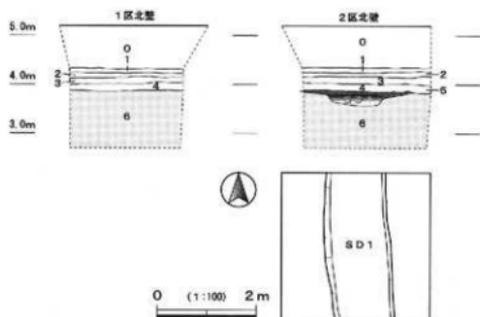


第47図 断面図(S=1/100)

## 2-16 西郡廃寺(2007-334)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0㎡2ヶ所(北から1・2区)について、現地表(T.P.+5.2m)下2.5m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地西部を南南西～北北東に伸びる主要地方道八尾枚方線の中央：T.P.+4.9m)である。

【地層】現地表下0.9m前後までは、現代の整地に伴う客土・盛土、及び攪乱(0層)である。以下現地表下2.5m前後までの1.6m間において6層の基本層序を確認した。1層は暗灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト。旧水田耕作土である。2層は暗オリーブ灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。グライ化の顕著な水田耕作土である。瓦器細片が混在していた。3層はオリーブ灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト、4層は青灰色～オリーブ灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～極細粒砂である。両層ともに攪拌の顕著な水田

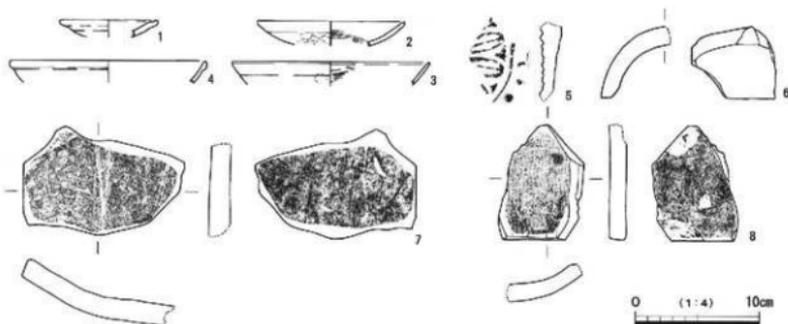


第48図 平・断面図

耕作土である。この内4層には、土師器や須恵器、瓦器、白磁、瓦片が混在していた。5層は暗灰色～灰色粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト。下位に堆積する6層の土壌化部分に相当する。2区で確認した。6層は黄灰色～灰色シルト～細礫。ラミナ構造の顕著な河川堆積層である。

【検出遺構】2区において、ほぼ南北に伸びる溝を1条(SD1)検出した。検出規模は長さ2m以上、幅約1.2mである。断面形状は、皿状を呈し、深さ約0.2mを測る。埋土は灰色～灰白色粘土質シルト～極細粒砂で、一部ラミナ構造も観察できた。出土遺物はなし。なお、ここでは溝としたが、6層河川堆積層が形成される最終段階の小さい流路であった可能性も否定できない。

【出土遺物】4層内からはコンテナ1箱分の遺物が出土した。この内図化できたのは8点(1～8)である。1は土師器小皿。口縁端部は小さく外反した後、内側に丸く肥厚する個体である。外面調整は横ナデ(1単位)である。2・3は瓦器碗。いずれも、外面は指頭成形後、口縁端部付近に横ナデを行う個体で、内面には横ヒミガキが見える。13世紀代に帰属する可能性が考えられる。4は口縁端部に小さな玉縁を形成する白磁碗細片である。5は軒丸瓦の瓦当細片。花弁は若干窪み、弁端は丸い。子葉は凸線で表現される。間弁は楔形を成す。外区には半球を呈する珠文を配置する。内区と外区の境界には1条の凸線が巡る。瓦当裏面には、丸瓦との接合に伴う補強の痕跡も認められる。白鳳～奈良時代の所産で



第49図 2区4層内出土遺物実測図

ある。6は丸瓦。内面には糸切り痕と布目痕が見える。側面～内面側縁には縦位ケズリ(C-1手法)が施される。7・8は平瓦。この内7には内面に布目、外面に縄目タタキの痕跡が見える。8は広端面付近の細片の可能性が考えられる。内面には布目のほか、指頭圧痕を確認した。外面は縄目タタキを施した後、横位ナデを行う。この内、内面の指頭圧痕と外面の横位ナデは運動して形成されたものと推測される。広端面は縦位ケズリである。

(2)まとめ：今回の調査地は、古代寺院である西郡廃寺推定地(西郡天神社)の西に隣接する。したがって、これに関連する遺構の検出が期待されたが、結果は上記の通りであった。ただし2区において、6層河川堆積層の土壌化部分に相当する5層を確認したことは、本調査地一帯に古代～中世の生活面が存在した可能性を肯定する成果として、注目される。この土壌化層は、後世の4層水田耕作土により削平を余儀なくされ、1区では存在しない。この4層には、古代～中世に比定される遺物が混在していた。特に、西郡廃寺に使用されていた可能性の高い細弁型式の軒丸瓦(白鳳～奈良時代に帰属)や、中世の白磁の出土は、付近に西郡廃寺が存在したことを彷彿させる成果として特筆される。なお4層に混在した遺物は、1区に比して、2区で出土が多く認められることから、当該期の遺構群が本調査地のより南方に分布した可能性が高くなった。

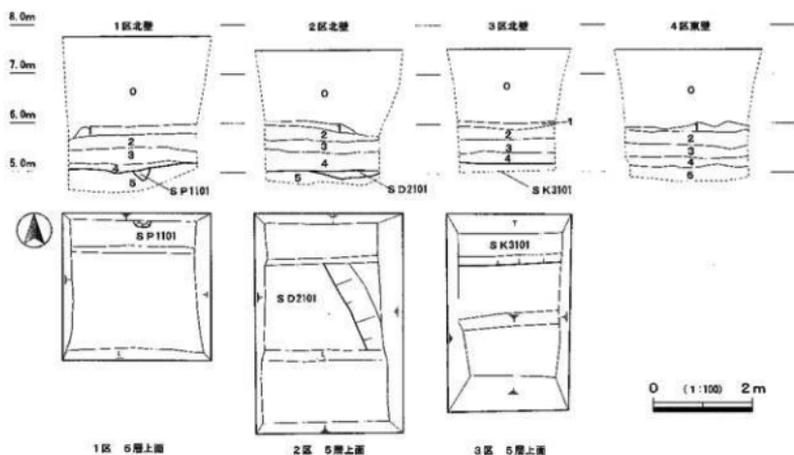
#### 参考文献

・大塚 潔 1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集IX 奈良国立文化財研究所学報 第49冊』奈良国立文化財研究所

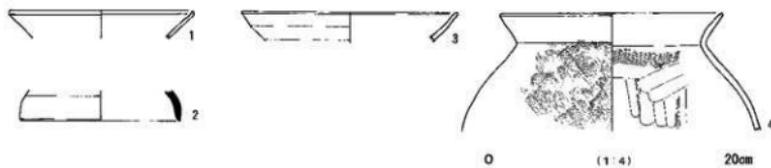
## 2-17 美園遺跡(2007-38)の調査

(1)調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積9.0㎡3ヶ所(1、2、4区)、2.5×2.5m、面積約6.25㎡1ヶ所(3区)について、現地表(T.P.+7.5～7.7m)下3.0m前後まで調査を行った。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南西部に位置する道路上の中央：T.P.+7.1m)である。

【地層】現地地表下1.5～1.7m前後までは、盛土(0層)。以下現地地表下3.0mまでの1.4m間において5層の堆積を確認した。1層は10Y4/1灰色細粒砂混粘土の旧耕作土である。2層は5Y5/4オリブ色細粒



第50図 平・断面図



第51図 出土遺物実測図

シルト質粘土。3層は10YR5/8黄褐色細粒シルトで、1・2区では古墳時代後期の遺物が出土した。4層は5Y2/1黒色粗粒砂混粘土で、1～3区では古墳時代前期の遺物が出土した。5層は5Y4/1灰色粘土で、上面土壌化しており、1～3区では古墳時代前期の遺構を検出した。

【検出遺構・出土遺物】1区：5層上面から切り込む小穴1個(S P1101)を検出した。S P1101は北部で検出した。遺構の北肩は調査区外にあるため規模は不明である。埋土は2.5Y2/1黒色細粒砂混粘土で、古墳時代初頭～前期の遺物が出土した。このうち掲載したものは古式土師器の甕(1)である。1の口縁部は内側につまみ出し、平坦面を形成する。口縁部内外面はヨコナデを施す。

2区：5層上面から切り込む溝1条(S D2101)を検出した。S D2101は東部で検出した。南東から北西方向に伸びる。遺構の東肩は調査区外にあるため、規模は不明である。埋土は5Y4/1灰色細粒～粗粒砂で、遺物の出土はなかった。

3区：5層上面から切り込む土坑1基(S K3101)を検出した。S K3101は北部で検出した。遺構の北肩は調査区外にあるため、規模は不明である。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土で、古墳時代前期の遺物が出土した。

4区：5層上面で調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

1・2区の3層からは古墳時代後期の遺物が出土した。また、1～3区の4層からは古墳時代前期の遺物が出土した。このうち掲載したものは1区3層出土の須恵器杯蓋(2)、1・3区4層出土の古式土師器(布留式新相)の甕(3・4)である。2の口部端部は丸く終わる。内外面は回転ナデを施す。3の口縁部は内湾する。端部は丸味のある平坦面を形成する。口縁部内外面はヨコナデを施す。4の口縁部は屈曲し外反する。体部は球形を呈すると思われる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はハケナデのちユビナデ、外面はハケナデを施す。

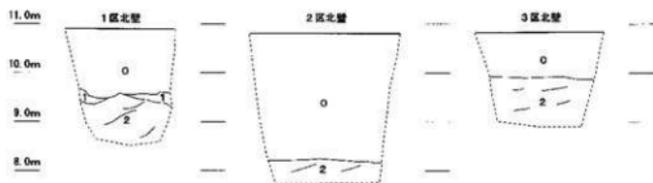
(2)まとめ：今回の調査では古墳時代前期と後期の2時期の遺構・遺物を確認した。同時期の遺構は、北側約30m地点において八尾市教育委員会が昭和56年度に行った調査地でも検出している(米田1983)ことから、一連の遺構群が付近に存在していることが明らかになった。また、南側約20mの遺構確認調査(坪田2007)でも古墳時代前期の甕が出土していることから、南にも同時期の集落が広がっていることが判明した。

#### 参考文献

- ・米田敏幸 1983「第5章 美園遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度(財)八尾市文化財調査研究会報告2』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2007「2-23 美園遺跡(2005-503)の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告書 55 平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

## 2-18 八尾寺内町遺跡隣接地(2006-522)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25㎡2ヶ所(1・3区)と、約3.0×3.0m、面積約9.0㎡1ヶ所(2区)の計3ヶ所を設定し、現地表(T.P.+10.9m前後)下約2.0～3.0mまで調査を行った。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地北東部に位置する道路の二股分岐中央：T.P.+



第52図 断面図(S=1/100)

10.2m)である。

【地層】現地地表3.0mまでに3層の地層を確認した。0層は盛土。1層は7.5YR5/6明褐色細粒シルト。2層は2.5Y6/6明黄褐色細粒砂～細粒シルトである。1・2層は、ラミナ構造が見える河川堆積である。同層からの出土遺物はなかった。

【検出遺構】1～3区の盛土直下において、近代以前に堆積したと考えられる河川堆積(1・2層)を確認した。

(2)まとめ：1・2層の砂層は、旧大和川(現在の長瀬川)の堆積に相当し、当調査地の全域が旧大和川であったと考えられる。この河川の幅は、当調査地の西側40m付近に長瀬川が存在することから、少なくとも40m以上はあったと推測できる。当調査地の東側には、江戸時代初期に形成された八尾寺内町があることから、同時期の遺構、遺物の存在している可能性が高いと予想された。しかし当調査地では、同時期の遺構、遺物はなかった。

#### 参考文献

・岡田清・1999「Ⅲ 八尾寺内町遺跡第1次調査(YC95-1)」『跡八尾市文化財調査研究会報告63』跡八尾市文化財調査研究会

## 2-19 矢作遺跡(2007-119)の調査

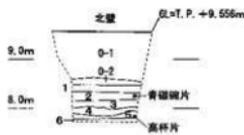
(1)調査概要：平面規模約1.5×3.0m、面積約4.5㎡1ヶ所について、現地表(T.P.+9.4～9.5m前後)下1.9m前後までを調査した。使用した標高は、八尾市作成の地図(1/2500)記載の標高値(調査地北50m地点の道路上：T.P.+9.5m)である。

【地層】現地地表約1.0mが旧建物建築・解体時の盛土・整地(0-1層)、その下約0.2mが農地開発時の盛土(0-2層)である。1層暗青灰色礫混粘土質シルト(層厚0.15m)は旧耕土で、2層青灰色礫混砂質シルト(0.2m)は床上である。以下3層明青灰色礫混砂質シルト(0.15～0.2m)、4層マンガンを含む灰褐色礫混粘土質シルト(0.1～0.2m)、5層鉄を含む明褐色砂質シルト(0.1～0.2m)、6層灰黄褐色砂質シルト(0.1m以上)に至る。

【検出遺構】なし。

【出土遺物】2層からは青磁碗片、4層からは土師器の極小片、6層からは5～6世紀頃の高杯脚部が出土した。

(2)まとめ：今回の調査地は、矢作遺跡2次調査地に隣接しており、層位からは同様の結果が得られた。3・4層は平安時代後期以降の作土で、5層は奈良時代の遺構面の可能性がある。6層は古墳時代中～後期の遺物包含層と考えられる。



第53図 断面図(S=1/100)

参考文献

・成海佳子 1989「Ⅱ 矢作遺跡(第2次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度-矢作遺跡・花岡山遺跡- (財)八尾市文化財調査研究会報告22』(財)八尾市文化財調査研究会

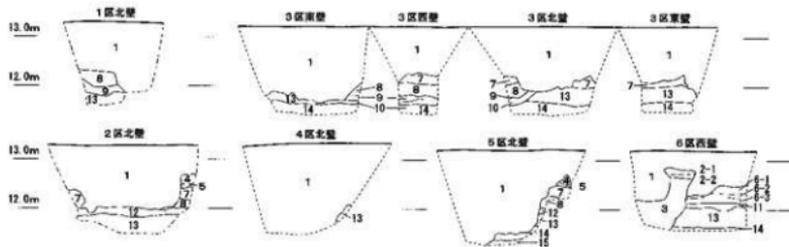
2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査

(1)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡1ヶ所、約2.0×2.5m、面積約5.0㎡1ヶ所、約2.0×3.0m、面積約6.0㎡4ヶ所の計6ヶ所(1区～6区)について、現地表(T.P.+13.3~13.4m)下1.8mまで調査した。使用した標高は、八尾市作成1/2500地図記載の標高値(調査地南側の道路上：T.P.+13.3m)である。

【地層】各調査区ともに、現地表下0.4~1.8mまで、既存建物の撤去に伴う攪乱である。各調査区で共通して見られる地層は、現地表下1.1~1.3m以下に、層厚0.3m前後で堆積する砂礫混シルト質粘土層(13層)で、以下はシルト質粘土(14層以下)が堆積する。13層より上位では、主に砂質シルト・砂質土(7層・8層)が堆積する。7層の上位には、洪水堆積層と推定される(4層・5層)の堆積が2区・5区で残っている。13層とその上位の砂質シルト・砂質土との間に、1区・3区では極粗粒砂~粗粒砂(9層)が部分的に堆積し、3区西部ではその下位にブロック土を主体とする地層(10層)が堆積しており、遺構埋土と見られる。6区では13層より上位の地層は、他の調査区とは異なっており、耕作土と推定される粗粒砂質シルト層(2層)との間に中粒砂~極細粒砂・砂質シルト(6層)が堆積する。6層を切る礫混じる極粗粒砂層(3層)は、東西に伸びる溝状遺構の埋土と推定される。

【検出遺構】3区の13層下部で土器群(土器群1)を検出した。土器群1は、須恵器の破片を主体とし、他に土師器の破片が少量・甕の破片1点・獣骨と見られる骨1点が出土した。須恵器は飛鳥時代中頃~奈良時代前半に比定できるもので、飛鳥時代後期のものを主体とする。13層が調査区全体に見られることから、土器群1の土器は土坑・溝などの遺構埋土に帰属するものではないと考えられる。また、土器の破片は接合できるものが少ないことから、廃棄等に伴い14層上面に集積されたものと考えられる。ちなみに、5区の13層下部からも獣骨と見られる骨1点が出土している。

【出土遺物】1区の9層下部から古墳時代初頭前半に比定できる二重口縁壺の口縁部が出土した。表面が磨耗しており、他所から流されてきたものと見られる。3区西部で13層を切る遺構埋土と見られる10層から土師器・須恵器・黒色土器が、10層を切る9層から須恵器を主体とする土器が多く出土し、他に土師器・瓦が出土している。9層は粗い砂層で、9層出土遺物は他所から流されてきたものと見られる。他に、2区の12層から土師器、5区の12層から須恵器、1区の13層から土師器、2区の13層から須恵器・土師器、3区・5区の14層から弥生土器の破片が少量出土している。土器群1出土の須恵器5点(1~5)、甕1点(8)、10層出土の須恵器2点(6・7)を図化した。1~3は、杯蓋。口縁端部よりは下方に伸びないかえりを持つもの(1)、宝珠形のつまみを持つもの(2)、扁平な、いわゆる擬宝珠つまみ

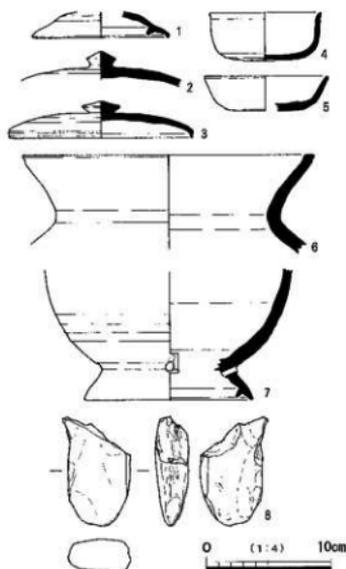


第54図 平・断面図(S=1/100)

を持ち、端部を内側に屈曲させたもの(3)がある。4・5は、杯(杯身)。いずれも小型で、平底で口縁部が直立気味に伸びるもの(4)と、外反気味に伸びるもの(5)がある。4は口縁端部が内傾し、外側に伸びる。内底面中央にナデを施す。内外両面に油煙あるいは墨痕と推測される黒い染みが残る。6は、直口甕。僅かに内湾する口頸部を持ち、口縁端部は内傾する。端面は内外へ僅かにふくれる。肩部には耳が付いていたような痕跡が残る。7は、壺。脚部は、かえりを持つ杯蓋を逆さにしたような裾端部を持ち、体部との境に外側から穿たれた円孔が1個残る。8は、移動式竈の脚部。部分的に二次的な焼成を受けた痕跡と煤の跡が残る。出土遺物が示す時期は、9層出土遺物が飛鳥時代中頃～平安時代、10層出土遺物・13層出土遺物が飛鳥時代中頃～奈良時代前半である。

(2)まとめ：今回の遺構確認調査では、飛鳥時代中頃～奈良時代前半の上器群を検出した。土器群を検出した同じ調査区からは、平安時代と推定される遺構埋土と見られる地層を壁面で確認した。

他の調査区では、遺構・遺物ともにほとんどなかったが、9層・10層・土器群1からの多くの土器の出土は、周辺に当該時期の集落等があった可能性を示唆するものである。



第55図 出土遺物実測図

# 图 版



1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査(周辺状況：南西から)



1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査(2区北壁：南西から)



1



3



5



6



8



9



10



11

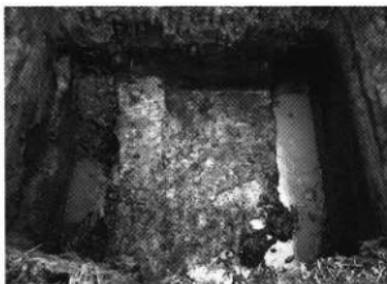


12

1-1 恩智遺跡(2006-444)の調査出土遺物



1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査(周辺状況：南東から)



1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査(2区：南から)



1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査(4区：北西から)



1-2 久宝寺遺跡(2006-520)の調査(5区東壁：西から)



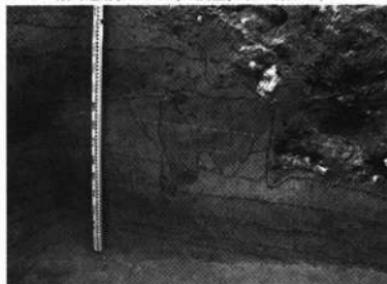
1-3 東郷遺跡(2006-289)の調査(周辺状況：南東から)



1-3 東郷遺跡(2006-289)の調査(2区：東から)



1-4 東郷遺跡(2006-462)の調査(周辺状況：東から)



1-4 東郷遺跡(2006-462)の調査(1区西壁：北東から)



1-5 中田遺跡(2006-372)の調査(3区:東から)



1-5 中田遺跡(2006-372)の調査(3区:西から)



1



5



6



11



12



13



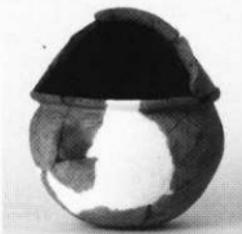
15



20



21



19

1-5 中田遺跡(2006-372)の調査出土遺物



1-6 西部廃寺(2006-190)の調査(1区調査風景：北から)



1-6 西部廃寺(2006-190)の調査(2区：東から)



1-6 西部廃寺(2006-190)の調査(2区：東から)



1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査(周辺状況：北東から)



1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査(1区西壁：東から)



1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査(1区西壁：東から)



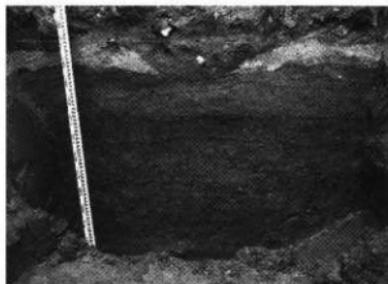
1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査(3区北壁：南から)



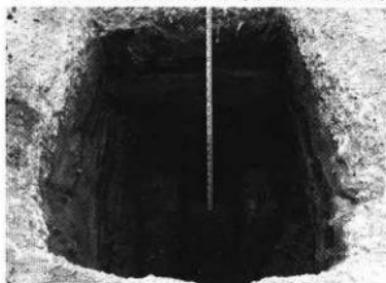
1-7 八尾寺内町(2006-437)の調査(4区北壁：南から)



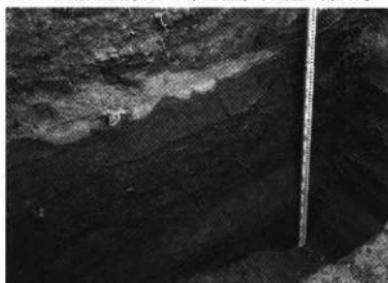
2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査(周辺状況：北西から)



2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査(1区北壁：南から)



2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査(1区北壁：南から)



2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査(3区北壁：南西から)



2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査(1区 S P 201：南から)



2-1 大竹西遺跡(2006-414)の調査(1区 S P 204：西から)



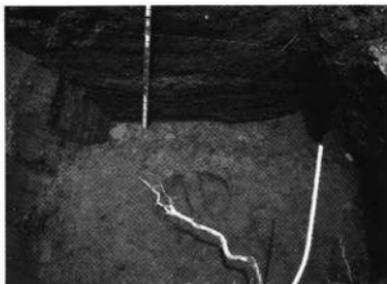
2-2 恩智遺跡(2007-1)の調査(周辺状況：北から)



2-2 恩智遺跡(2007-1)の調査(2区南壁：北東から)



2-3 壺振遺跡(2006-60)の調査(1区:東から)



2-3 壺振遺跡(2006-60)の調査(2区:東から)



2-4 木の本遺跡(2006-261・2007-102・2007-133)の調査(周辺状況:南西から)



2-4 木の本遺跡(2006-261・2007-102・2007-133)の調査(2区北壁:南から)



2-4 木の本遺跡(2006-261・2007-102・2007-133)の調査(6区南壁:北から)



2-4 木の本遺跡(2006-261・2007-102・2007-133)の調査(7区南壁:北東から)



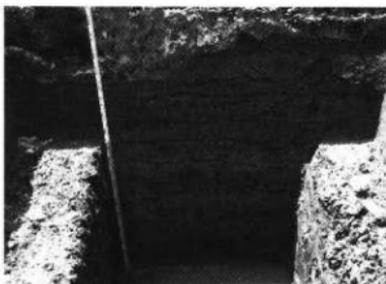
2-4 木の本遺跡(2006-261・2007-102・2007-133)の調査(12区南壁:北から)



2-4 木の本遺跡(2006-261・2007-102・2007-133)の調査(15区東壁:西から)



2-5 久宝寺遺跡(2007-181)の調査(周辺状況：南西から)



2-5 久宝寺遺跡(2007-181)の調査(1区西壁：東から)



2-5 久宝寺遺跡(2007-181)の調査(2区北壁：南から)



2-5 久宝寺遺跡(2007-181)の調査(3区北壁：南から)



2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査(周辺状況：南西から)



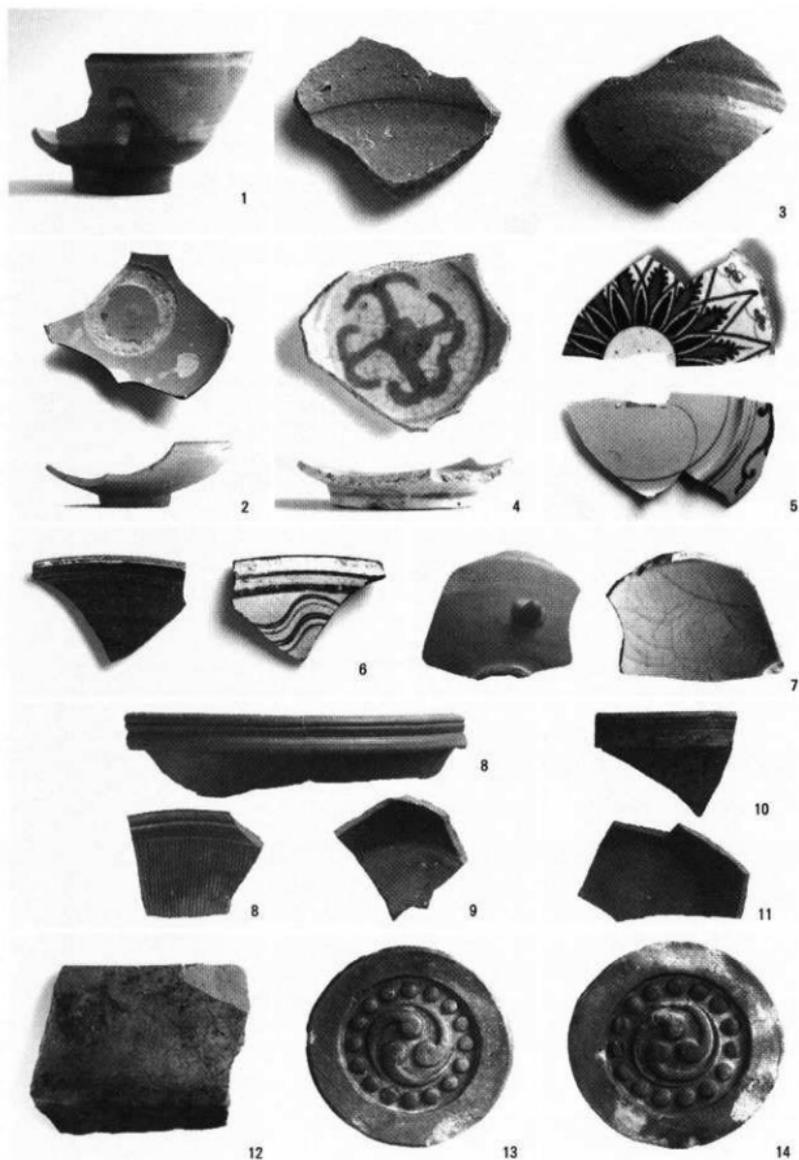
2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査(1区西壁：東から)



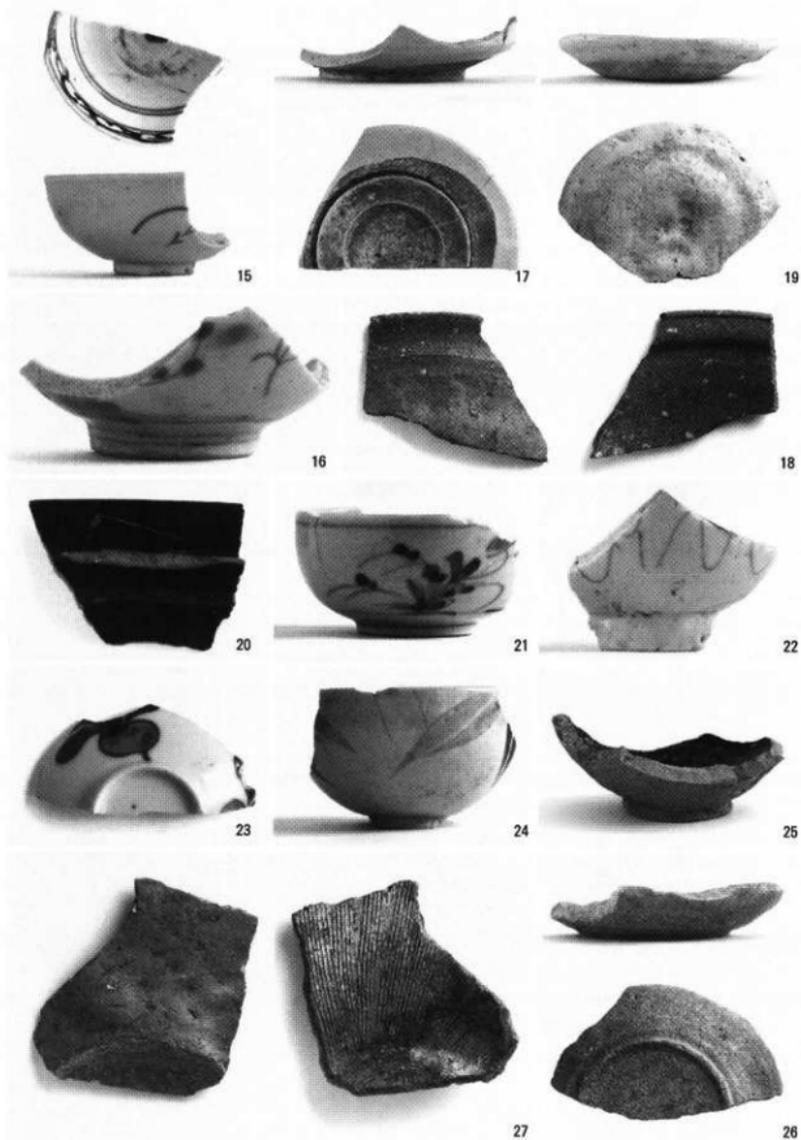
2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査(1区：南西から)



2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査(2区：南から)



2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査出土遺物 I S K101(1~3)、S K102(4~14)



2-6 久宝寺寺内町(2007-134)の調査出土遺物 II S K202(15~17), S K301(18), S D301(19),  
 背割り排水溝 I (20), 4層(21~26), 13層(27)



2-7 小阪合遺跡(2007-125)の調査(周辺状況：南西から)



2-7 小阪合遺跡(2007-125)の調査(2区調査風景：南から)



2-8 成法寺遺跡(2007-137)の調査(1区西壁：東から)



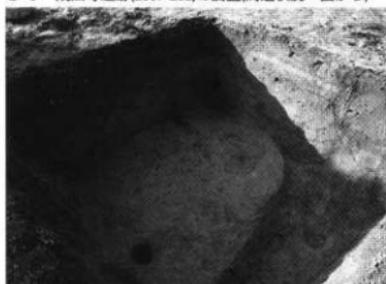
2-8 成法寺遺跡(2007-137)の調査(2区西壁：東から)



2-9 成法寺遺跡(2007-202)の調査(周辺状況：西から)



2-9 成法寺遺跡(2007-202)の調査(1区：南から)



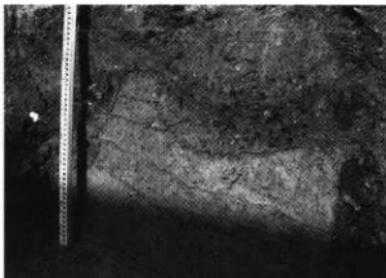
2-9 成法寺遺跡(2007-202)の調査(2区：南東から)



2-9 成法寺遺跡(2007-202)の調査(3区：南から)



2-10 成法寺遺跡(2007-268)の調査(周辺状況：南西から)



2-10 成法寺遺跡(2007-268)の調査(1区北壁：南東から)



2-10 成法寺遺跡(2007-268)の調査(2区SD1：南から)



2-10 成法寺遺跡(2007-268)の調査(2区北壁：南東から)



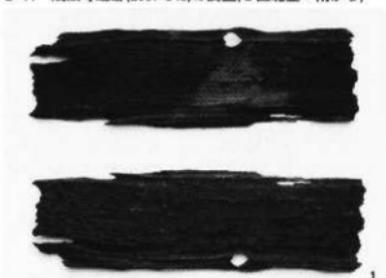
2-11 成法寺遺跡(2007-343)の調査(2区掘削状況：南西から)



2-11 成法寺遺跡(2007-343)の調査(2区北壁：南から)



2-11 成法寺遺跡(2007-343)の調査(2区南壁：北から)



2-11 成法寺遺跡(2007-343)の調査出土木製品



2-12 東郷遺跡(2007-49)の調査(周辺状況：北西から)



2-12 東郷遺跡(2007-49)の調査(1区北壁：南から)



2-12 東郷遺跡(2007-49)の調査(2区第1面：東から)



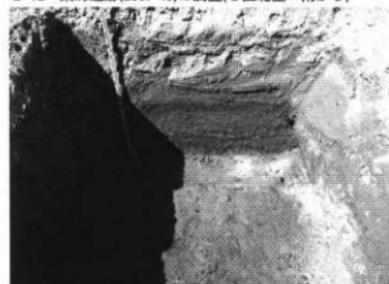
2-12 東郷遺跡(2007-49)の調査(2区第2面：東から)



2-12 東郷遺跡(2007-49)の調査(2区北壁：南から)



2-13 東郷遺跡(2007-209)の調査(周辺状況：南東から)



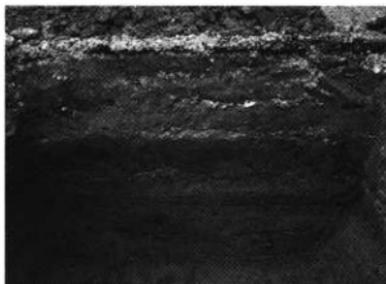
2-13 東郷遺跡(2007-209)の調査(1区：南から)



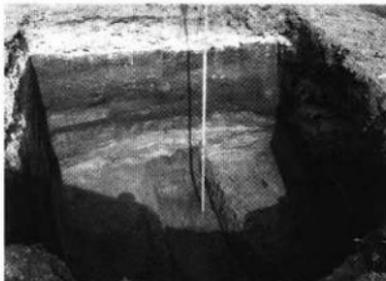
2-13 東郷遺跡(2007-209)の調査(3区S K301：南から)



2-14 西郡麩寺(2007-44)の調査(周辺状況：東から)



2-14 西郡麩寺(2007-44)の調査(2区北壁：南から)



2-15 西郡麩寺(2007-184)の調査(1区北壁：南西から)



2-15 西郡麩寺(2007-184)の調査(2区北壁：南から)



2-16 西郡麩寺(2007-334)の調査(周辺状況：北西から)



2-16 西郡麩寺(2007-334)の調査(2区S D 1：南東から)



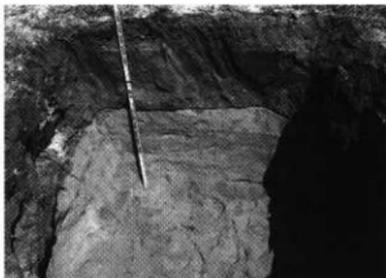
2-16 西郡麩寺(2007-334)の調査出土遺物



2-17 美園遺跡(2007-38)の調査(3区：南から)



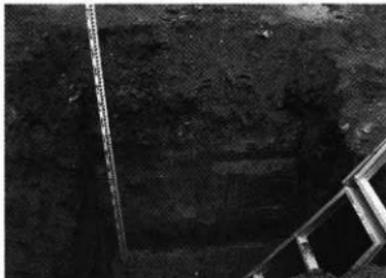
2-18 八尾寺内町遺跡隣接地(2006-522)の調査(1区：南から)



2-18 八尾寺内町遺跡隣接地(2006-522)の調査(2区：南から)



2-19 矢作遺跡(2007-119)の調査(周辺状況：南西から)



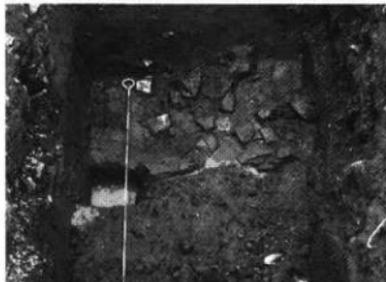
2-19 矢作遺跡(2007-119)の調査(北壁：南から)



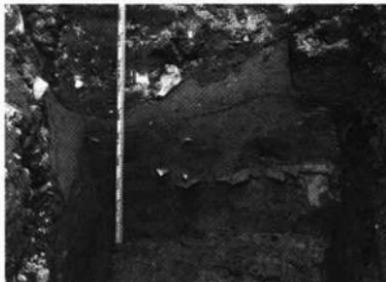
2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査(周辺状況：南西から)



2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査(1区北壁：南から)



2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査(3区遺物出土状況：西から)



2-20 弓削遺跡(2007-54)の調査(3区東壁：西から)

### **3. 平成18年度保存処理事業報告**

### 3. 平成18年度保存処理事業報告

#### 1 保存処理事業の概要

八尾市教育委員会では、平成18年度から、国庫補助事業である埋蔵文化財緊急調査費等事業の一環として、民間開発事業等に伴う発掘調査で出土した木製品や金属製品などの脆弱遺物について、順次保存処理を実施し、今後の埋蔵文化財の保存活用に資することにした。

平成18年度の保存処理事業は、(財)八尾市文化財調査研究会が平成17年に八尾市光町二丁目で行った東郷遺跡第64次調査で出土した古墳時代前期の多数の木製品のうち、市内の遺跡でも稀有な木製品の出土例であった「木製盾」、「脚付盤」、「刺物桶」の保存処理を実施することにした。保存処理事業は、平成18年4月24日付で大阪府教育委員会より八尾市に出土文化財の譲与を受けた後、平成18年5月から平成19年3月まで(財)元興寺文化財研究所へ委託した。保存処理実施期間中には、適宜保存処理の方法や木製品の欠損部や形状の不明な部分の復元方法について、(財)元興寺文化財研究所と八尾市教育委員会及び発掘調査を担当した(財)八尾市文化財調査研究会と検討を行いながら実施した。

木製盾については、側刃部の破片であったが、漆塗りで盾面の両面に列をなす綴孔が良好に残る資料であった。一部接合したものの、全体形状は明らかにできなかった。そのため、破片の位置関係を復元配置し、両面から盾面を展示、観察することができ、またそのままの状態でも保管できるよう、透明な2枚のアクリル板を重ね合わせて、その間に盾の破片形状をかたどったシリコンを挟み込んで固定した展示台を別途作製している。

本報告は、上記の事業成果を収録したもので、木製品が出土した遺構と各木製品の概要及び復元案についての「2 東郷遺跡第64次調査の出土木製品について」は、(財)八尾市文化財調査研究会の担当者(坪田真一・菊井佳弥・河村恵理)が執筆を行い、木製品の保存処理経過と方法及び保存処理方法を検討するために行った木製品の樹種同定及び木製盾の漆膜の構造分析の結果についての「3 東郷遺跡第64次調査の出土木製品の保存処理」は、(財)元興寺文化財研究所の担当者(藤田浩明・木沢直子・井上美知子)が執筆を行い、執筆分担は、各章末に記載している。

今後、保存処理を終えた木製品については、八尾市内の文化財施設等において、展示・公開等の活用を積極的にはかることにしている。(藤井淳弘)

#### 2 東郷遺跡第64次調査の出土木製品について

##### 1) 調査概要

東郷遺跡は大阪府八尾市の中央やや北西部に位置し、現在の行政区画では本町1・7、北本町2、東本町、光町、桜ヶ丘、荘内町がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。同地形上で北は萱振遺跡、南は成法寺遺跡、西は宮町遺跡・八尾寺内町、南東は小阪合遺跡と接している他、当遺跡範囲内の東部は東郷庵寺推定地となっている。遺跡範囲の現地表面の標高は、北部がT.P.+7.0m、南西部がT.P.+9.0mを測る。

当遺跡発見の契機は、昭和46年、八尾市東本町2丁目での水道管理設工事の際、墨書人面土器が出土したことによる。そして昭和56年度以降、大阪府教

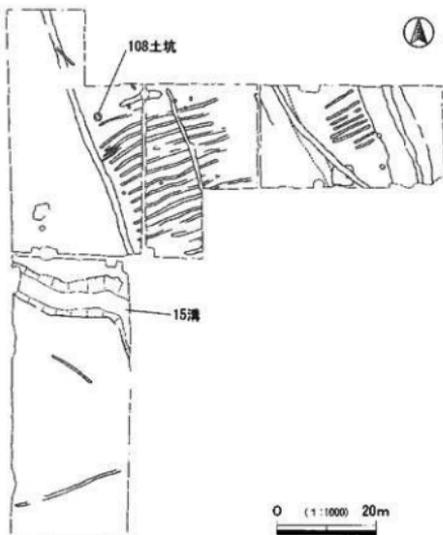


第1図 調査地位位置図

育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多くの発掘調査が実施されており、これらの成果から、当遺跡は弥生時代中期～近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。特に、今回の調査地を含む近鉄大阪線八尾駅北側の開発に伴う調査、及びその東方の桜ヶ丘一帯における調査件数は多く、この範囲では遺跡の様相がかなり解明されつつあるといえよう。これらの成果によると、弥生時代の遺構の分布は散発的なものである。後期には遺跡東部で自然流路からではあるが、古備地方からもたらされたと考えられる向木見型特殊器台が出土しており注目される。古墳時代初頭(内内式期)には主に西部で密に遺構が認められるようになり、方形周溝墓から成る墓域や堅穴住居群から成る居住域が確認されている。続く古墳時代前期(布留式期)にはこれらの集落域は東部に広がってゆく。そして古墳時代中期・後期には集落域はほぼ完全に再び東部に移っているようであるが、西部では平安時代末の井戸から耳環が出土しており、周辺に後期古墳が存在する可能性が指摘されている。飛鳥～奈良時代では、東部でまとまって瓦が出土したことにより「東郷庵寺」の存在が推定され、その西部ではこの時期の集落域も確認されている。

今回の第64次調査では、古墳時代初頭から近世の遺構・遺物を検出した。

古墳時代初頭～前期では、1区で井戸・土坑・溝・畝間溝といった主に生産関連の遺構が検出された。西部中央で検出した東西方向に伸びる15溝から出土した木製品は特筆され、武器(盾・鞘)、刺物容器(脚付盤)、農具(竖杵・他)、紡織具(糸巻き)、編み具(木錘)等がある。また北西部で検出した108土坑からも多量の土器と共に刺物桶が出土している。15溝は東端で南に屈曲しており、連続すると考えられる2区1溝からも農具(杵・横槌・多又鋤)が出土している。両溝からは土器(壺・甕・高杯・鉢)も多く出土しており、完形あるいはそれに近いものも多く含まれている。これら共伴する土器から両溝の時期は前期後半(布留式期後半)に比定される。なお両溝に先行する2区678溝からも、武器(弓)、農具(臼)、容器(桶)等の木製品が出土している。



第2図 1区平面図

2・3区は墓域となっており、墳墓・古墳・土器棺墓・埴輪棺墓が検出された。3区90古墳は一辺約22mを測る方墳で、北約1.2kmに位置する寛弘1号墳に匹敵する規模を有する。周溝出土埴輪の時期から4世紀中頃に位置付けられ、中河内最古級の古墳といえよう。2区8古墳は周溝から管玉・小玉がまとまって出土しており、周溝内に供献された遺物の可能性があり注目される。また埴輪棺墓2基については、8古墳墳丘内に構築されており、その関連について検討を要するものである。

飛鳥～平安時代では2・3区で掘立柱建物群を検出した。ピット数は600個以上を数え、建物は現在数棟を確認しているにすぎないが、今後の検討によりさらに増加するものと考えられる。他に2区南部で検出した井戸2基がある。156井戸からはコップ形木製品が出土している。

中世～近・現代では調査地全域で耕作関連の遺構が検出された。畦畔・井戸・耕作溝・土坑等があり、畦畔や耕作溝は条里地割に規制された方位に沿うものである。

(坪田真一)

## 2) 木製盾(第3図)

木製盾と脚付盤は、1区の15溝から出土した。15溝は幅7.0m、深さ1.3mを測り、南東から北西への流れが、西へ方向を変える部分を検出した。溝の南西側に広がる微高地の縁辺に位置し、その微高地上では、集落が営まれ、墓が造られた。北東側の低地では、水田や畠などの生産域が広がっていた。本遺構は、生産域に給水するための水路であるとともに、集落や墓域と生産域の区画溝であると考えられる遺構である。

15溝の埋土は、流れが停滞しシルトが堆積した上層と、流れの強弱によりシルト～極細粒砂と中粒砂～小礫が互層状に堆積する下層との大きく2層に分けられる。盾と盤が出土した15溝下層は、調査期間等の制約から重機による荒掘りを行い、その後人力により完掘した。盾は、重機の荒掘り中に出土したため、出土時の破片は埋まっていた時より細片になり、破片の一部も損失させてしまった。共存遺物には、鞘、壱杵、糸巻き、曲柄鋸、一本鋸等の木製品、完全な形で出土した小型丸底壺、高杯、甕等の土器がある。15溝の下層堆積は、強い流れを示すものではないので、これらの遺物は出土地付近から投棄されたものと考えられる。

本資料は、トチノキ材を用いた黒漆塗りの木製盾である。共存遺物から古墳時代前期後半(半留式期)の所産である。残存長約50cm、残存幅約10cmを測る破片であったものが、取り上げ時にさらに10cm大の4破片(第3図1～4)と5cm以下の小破片(5～8)に細分され、破片の一部を損失したため、1～8は接合しない。その他図化できなかった小さな破片が数点ある。側辺部の破片資料であるが、全体像を復元するのは困難である。しかし、残存状態が良好で、盾細部の状況を詳細に観察できる。楯の表面には列をなす小孔を多数確認することができるので、宇本隆裕氏が分類した楯B類(宇本1986)、橋本達也氏のいう紐列式木盾(橋本1999・2001)にあたる。木取りは板目で、年輪に沿うように削りだされ、横方向に湾曲をもつ。厚さは0.35～0.4cmを測る。側辺部近くは0.7～0.9cmと他より厚く、裏側の角は面取りされている。古墳時代の他例と比べても薄い部類に入り、強度より軽さを追求した結果かもしれない。盾表面には、幅約0.3cm、長さ3.5～5.0cmのカナ痕が明瞭に残る。縦方向を主とするが、1と3の上部及び5の破片で部分的に横方向のものも観察できる。孔列を水平に置いた時、他の側面が直交するのに対し、1はやや弧を描き約10度内傾する。このことから、弥生時代に多く見られる隅丸方形か、古墳時代前期に新たに出現する上端部が山なりに弧を描く形状(後藤守一氏分類三峯鼻式)に復元できるが、どちらも決め難い。

弥生時代から古墳時代の多くの木製盾は、刺し縫い、緊縛し、縦割れと装飾性も兼ね備えた紐列を有するが、本資料も径約0.1cmの孔が0.65～0.95cm間隔で横方向に列を成すように穿たれる。これらの孔を2本の糸を使い、表裏から刺し縫い縦縫っていく。各孔列の間隔は1.2～1.6cmで、1.4cm前後



写真1 15溝(南東から)



写真2 木製盾出土状況

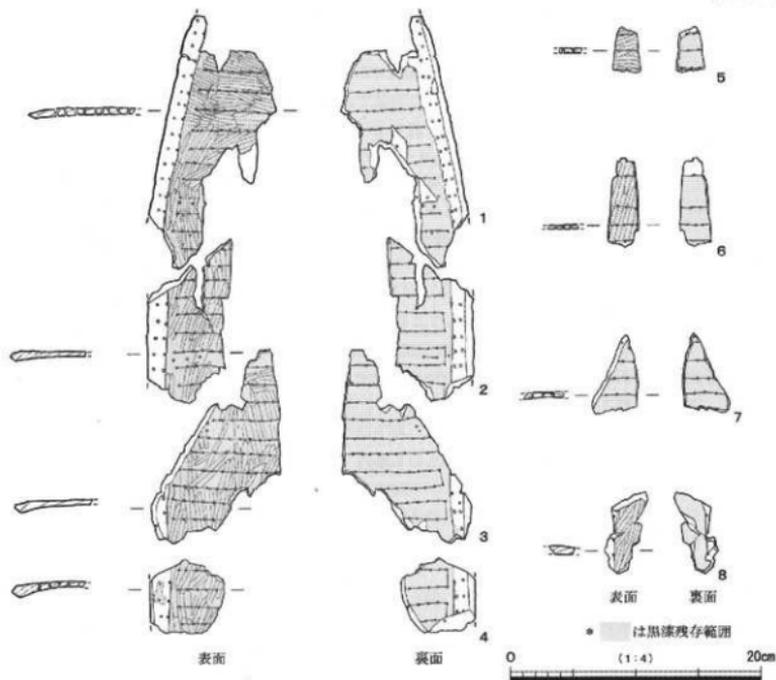


写真3 復元後の木製盾

のものが中心である。また表側では、穿孔時の基準となる野引き線が確認できた。糸で緊縛された後、両面全体に黒漆が塗布されている。そのため、漆膜に保護された糸が、表側では部分的に、裏側では全体的に良好な状態で残る。横方向の孔列のほかに、側辺から0.5~0.8cmと1.1~1.5cm内側に孔列が、外形線に沿うように2列周る。これら外周に穿たれた孔は、横方向の孔列の孔径よりやや大きい。側辺端部から外周する孔列までの間、表面で幅1.3~1.5cm、裏面で幅約1.7cmの幅で、黒漆が塗布されていない。この部分には補強材として何か別部材が固定されていたものとする。列に属さない孔も存在する。1には、列間に横に2個一對となるものと孔列の2.0mm下に穿たれた1孔あり、2には、孔列間に横に3個並ぶもの、3には、孔列間に縦に2個一對と並ぶものがある。他の紐列式木盾でも、列をなさない孔をもつ例があり、穿たれた位置が規則性のないものも存在するが、列をなさない孔と孔が左右対称に穿つもの、上下に並ぶものも多い。それらは、持ち手や月日貝のような装飾具が取り付けられていた孔であるとする。

弥生時代~庄内中期の木製盾は、形状が隅丸方形で、白木か朱を塗布したものが多く、文様も顔料を用いて描かれる。古墳時代前期になると朱塗りに変わり、黒漆塗りものが多くなる。上端が山なりに弧を描く形状の盾(後藤守一氏分類三峯鼻式)や刺し縫いによる矩形線対称文をもつ方形盾が新たに出現する。中期になると木製盾に加え、革盾も出現し、刺し縫いによる文様も鋸歯文、縹紗文、弧文、菱形文と多様になる。本資料が帰属する古墳時代前期は、盾の形状、材質、文様が変化する時期であり、盾の系譜や変遷を考える上で重要な資料となる。また、本遺跡からは盾のほか鞘も出土しており、集落における武器・武具の保有やそれを用いた祭祀実態解明する上でも良好な事例となると考える。

(菊井佳弥)



第3図 木製盾実測図

### 3) 脚付盤(第4図)

本資料は、長径22cm前後の楕円形の平面形状を呈する。側面は、底面から45度斜め上方に開く。口縁部端部に幅1.4cmの面をもち、器壁は口縁部に向かって肥厚する。なお、器壁の厚さは0.8~1.0cmを呈する。底面の残存する2ヶ所のコーナー部には、それぞれ脚部が確認できた。脚部の平面形態は、外側に一辺を向ける形で、三角形を呈する。法量は一辺3cm前後、高さ1.3cm前後の逆三角柱を呈する。

本資料の材質はケヤキ(広葉樹)。木取り方法は、横木取りで、樹心を外す心去材を用いたと考えられる。ケヤキは、一木造りに適した材質で、加工しやすく精製品や小型容器に使用される比率が高い(茶谷満2005)。以下、調整について観察したい。

盤の底部内面に、底面の形状に沿うように幅広い工具(2.5cm)による加工痕が見られる。側壁内面にも横方向に幅広い工具による加工痕が見られる。側壁-底部間の屈曲部分などの細部については、幅狭い工具(0.5cm)による成形が目立つ。底部外面も幅広い工具による加工痕後、脚部の周辺に幅狭い工具による成形が目立つ。側壁外面は縦方向に幅広い工具による加工痕後、側壁-底部間の屈曲部分を中心に、幅狭い工具による加工痕が横方向に見られる。口縁部端面にも、一定方向に幅狭い工具の加工痕が見られる。脚部には各面幅広い工具による加工痕が見られる。以上のことから、本資料が丁寧な作りの精製品であったことが窺える。

本資料の時期は、共存遺物から古墳時代前期(布留Ⅲ期)の所産であると言える。

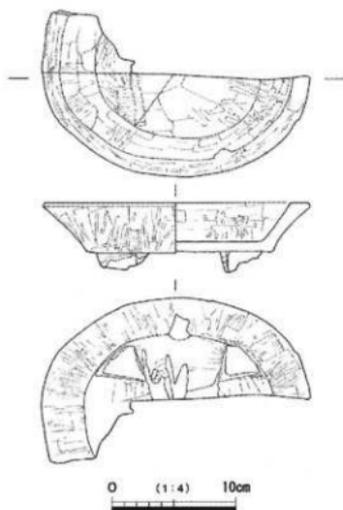
この時期における小型の脚付盤の出土例は少なく、類例としては、滋賀県の服部遺跡(山田昌久2003)、島根県の姫原西遺跡(島根県教育委員会1999a)が挙げられる。これらの遺跡から出土した脚付盤の脚部形態は、円形・方形・多角形の柱状を呈し、本資料のように逆三角柱を呈するものは確認できず、興味深い資料と言える。

本資料は、全体の約1/3~1/2が残存する資料である。接合作業は、取り上げ時に7つの破片に細分された箇所を復元した。なお、7つに細分された破片のうち、1つは乾燥による収縮・変形が著しかった為、保存処理後の当部分の復元はできなかった。当部分以外の復元は問題なく行われた。

残存する2つの脚部は、脚部の先端部分が僅かに残る程度であり、鋭利な先端部分であったものと推測で



写真4 脚付盤出土状況(北西から)



第4図 脚付盤実測図



写真5 復元後の脚付盤

きる。なお、残存する2箇所のコーナー部に脚部がそれぞれ見られることから、各コーナー部に沿って1脚ずつ、計4脚が形成されていたものと推測できる。

復元は、最低限度の補強作業で本資料の逆三角形を呈する脚部形態がより正確に残すことができると思われたので、現在残存する部分から最低限度復元できる範囲で考えた。

#### 4) 刺物桶(第5図)

本資料は、108土坑から出土した。平面形は円形を呈し、径2.19m、深さ0.96mを測る。当遺構は素掘りの井戸である可能性も考えられるが、確かなことは分らなかった。埋土は、中粒砂混じり細粒砂から構成される上層と、粘質シルトがブロックで混ざる中層と、粘質シルトの下層の大きく分けて3層に分かれる。このうち、本資料は下層から出土し、共伴遺物は主に中層から出土した。

出土状況は、土坑の掘形に沿って直立した状態であった。底部及び、胴部の約3分の2が欠けた状態で見つかった。なお、接合した破片の一部は、周辺より出土したものである。共伴する遺物は、ほぼ完形となる布留式甕や吉備系甕で、破損した状態で重なり合って出土した。これらの出土状況より共伴遺物は、一括投棄されたものと考えられる。本資料も同様に、破損した状態で下層部より出土したことから、共伴する遺物を投棄する以前に、本資料が投棄された可能性が高い。

本資料は、径約10cm、器壁の厚さ0.2cm、器高14.5cmを測る筒状にくりぬいた形の胴部をもつ。胴部内面の上端部と下端部にそれぞれ、幅1cm前後、厚さ1.4cm前後の突出する段を有する。段の形状は、角がなく丸みを帯びている。

本資料の材質はイヌガヤ(針葉樹)。木取り方法は、縦木取りで、樹心を外す心去材を用いた、典型的な刺物桶の製作方法である。刺物桶によく使用される針葉樹は、内側を削り抜く製作方法では、繊維方向に亀裂が生じ、底部まで一本で作ることは不可能である(茶谷満2005)。以下、調整について観察したい。

胴部内面には、横方向の幅広い工具(0.7cm)による加工痕後、縦方向の幅広い工具(1.2cm)による加工痕が見られる。部分的に幅狭い工具(0.4cm)による加工痕が見られる。胴部外面には、幅広い工具(0.7cm)による加工痕が見られる。全体に刻痕が目立つ。突出部分の調整も、横方向の幅広い工具(0.7cm)による加工痕が数条見られる。また突出部分端面には黒色塗彩と思われる痕跡が確認できた。以上のことから、本資料が丁寧な作りの精製品であったことが窺える。

本資料の時期は、共伴遺物から古墳時代前期(布留Ⅱ～Ⅲ)の所産であると言える。

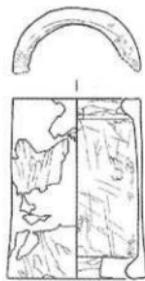
この時期に比定できる刺物桶は、北陸・山陰地方を中心に出土しており、近畿地方での出土例は少ない。本資料と、規格や突出する部分の形態が類似するものとしては、福岡県の金山遺跡(佐藤浩司1999)、鳥取県の青谷上



写真6 刺物桶出土状況(南から)



写真7 復元後の刺物桶



0 (1:4) 10cm

第5図 刺物桶実測図

寺地遺跡(湯村 功2002)、島根県の姫原西遺跡(鳥取県教育委員会1999 a)・西川津遺跡(島根県教育委員会1999 b)、滋賀県の石田遺跡(石川ゆずは2005)が挙げられる。中でも、本資料のように、内面に有する段が、上部と底部の2か所にみられるものは少なく、類例としては、青谷上寺地遺跡と石田遺跡のみであった。なお、本資料にみられるような上下の段がほぼ同じ大きさの形態は、他に確認できず、貴重な資料といえる。また本資料の出土により、当遺跡が、朝抜桶が多数出土した北陸・山陰地方との交流関係にあったことが推察できる。

本資料は、全体の約1/3が残存する資料である。復元作業にあたっては、最低限度の補強作業で本資料の特徴がより正確に残すことができると思われたので、現在残存する部分から最低限度復元できる範囲で考えた。取り上げ時に破損した箇所を復元するとともに、周辺より出土した破片(3点)を、木目に合わせて接合した。

本資料は、刳物桶によく使用される針葉樹の材質であることや、胴部内面に突出する段をもつことから桶であることは明確である。しかし、各部について、類例で挙げた桶と比較した結果、以下の問題点が浮き彫りとなった。

本資料は、底板をはめ込むためと考えられる突出部が上下2箇所に確認でき、本資料本来の天地を判断し難いことである(註1)。この問題点については、突出する段部分の調整や残存状態で、以下のように推測することとする。aの突出部分は、加工時に使用した工具の痕跡が残り、段部分が平行でなかった。逆にbの突出部分は、加工痕が丁寧に成形され、段部分が平行に仕上がっている。また段部分と反対面には摩擦の痕跡が見られた。これらの特徴から、底板をはめるのに適したbを下部、aを上部として考えた。

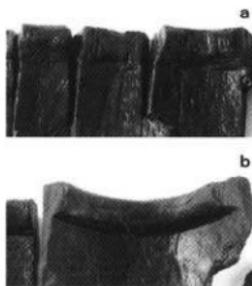


写真8 刳物桶端部

以上のように、上下2箇所に同サイズの突出部が確認できたことから、底板の形態が円形である可能性は低い。おそらく、円形を数分割した板状のものをを用いたと推測できる。また、数分割した底板は、本資料の突出部周辺に、くさびや目釘などの痕跡がないため、はめ込み式であったと考えられる。

(河村恵理)

#### 註

註1 刳物桶については、当初、突出部のa部分の残存状態が悪かった為、底部であると判断し、写真撮影を行った。その後、前述したようにbを下部、aを上部と推察したことから、本文内容及び実測図と、写真7の天地が異なる。

#### 参考文献

- 石川ゆずは 2005 「弥生時代中期～古墳時代前期にかけての木製容器—小型容器の刳物桶を中心に—」『富山考古学研究—紀要第8号—』(財)富山県文化振興財団
- 宇本隆裕 1986 「甲と椀」『弥生文化の研究』第9巻 雄山閣出版株式会社
- 上原真人 1993 『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所
- 佐藤浩司 1999 『金山遺跡1・V区』北九州市埋蔵文化財調査報告書第223集(財)北九州市教育文化事業団
- 島根県教育委員会 1999 a 「姫原西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1」
- 島根県教育委員会 1999 b 「朝酌川河川改良工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書IV(海崎地区2)」
- 茶谷 満 2005 「青谷上寺地遺跡出土の木製容器」『木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター
- 中川正人 1998 「盾の造形技法と系譜」『赤野井湾遺跡 琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書2』財団法人滋賀県文化財保護協会
- 橋本達也 1999 「盾の系譜」『国家形成期の考古学-大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室
- 橋本達也 2001 「弥生・古墳時代における盾の系譜」『季刊考古学 第76号』雄山閣出版株式会社
- 山田昌久 2003 「第8巻弥生・古墳時代 木・繊維製品」『考古資料大観』小学館
- 湯村 功 2002 『青谷上寺地遺跡4』(財)鳥取県教育文化財団

### 3 東郷遺跡第64次調査の出土木製品の保存処理

#### 1) 東郷遺跡出土木製品の保存処理

##### 1. 保存処理前の状態

###### Na.1 木製盾

遺物は大きく4破片に分割しており、大きな破片は約18cm、小さな破片は約6cmであった。またその他に小さな破片も多数あり、保存処理前の時点においてこれらの接合関係は不明であった。盾表面には漆状の塗膜が見られた。

###### Na.2 脚付盤

遺物は7分割からなり、長さが約18cm、幅約12cmになると考えられる。容器全体の形状から推測して、約半分が遺存すると考えられた。脚部は2箇所残存し、表面の状態は良好であった。

###### Na.3 刺物桶

遺物は大きく15破片に細片化しており、長さ約15cm、幅約8cmになると考えられた。また別個体の破片と考えられる部材も一部混在していた。破片の形状から最終的には桶状に復元できることが予測されたが、処理前の時点では形状の復元は困難であった。

##### 2. 保存処理

###### 2-1 木製盾の保存処理 (写真11-1)

保存処理を行なう前の調査として、写真撮影、樹種同定および塗膜の分析等を行ない、処理前の遺物状態を記録した(写真9-1)。その後、クリーニングを行ない、表面の泥や土などを除去した(写真9-2)。盾表面の塗膜の残存状態は良好であり、これを最大限残す処理方法を検討した結果、糖アルコール法にて保存処理を行なうことにした。ラクチール20%水溶液(液温:室温)から含浸処理を開始し、約3週間で濃度を20%ずつ上昇させ、最終的にはラクチールとトレハロース(8.5:1.5)の混合物の81%水溶液(液温:58℃)で含浸処理を終了し、表面の余分な溶液を温水で洗い流した後、遺物全体にラクチール微粉末をまぶした。その後50℃に設定した乾燥庫の中で約3週間、遺物を観察しながら乾燥処理を行なった(写真9-3)。

乾燥処理終了後、温水で遺物表面のラクチール微粉末を取り除き、形状を観察しながら常温で乾燥させた。十分に乾燥した時点で、発掘担当者と遺物の接合について協議を行ない、大きく4分割に接合することにした。接合にはシアノアクリレート系接着剤を使用し、接合部に強度を持たせるためエポキシ樹脂で接合部を補填した。補填した部分はグラインダーで整形し、本体部分との違和感のない彩色を行なった。



写真9-1



写真9-2



写真9-3

###### 2-2 脚付盤・刺物桶の保存処理 (写真11-2・11-3)

これらの遺物についても木製盾と同様、保存処理前の調査とクリーニングを行なった。処理方法とし

ては処理前調査の結果を踏まえた上でポリエチレングリコール（以下PEG）含浸法を採用することとした。PEG20%水溶液(液温：室温)から含浸処理を開始し（写真10-1）、約3週間で濃度を20%ずつ100%まで上昇させ（液温：50～60℃）、含浸処理を終了した。その後、遺物表面に残った余分なPEGをアルコール59%水溶液に浸して除去し、木製品本来の質感に戻るまで表面処理を行なった。この2点についても発掘担当者と遺物の接合や復元について協議を行ない、復元方針を決定した。接合にはシアノアクリレート系接着剤を使用し、接合部に強度を持たせるためエポキシ樹脂で接合部を補填した。補填した部分はグラインダーで整形し、周囲と違和感のない彩色を行なった（写真10-2・10-3）。



写真10-1



写真10-2



写真10-3

### 3. おわりに

今回、このような貴重な資料の保存処理を通して、様々な処理に関する経験を積むことができた。特に糖アルコール法による処理は、当研究所においてはまだ歴史も浅く、今回得られた知見やデータは今後の処理に大いに生かせるものであろう。また、含浸処理後の復元等について、発掘担当者と保存処理担当者が綿密に協議を行なって処理を実施できたことは、今後の「遺物の活用を含めた保存処理」という点で、有意義なものになった。

(藤田浩明)



八尾市 06018(後) 1

写真11-1 No. 1 木製盾(左: 処理前 右: 処理後)



八尾市 06018(後) 3

写真11-2 No. 2 脚付盤(左: 処理前 右: 処理後)



八尾市 06018(後) 2

写真11-3 No. 3 刳物桶(左: 処理前 右: 処理後)

## 2) 東郷遺跡出土木製品の樹種同定

### 1. 試料

No.1	木製盾
No.2	脚付盤
No.3	刳物桶

### 2. 同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

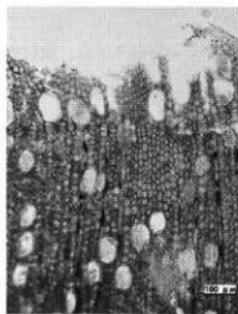
### 3. 同定結果

各試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（I）、（II）に従った。

※ 樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

No.1 木製盾：トチノキ *Aesculus turbinata* Blume

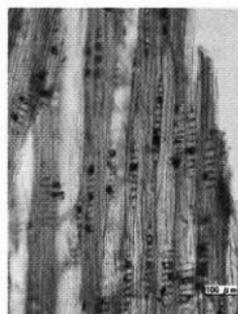
とちのき科 (Hippocastanaceae)



木口面



柾目面



板目面

写真12 No.1 木材組織顕微鏡写真

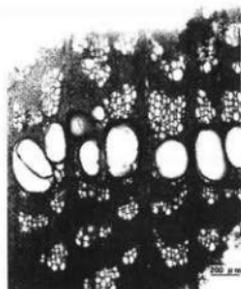
広葉樹散孔材。直径60～70 $\mu$ mの管孔が年輪内に均等に散在する。管孔は単独もしくは2～3個複合しており、道管壁が厚い。道管の穿孔は単穿孔。放射組織の列幅は単列で板目面において層階状に配列し、柾目面において平伏細胞のみからなる同性である。

分布：温帯：北海道、本州、四国、九州

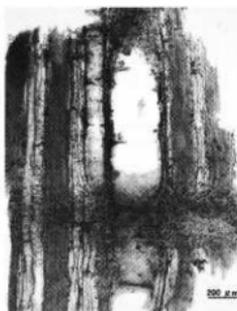
樹形：落葉高木で樹高25m、胸高直径2mに達する

用途：家具、指物、建築、器具、漆器木地、経木 等

出土事例：挽物（漆器、皿）、刳物（槽、盤）、農具（臼） 等



木口面



杵目面



板目面

写真13 No. 2 木材組織顕微鏡写真

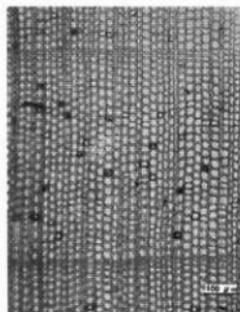
広葉樹環孔材。直径約180 $\mu$ mの管孔が年輪界に沿って並び、孔圏外では急速に径が減少する。孔圏外の小道管は多数集合し、接線状あるいは斜線状に集団管孔を形成する。道管の穿孔は単穿孔。放射組織は1~7列で平伏細胞、方形細胞よりなる異性である。放射組織上下縁辺の方形細胞中に結晶が見られる。

分布：温帯、暖帯下部：本州、四国、九州

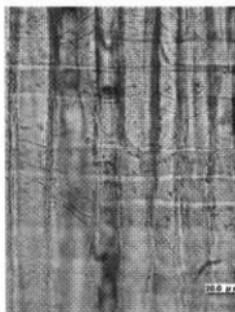
樹形：落葉高木。通常樹高20~25m、胸高直径60~70cmであるが、大きいものは樹高50m、胸高直径3mに達する

用途：器具、家具、船舶、土木、彫刻、轆轤細工、薪炭 等

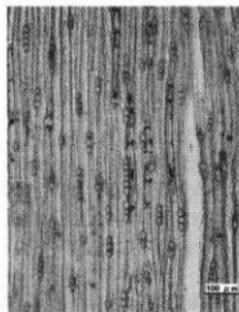
出土事例：建築材（柱）、農具（横槌）、履物（下駄）、挽物（漆器）、刳物（槽、盤） 等



木口面



杵目面



板目面

写真14 No. 3 木材組織顕微鏡写真

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は非常に緩やかで晩材部の幅は狭く、年輪界は不明瞭である。樹脂細胞は年輪内に均等に分布する。放射組織は1~7細胞高。分野壁孔は不明瞭であるが、かろうじてトウヒ型を確認することができる。仮道管に顕著な螺旋肥厚が確認される。

分布：暖帯、温帯下部：本州（岩手県以南）、四国、九州

樹形：常緑の小木。大きいものは樹高8~10m、胸高直径30cmに達する

用途：建築材、器具、薪炭 等

出土事例：武器（弓）、建築材、土木材（杭）、農具（木錘、横槓）、食事具（匙） 等

#### 4. 考察

今回同定を行なった資料について、以下に器種と樹種との関係という視点から考察を行なう。

##### 木製盾

上記の通り、盾に用いられたトチノキの植生分布は北海道南部を北限とし、本州、四国、九州におよぶ。特に東北地方に多く九州では稀とされ、低山地帯の谷筋の肥沃な場所に多いとされる<sup>1)</sup>。近畿地方での出土は刳物、挽物としての事例が比較的多く、古代以降に見られる傾向にある。東郷遺跡周辺では弥生から古墳時代におけるトチノキの利用事例は少なく、大阪府瓜生堂遺跡で雉木類（弥生時代後期~圧内式期）に報告がある<sup>2)</sup>。トチノキを用いた武器、武具類には滋賀県赤野井湾遺跡より出土した短甲（弥生中期~後期）<sup>3)</sup>や岩手県徳丹城遺跡<sup>4)</sup>より出土した冑が知られるが、盾の用材としては管見において例がない。

これまでの出土事例によって、盾にはモミ属が用いられる傾向が強いことはすでに知られている。盾の用材傾向と製作技法について整理を行なった中川正人氏は、盾にモミ属の材を用いることに「厳格な流儀の継承があった」と指摘する<sup>5)</sup>。モミ属を用いた盾の出土事例は関東、東海、近畿、中国、九州地方に見られ、地域性を越えて強い選択傾向があり、当遺跡周辺でも弥生時代に恩智遺跡、鬼虎川遺跡、瓜生堂遺跡などにモミ属を用いた例が見られる。モミ属以外の樹種としては針葉樹材としてスギとヒノキが散見されるが数は少ない。

一方、広葉樹材を用いた出土事例はさらに限られており、クスノキ（滋賀県斗西遺跡）<sup>6)</sup>、ケヤキ（大阪府東奈良遺跡）<sup>7)</sup>、オニグルミ（奈良県保津・宮古遺跡）<sup>8)</sup>などが報告されている。このうち東奈良遺跡の事例（弥生時代中期）は表面に赤色顔料（ベンガラ）による円や線状の文様が施されており、糸綴じの孔は無いことから本遺跡の盾とは異なる系譜にあると考えられる。斗西遺跡の事例（古墳時代前期~中期）は糸綴じの穿孔を有し、段の間隔は本資料よりも広い。また、保津・宮古遺跡（古墳時代初頭）より出土した盾は多数に割れているものの、全体の形状を知り得る遺存状態である。盾はオニグルミの材を板目取りし、盾の全体に糸綴じの孔を穿つ。穿孔の配置によって中央から上下に凸状の文様を対称となるように作り出しており、漆などの塗布は見られない。

盾の用材としてモミ属が多いなかで、本資料に見られるように、広葉樹材を用いた事例も確認されつつある。しかし、こうした事例は現段階においては限られており、樹種の傾向を把握できるまでには至っていない。今回確認したように盾の用材にトチノキを用いた理由は明らかではないが、モミ属とトチノキを木材の物理的性質において比較すると、いずれにも共通する特徴として軽軟で加工が容易な点があげられる。また狂いが生じ易く保存性が低い点も両樹種の共通した特徴である。

##### 脚付盤

脚付盤に用いられていたケヤキは弥生時代から古墳時代に刳物容器として多用される。このような利用の事例としては鬼虎川遺跡出土の耳付方形容器や、四脚合子<sup>9)</sup>、大阪府池上遺跡出土の鉢や把手付鉢<sup>10)</sup>などがある。刳物容器の材にはケヤキのほかヤマグワやクスノキを用いた例があり、特に当遺跡周辺の遺跡より出土した刳物にはヤマグワ（クワ属）が多く用いられる傾向にある。

## 判物種

桶状容器に用いられる樹種として針葉樹材にはスギ、広葉樹材にはタブノキ、ヤマグワなどの出土事例がある。本資料に用いられていたイヌガヤは粘り気が強く木理が緻密で、耐水性に優れる特徴を持ち、弓や杓子、田網棹などのほか判物の材としても利用される。鬼虎川遺跡では堅朽了や容器蓋、弓、刺突具としての例が確認されている<sup>11)</sup>ほか大阪府山賀遺跡では杭材としての利用が確認されている<sup>12)</sup>。

## 註

- 1) 平井信二『木の辞典』第1集 第1巻 1979
- 2) 中原 計・秋山浩二「樹種からみた集落環境と弥生木器生産—瓜生堂99・01調査区における木製品・自然木の同定検討から—」『瓜生堂遺跡1』 考察・分析・写真図説編— (財)大阪府文化財センター調査報告書第106集 2004
- 3) 中川正人「木製府の造形技法と系譜」『赤野井湾遺跡』第4分冊 琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書2 (財)滋賀県文化財保護協会 1998  
短甲とされている資料は小片で当初の形状は不明であり、高杯である可能性も指摘されている。
- 4) 財団法人元興寺文化財研究所「IV 徳丹城跡SE1300井戸跡出土木製品について」『徳丹城跡』—第65次発掘調査— 岩手県紫波郡矢野町教育委員会 2007  
冨は9世紀第3四半期頃に埋没した井戸底より出土しており、必然的に徳丹城期(9世紀前半)を下限とすると考えられる。放射性炭素年代測定では640年～690年という値が得られており、冨が伝世、転用された可能性を含め、鉄製冨との比較から7世紀後半から8世紀前半内での製作年代が考えられている。
- 5) 3) に同じ
- 6) 能登川町教育委員会『斗西遺跡』 能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集 1988
- 7) 東奈良遺跡調査会『東奈良』発掘調査概報Ⅱ 1981
- 8) 田原本町教育委員会『田原本町埋蔵文化財調査年報』1 1990
- 9) 財団法人大阪文化財センター『山賀』(その3) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1984
- 10) 財団法人大阪文化財センター『池上遺跡・四ツ池遺跡発掘調査報告書』第6分冊 自然遺物編 1980
- 11) 財団法人東大阪市文化財協会『鬼虎川の木質遺物』—第7次発掘調査報告書 第4冊— 1987
- 12) 9) に同じ

## 参考文献

- 島地謙・伊東隆夫『図説木材組織』 1982  
北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑』木本編Ⅰ・Ⅱ 1979  
島地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』 1988  
貴島恒夫・岡本省吾・林昭二『原色木材大図鑑』 1962  
『木器集成図録』近畿原始編 奈良国立文化財研究所 1993

(木沢直了)

### 3) 東郷遺跡出土木製盾の塗膜構造分析

#### 1. 分析対象

No.1 木製盾

#### 2. 分析内容

- ・塗膜の断面観察と成分分析
- ・綴じ糸の繊維同定

#### 3. 使用機器および分析条件

- ・全反射フーリエ変換型赤外分光光度計(以下、FT-IR)(SENSIR TECHNOLOGIES製 Travel IR)
- ・マイクローム(株)日本マイクローム研究所 ST-201)
- ・生物顕微鏡(樹オリンパス BX50)

#### 4. 方法および結果

塗膜の断面構造、塗膜の成分および綴じ糸の繊維種を調べるため、破片の表裏面(便宜上凸面を表面とした)から微量の塗膜、裏面から綴じ糸を採取した(写真15)。

まず、塗膜の断面構造を調べるため採取した塗膜を樹脂に包埋し、マイクロームを用いて断面の切片を作製した。永久プレパラートにした後、生物顕微鏡(透過光)で断面観察を行なった。

表裏面の塗膜断面を観察した結果、塗料は木胎(トチノキ)の板目面に塗布されており、塗膜の厚さは約20 $\mu\text{m}$ であった(写真16)。放射組織に浸み込んだ茶色系で透明な漆様部分と黒色部分が見られることから、生漆に松煙のような黒色微粒子物質混ぜ塗布した可能性が高いと考えられた(写真16)。

塗膜の成分を調べるためFT-IRで分析を行なった。その結果、比較のため分析をおこなったトチノキの出上材の吸収と同様の吸収パターンがみられ塗膜の成分を確認することができなかった(第6-1図・第6-2図)。綴じ糸部分も同様に分析を行なった結果、2800~3000 $\text{cm}^{-1}$ の吸収が強く現われ、1500 $\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収がみられなかったこと、1450~1250 $\text{cm}^{-1}$ の吸収などから漆であることが判った(第7図)。塗膜の分析で成分を確認することができなかった原因は、塗膜層が薄く漆が微量であったため採取した塗膜部分に木胎が入り、出土材の吸収が強く現れ、漆の吸収が確認できなかったものと考えられた。

つぎに、綴じ糸の繊維種を調べるため採取した綴じ糸を樹脂に包埋し、マイクロームを用いて断面の切片を作製した。永久プレパラートにした後、生物顕微鏡(透過光)で断面観察を行なった。その結果、綴じ糸の下層に約3層の茶色系透明塗膜が観察された(写真17)。当初は盾表面に顔料を含まない漆層があったと考えられた。

綴じ糸の繊維断面は、抜け跡と考えられる長楕円形の細胞が見られることなどから苧麻か大麻と考えられた(写真17)。

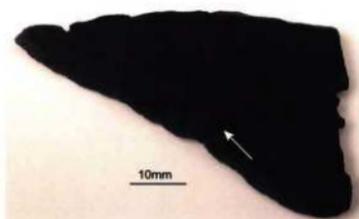
そこで、標準繊維試料として、福島県人沼郡昭和村教育委員会から提供して頂いた手引きの苧麻・大麻、また、群馬県東吾妻町教育委員会から提供して頂いた手引きの大麻(町指定文化財)を用い比較をおこなった。

その結果、苧麻の断面は細長いループ状が多いのに対し、大麻の断面は丸みのある多角形の細胞が多く、また丸みのある細胞も苧麻より太く細胞壁が厚い傾向が見られた(写真18)。

以上より、木製盾の綴じ糸は断面形状が大麻と酷似しており大麻と考えられた。

なお、綴じ糸は2本以上で構成され右捻りであった(写真19)。

(井上美知子)

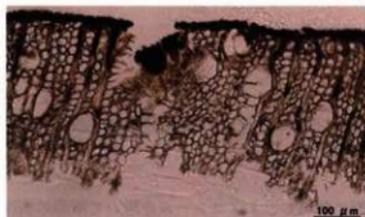


a 表面・塗膜の採取箇所

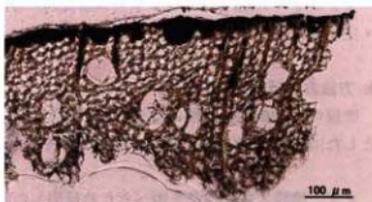


b 裏面・塗膜と縦じ糸の採取箇所

写真15 破片1のサンプリング箇所

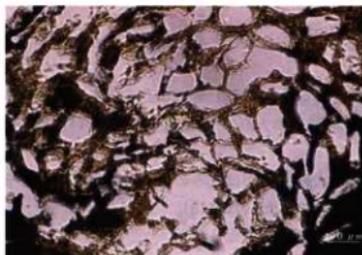
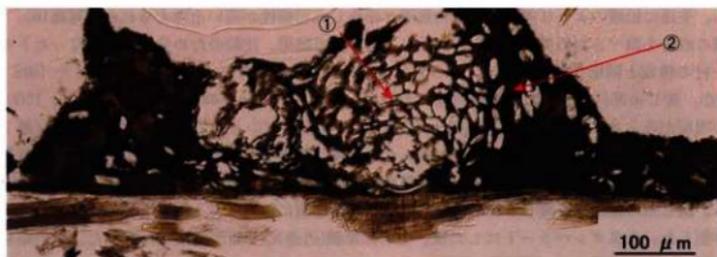


a 表面の塗膜断面

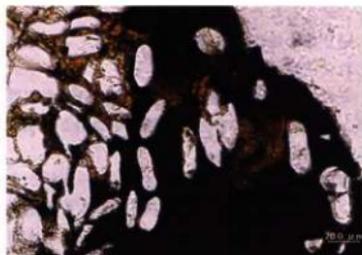


b 裏面の塗膜断面

写真16 木製層の塗膜断面

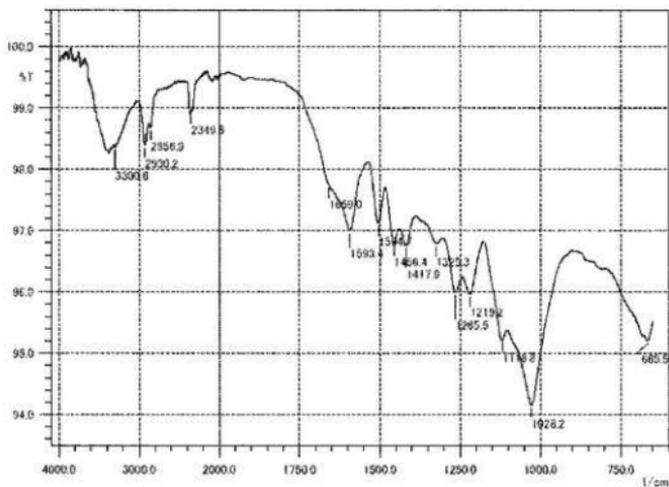


①の拡大

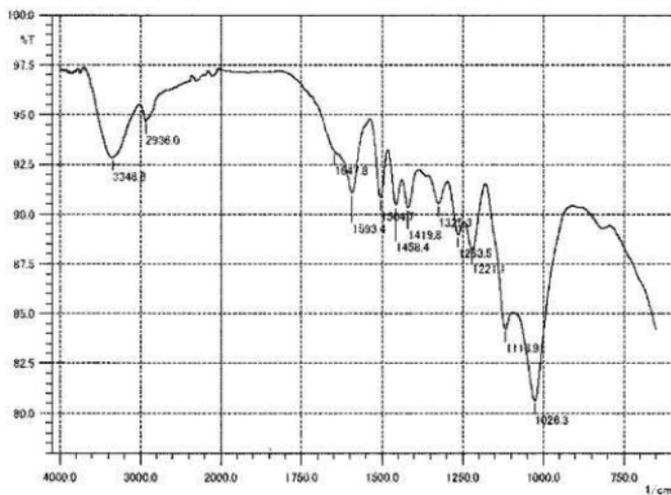


②の拡大

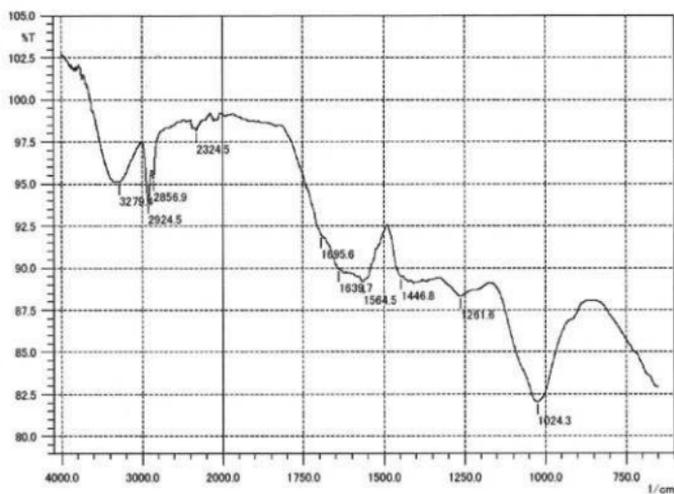
写真17 縦じ糸断面



第6-1図 塗膜のFT-IRスペクトル



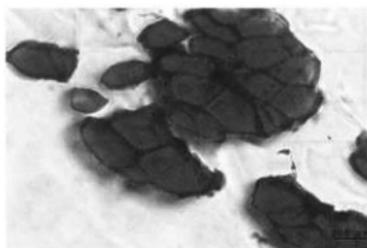
第6-2図 出土材(トチノキ)のFT-IRスペクトル



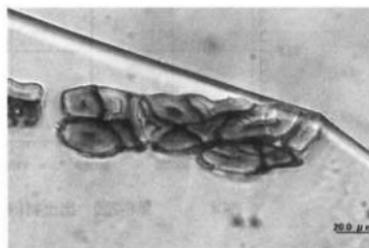
第7図 縦糸部分のFT-IRスペクトル



①昭和村苧麻

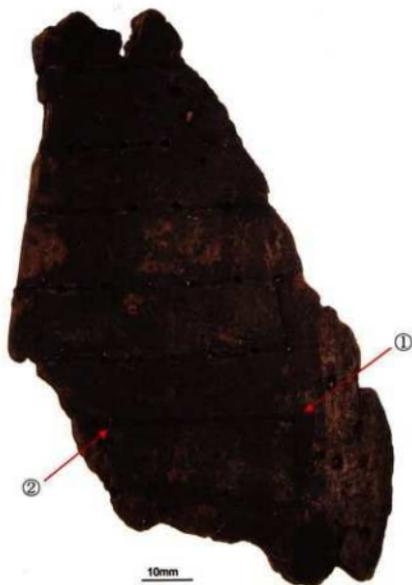


②昭和村大麻



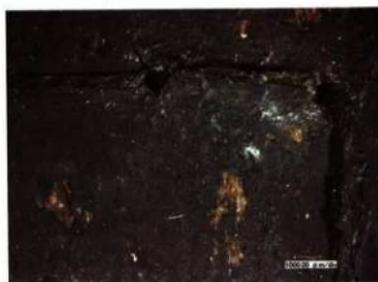
③岩島麻・大麻

写真18 標準繊維の断面



a 破片2

写真19-1 実体顕微鏡観察箇所



①の部分



②の部分

写真19-2 破片2の実体顕微鏡による画像

報告書抄録	
ふりがな	やおしないいせきへいせい19ねんどはくつちょうきさほうこくしょ
書名	八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書
副書名	平成19年度国家補助事業
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	57
編者名	藤井淳弘/高萩千秋/岸田高一/成寿佳子/内村公助/樋口 薫/荒川和哉/前井佳秀/河村悠輝/藤田志朗/木沢匡子/井上美知子
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 Ⅱ072-924-8553
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査理由	
								市町村
1-1 荻原遺跡 (2006-444)	八尾市荻原町3	27212	30	34 36 16	136 37 58	2007/2/3・6	10.25	個人住宅 (発掘調査)
1-2 久宝寺遺跡 (2006-620)	八尾市久宝寺6	27212	23	34 37 34	135 35 15	2007/3/27・28	31.25	保育園 (遺構確認調査)
1-3 東郷遺跡 (2006-289)	八尾市東本町2	27212	37	34 37 25	135 36 26	2007/1/11	18.0	店舗・共同住宅 (遺構確認調査)
1-4 東郷遺跡 (2006-462)	八尾市坂ヶ丘2	27212	37	34 37 31	135 36 48	2007/2/27	16.5	事務所 (遺構確認調査)
1-5 中田遺跡 (2006-372)	八尾市八尾本北6	27212	28	34 36 34	135 37 06	2006/11/26 2007/3/19・26・28 2007/4/18・25 2007/5/18・25	16.5	分譲住宅 (遺構確認調査)
1-6 西野庵寺 (2006-190)	八尾市東町3	27212	89	34 38 44	135 36 29	2007/1/10	18.75	丁場 (遺構確認調査)
1-7 八尾寺内町 (2006-437)	八尾市本町2	27212	80	34 37 22	135 36 11	2007/2/22・23	33.25	共同住宅 (遺構確認調査)
2-1 大竹西遺跡 (2006-414)	八尾市東岸町1	27212	34	34 38 19	135 38 21	2007/3/13・4 /20・23	33.7	共同住宅 (遺構確認調査)
2-2 荻原遺跡 (2007-1)	八尾市荻原中町2	27212	30	34 36 24	135 37 38	2007/4/9	38.0	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-3 荻原遺跡 (2007-60)	八尾市荻原中町6	27212	63	34 38 13	135 36 30	2007/6/25	12.5	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-4 木の本遺跡 (2006-261)	八尾市南木の本4	27212	35	34 38 41	135 36 31	2007/1/15・1 6・6/11・7/12	142.0	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-5 久宝寺遺跡 (2007-181)	八尾市南久宝寺1	27212	23	34 37 19	135 35 36	2007/8/7・8	27.0	共同住宅 (遺構確認調査)
2-6 久宝寺寺内町 (2007-134)	八尾市久宝寺5	27212	79	34 37 25	135 35 22	2007/7/17・18	11.0	個人住宅 (発掘調査)
2-7 小阪合遺跡 (2007-125)	八尾市小阪合町2	27212	40	34 37 22	135 38 54	2007/7/19・20	18.75	共同住宅 (遺構確認調査)
2-8 成法寺遺跡 (2007-137)	八尾市南本町3	27212	73	34 37 11	135 36 29	2007/1/25	8.0	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-9 成法寺遺跡 (2007-202)	八尾市南本町2	27212	73	34 37 14	135 36 28	2007/11/8・9	30.5	倉庫付事務所 (遺構確認調査)

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °				° ° °
2-10 成法寺遺跡 (2007-268)	八尾市南本町1	27212	73	34 37 26	136 36 20	2007/11/15	12.5	分譲住宅 (遺構確認調査)
2-11 成法寺遺跡 (2007-343)	八尾市南本町1	27212	73	34 37 27	135 36 13	2007/12/10・11	27.0	葬祭場 (遺構確認調査)
2-12 東照遺跡 (2007-49)	八尾市坂ヶ丘4	27212	37	34 37 42	135 36 43	2007/5/31・6/1	16.0	広作塚跡 (遺構確認調査)
2-13 東照遺跡 (2007-209)	八尾市北本町2	27212	37	34 37 43	135 36 21	2007/9/4	18.75	共同住宅 (遺構確認調査)
2-14 西郡廣寺 (2007-44)	八尾市泉町2	27212	89	34 38 42	135 36 23	2007/5/18	8.0	店舗 (遺構確認調査)
2-15 西郡廣寺 (2007-184)	八尾市泉町2	27212	89	34 38 38	135 36 27	2007/10/4	12.5	共同住宅 (遺構確認調査)
2-16 西郡廣寺 (2007-334)	八尾市泉町2	27212	89	34 38 29	153 36 26	2007/12/5	18.0	共同住宅 (遺構確認調査)
2-17 美濃遺跡 (2007-38)	八尾市美濃町3	27212	94	34 38 07	135 36 48	2007/5/21・22	33.25	多目的ホール (遺構確認調査)
2-18 八尾寺内町遺跡 熊笹地 (2006-522)	八尾市本町3	27212	80	34 37 21	135 35 56	2007/4/26	21.5	共同住宅 (遺構確認調査)
2-19 矢作遺跡 (2007-119)	八尾市高天町4	27212	74	34 36 55	135 35 42	2007/6/26	4.5	個人住宅 (発掘調査)
2-20 月形遺跡 (2007-54)	八尾市志紀町南4	27212	71	34 35 25	135 37 12	2007/5/16・17	33.0	分譲住宅 (遺構確認調査)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
1-1 熊智遺跡 (2006-444)	集落	縄文時代晩期～弥生時代中期		縄文土器・弥生土器	
1-2 久宝寺遺跡 (2006-529)	集落	古墳時代初期	溝・窪込み	古式土師器	
1-3 東照遺跡 (2006-289)	集落	近世	井戸・溝	七輪器・園庭陶磁器・瓦	
1-4 東照遺跡 (2006-462)	集落	古代～中世		土師器・須恵器・瓦類	
1-5 中田遺跡 (2006-372)	集落	古墳時代初期～前期	土坑・小穴	弥生土器・古式土師器・埴輪	
1-6 西郡廣寺 (2006-190)	寺院	平安～鎌倉時代	土坑	土師器・須恵器・瓦器	
1-7 八尾寺内町 (2006-437)	寺内町	古墳時代前期～近世		土師器・須恵器・園庭陶磁器	
2-1 大竹西遺跡 (2006-414)	集落	古墳時代中期	土坑・溝・柱穴	弥生土器・古式土師器・七輪器・須恵器	
2-2 熊智遺跡 (2007-1)	集落	中～近世	溝・窪込み	弥生土器	
2-3 堂梅遺跡 (2007-60)	集落	鎌倉～室町時代	小穴	土師器・須恵器	
2-4 木の本遺跡 (2006-261)	集落	弥生時代中期～中世	溝遺		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
2-5 久宝寺遺跡 (2007-181)	集落	奈良～平安時代		弥生土器・古式土器器・土師器・須恵器・甍福土器	
2-6 久宝寺内町 (2007-134)	寺内町	中～近世	土坑・溝・ 竇形り排水溝	土師器・須恵器・国産陶磁器・ 瓦	
2-7 小阪合遺跡 (2007-128)	集落	中世	溝・落ち込み	瓦器	
2-8 成法寺遺跡 (2007-137)	集落	鎌倉時代	溝・落ち込み	土師器・瓦器	
2-9 成法寺遺跡 (2007-202)	集落	中世～近世	土坑・溝・落ち込み	土師器・須恵器・瓦管土器・瀬織	
2-10 成法寺遺跡 (2007-208)	集落	中世	溝	土師器・瓦器・瓦	
2-11 成法寺遺跡 (2007-343)	集落	古墳時代前期～中世	溝	板状木製品	
2-12 東郷遺跡 (2007-49)	集落	古墳時代中期～近世	土坑・溝・落ち込み	土師器・須恵器	
2-13 東郷遺跡 (2007-209)	集落	古墳時代初葉～後期	土坑	古式土師器	
2-14 西郷廣寺 (2007-44)	寺院			土師器・須恵器・瓦器・ 国産陶磁器	
2-15 西郷廣寺 (2007-184)	寺院			土師器・瓦	
2-16 西郷廣寺 (2007-334)	寺院	古代～中世	溝	土師器・須恵器・瓦器・白磁・ 軒丸瓦	
2-17 美濃遺跡 (2007-38)	集落	古墳時代前～後期	土坑・溝・小穴	古式土師器・須恵器	
2-18 八尾寺内町遺跡 開墾地(2006-522)	集落		溝溝		
2-19 矢作遺跡 (2007-119)	集落			土師器・青磁	
2-20 弓削遺跡 (2007-54)	集落	飛鳥時代中期～奈良時代前半	土器群	古式土師器・土師器・須恵器・ 黒色土器	



八尾市文化財調査報告57  
平成19年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書

発行日 2008年3月31日  
編集・発行 八尾市教育委員会  
〒581-0003 八尾市本町1-1-1  
TEL(072)924-8555(直通)  
印刷 ㈱関西共同印刷所

〈八尾市刊行物番号 H19-131〉